

科学研究費成果報告書

令和五～七年度 基盤研究（B） 近代日本美術史における美術商に関する基礎的研究

令和八年三月

科学研究費成果報告書

令和五～七年度

基盤研究（B）

## 近代日本美術史における美術商に関する基礎的研究

研究代表 角田拓朗（神奈川県立歴史博物館）

研究課題／領域番号二三K二五二八四

目次

○概要報告

……………2頁

□史料編

・『古今書画最高値段記録』

……………

21頁

・『昭和三年度 書画売買相場』

……………

30頁

・『帝国新書画名鑑（昭和七年度）』

……………

35頁

・『帝国古書画便覧』

……………

50頁

・『昭和五年度改正 現代画家番付』

……………

57頁

○論考1

試論…近代日本美術商の存在感―「美術」と「工芸」の距離とあわせて

角田 拓朗……………4頁

○論考2

近代の横浜にみる「産地」の形成

鈴木 愛乃……………14頁

## □概要報告

本報告書冒頭にあたり、本調査研究の概要をまとめておく。

本研究は、美術界を成立させ、美術史成立に大きく関与する美術商という存在や機能、特徴を具体的に把握し、美術史上に位置付けることを目的とする。作品は、作家がつくる。そして観衆等に受容され、批評家や研究者らにより言説化され、意義・意味づけられて相対価値が共有され、美術史に定位されると理解される。その作品が観衆等に受容される方法として、展覧会や出版といった公開がひとつ挙げられる。そしてより直接的な受容の形態のひとつに、購入がある。この行為は、①作家本人との直接売買、②仲介者の存在の二つに大別されよう。このうち②を実践する業者が美術商であると、理論上は理解される。前近代では作家集団が工房を経営したため①が多く、今日では画廊などが②の役割を果たす場合が多いと、一般的に認識されている。しかしその一般認識以上の分析や考察を十分に果たした研究はないといつてよい。以上が、本調査研究の目的だった。

この目的を達成するために、令和五年度より開始した本調査研究では、文献調査及び聞き取り調査から、近代の美術商の動き、働き、意義などの考察を当初の具体的な研究手法とした。途中で、当初予定していた資料群調査が膨大な作業量となったため、物理的に諦めざるを得ないなどの困難があったものの、複数の研究手法や目的を持つ内容だったため、切り換えて、当初目的を達成するための調査研究を継続した。今更ながらであるが、改めて考えてみても、本調査研究の対象である美術商という存在は漠然とし、またその機能は相応に広範囲にわたったため、その学術的考察の理想と現実、物理的な限界もにらみつつ、可能な限りの成果をあげることと努めた。その過程については煩雑となるため、ここで繰り返すことはせず、結果、現在に至るまでに、下記の成果を得たことで報告に代えたい。

## 角田拓朗（研究代表者）

（口頭発表）『明治』をめぐるリレートーク 『美術』のつくられた—明治のモノづくりの分岐点』（愛知県美術館、令和五年四月十五日）

（口頭発表）Meiji Art Historical Research in Japan: An Overview, With Notes on My Research Trajectory (The Mary Griggs Burke Center for Japanese Art, Columbia University 807 Schermerhorn Hall, 令和五年十月)

（口頭発表）Exhibiting Meiji Art And Culture: Curatorial Perspectives (Japanese Art Society of America, Online, 令和五年十一月)

（口頭発表）One More Golden Age in the History of Japanese Lacquerware The Characteristics of Modern Export Lacquerware: The Gap Between Modern Japanese Art and Industry (Symposium: Meiji Art and Visual Culture, Chicago University, 令和六年五月三日)

（口頭発表）「近代日本 美術というあきない」（神奈川県立歴史博物館、令和六年六月十六日）

（口頭発表）「近代日本輸出美術の魅力」（神奈川県民センター、令和七年十月二十三日）

（論考）「團伊能旧蔵コレクションの存在証明—近代日本洋画史基礎形成論—」『近代画説』三四号、明治美術学会、令和七年十二月）

## 鈴木愛乃（研究分担者）

（口頭発表）『明治』をめぐるリレートーク 横浜の輸出工芸 陶磁器・漆器とその周辺—（愛知県美術館、令和五年五月七日）

（口頭発表）「横浜芝山漆器」の実像—歴史・技法・背景—（明治美術学会、神奈川県立歴史博物館、令和六年四月二十八日）

（口頭発表）「展覧会ができるまで—産地への旅と金子皓彦コレクションの修復—」（神奈川県立歴史博物館、令和六年五月十九日）

（口頭発表）「陶磁器・漆器産地としての横浜」（神奈川県民センター、令和

七年五月三〇日)

(論考)「当館所蔵 横浜写真アルバムの表紙について—輸出漆器としての観点から—」(『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』第五〇号、神奈川県立歴史博物館、令和五年十二月)

(論考)「横浜と輸出漆器 近代輸出漆器のダイナミズム」(『神奈川県立歴史博物館だより』通巻二二五号、神奈川県立歴史博物館、令和六年二月)

(展覧会図録)角田・鈴木・小川咲良共編著

特別展図録「近代輸出漆器のダイナミズム—金子皓彦コレクションの世界」  
所収論考 鈴木愛乃「『横浜芝山漆器』の実像—歴史・技法・背景—」

角田拓朗「試論：明治美術と近代産業—漆工を焦点として—」  
ほか、コラム、横浜地区漆器商等地図、生産輸出額推移グラフ、年表などを収録。

さて、なかでも特記すべきは、本期間中に、所属である神奈川県立歴史博物館において、令和六年四月二十七日から六月三〇日にかけて開催した特別展「近代輸出漆器のダイナミズム—金子皓彦コレクションの世界」である。近代横浜を焦点に、また輸出漆器を軸として開催した特別展では、近代日本における多様な美術品の売買の実態を展示という形式で本研究の成果を社会還元した。本展の準備段階の調査研究において、全国の漆器や伝統的工芸品の産地を巡り、相对比较し、「美術」の売買や交易、物流や市場といった要素の検討を深めたことは、大きな成果だったと言える。延べ一万四千人の入場者を記録した。そして、先述の同展図録という形式でも研究発表が叶い、また会期中に明治美術学会例会を開催するなど多様な成果報告となった。

最後に、本調査研究の今後の展望である。本調査研究の題目に単純に従うのであれば、まだまだ調査不足や考察不足の感は否めない。他方、三力年で一定以上の成果は十分に挙げたと自負する。この成果に加えてさらに本調査

研究の主軸に沿った研究が今後進展するのであれば、やはり近代日本の一次資料相当を見出し、研究を継続する他ない。この点は愚直であるが、常に意識し、目指さないわけにはいかない。他方、その活動を直接的に把握することが難しいことも、この三力年の調査では実感したところである。よって、より多角的な視座からこの目的について、論究することが有効だろう。その視座を据えることから、今後の調査研究の始まりとなるのだろう。

末筆となるが、本調査研究に御指導御鞭撻をいただいた諸氏、またご協力賜った企業、研究機関等に、ここに記して感謝申し上げます。  
以上、簡単ではあるが、本調査研究の概要報告とする。

## 試論…近代日本美術商の存在感

### —「美術」と「工芸」の距離とあわせて

角田 拓朗

#### はじめに

本科研調査は、近代日本の美術商の機能や価値などを検討することを目的としていた。調査研究したい対象が広く、課題もたいへんに大きいものだった。そのため、もともとこの調査研究を始める段階から、困難が予想されていたが、予想以上に近代日本の美術商にかかる一次資料に触れる機会が少なく、その存在を把握できず、徒に時間が過ぎていった。同時並行で現役の美術商の方々から聞き取りをおこない、そこから近代日本の様相を類推する調査手法を採用し、いくつかの文献で知られるところの内実などをより詳しく知ることができた。また美術商と距離のある近代工芸を比較考察の対象として集中的に調査研究した意義は大きい。確かな実績もありながらも、一方で残念ながら、その全体像を見渡すこと、詳細をまとめることも難しいのが現実であると素直に記し、反省の弁としたい。

では、そのような困難のなかではあるものの、いま研究代表者として一連の時間の中で思考したことは開陳する責務がある。そこで散文的な構成となるが、以下、二節を通じて、稿者が学び得た近代日本の美術商の諸特徴を明らかにしていきたい。第一節では、近代横浜のキュリオショップを焦点に美術商誕生の一端に迫ってみよう。第二節では、近代に刊行された価格のガイドブックやその背景にあった売買の様子などに迫ってみよう。そして、第三節では「美術」と「工芸」の位相のちがいを試論的に提示したい。近代日本において、対立項ではないはずなのに、そのような扱いとなる理由の一端を探る。以上の考察から、近代日本における美術商の存在感を浮上させたい。

### その一、キュリオショップ——「美術」を売る現場の古層

美術商の発端を明らかにすることは難しい。その定義論にも関わることなので、いま、その点をやみくもに踏み込むことはしない。「美術」という言葉が近代に作られたのだから、従って「美術商」が登場するのは近代以後となる。だが、同様の商社商店はその語の誕生を待たずに活動していたことも疑いない。近世の形態で言えば、「道具屋」「古物商」が最も近いといえようか。さらに美術という言葉が生まれた西洋寄りの商店というのであれば、居留地内の同様の商社商店を探るのが適当といえよう。すると、二枚の写真が注目される。

まず、解説のある一点から。横浜開港資料館の写真アルバムにある一葉(図1)である。夫妻と思しき男女が店先に座っている。地面と店先を隔てる板があるばかりで、果たしてこれが商店なのか怪しい部分もあり、写真に収めるために仮組して撮影された可能性もある。ただ、並んでいる品物をつぶさに見ると、仮組みの店舗の様子ではあるものの、当時の輸出美術を反映し充実した内容と見える。奥の飾り棚、それ自体も売り物だろうが、その上には多くの金属器と思しき壺が並ぶ。その下段には小ぶりの茶碗、一輪差しなどが認められる。画面奥には琴や番傘、三味線、衣服まで認められる。漆器、陶磁器、金属器が揃う点では、中規模以上の商店だと推測される。近世期の職業で言えば古道具屋にあたる雑多さを示す。これには「Curio Shop」という解説が付く。全訳すると次の通り。

日本の道具屋ほど、外国人を惹きつけるものはありません。象牙彫刻、キャビネット、漆器、竹細工、藁細工、紙器、陶磁器、卵殻陶器など、精巧な小物の製造に見られる創意工夫と巧みさは、実に見事です。日本の象嵌細工、金彩モザイク、あるいは無地の漆器は、非常に質が高く、中国製のものよりはるかに優れており、日本特有のもので、他に類を見



(図1) キュリオ・ショップ  
『横浜写真アルバム』より  
横浜開港資料館所蔵



(図2) キュリオ・ショップ  
『横浜写真アルバム』より  
神奈川県立歴史博物館所蔵



(図3) 絵葉書「横浜居留地」  
明治大学図書館所蔵  
特別展図録『繭と鋼』より転載

ません。  
漆塗りの木製の皿、カップなどは、しばしば優美なデザインと細工が施されており、お茶やお酒、その他の温かい飲み物を飲むのに用いられます。使用後はぬるま湯で洗い、乾拭きすることで、何年もその輝きを保つことができます。非常に古い漆器の値段は、ほとんど法外な値段です。象牙彫刻の中には、優れた細工のものもありますが、高価です。しかし、葉巻ケースや紙で作った革の模造品などの竹製品は安価であり、その特殊性から購入する価値は十分あります。

この解説は、日本人からの視点ではなく、西洋人の視点で記された解説と読める。用途や相場などにも触れており、相当に詳しい者の解説になるだろう。ただ奇妙なことに、漆器の素晴らしさを語りつつも、写真のなかではさほど漆器が前面にでていないわけでもない。よって、解説自体はこの店舗に特

化した内容ではなく、当時の美術品、しかも海外からの視点による感想が多分に反映された内容だと理解される。

続いて、もう一点。当館が所蔵する写真アルバムの一葉(図2)である。こちらは撮影スタジオ内に場所を移して撮影されたと推測される一点である。こちらも画面奥に小ぶりの飾り棚が並び、手前に小型の漆工品らしきものが並ぶ。家屋のミニチュアや御簾など、先の写真には写っていないかった商品も加わる。画面上部に写る団扇、扇子も目を引く。こちらの方が商品に偏りがあり、漆器商なのかもしれない。ただ、この写真のキャプションは、「CURIO MERCHANT.」とある。日本人のまなざしからすれば、漆器商と陶磁器商などの区別は容易く、区別して考察すべきだと考えられるだろう。だが海外からすれば、すべて同一で「CURIO」と捉えられていたのだろうか。この点については、サンプル数が少なく、指摘にとどめたい。

以上、二点の写真を考察した。なかなか判明し難い部分も多いが、およそ

この形態が当時の「CURIO SHOP」のステレオタイプと考えてよいのだろうか。さらにもう一点、資料を加えたい。横浜居留地内を撮影した絵葉書(図3)である。土産品店が集まる通りを写した写真には、「Fine Art」「Art Curio」双方の文字が認められる。残念ながら、その店舗内の写真までは現存していないようだが、この併存状況こそ、日本の「美術商」立ち上がりの上で重要な状況であり、また美術を売買する店舗としての始まりだと考えられる。横浜はすなわち、日本でつくられた産品が西洋人に「CURIOないしはArt」として受け止められ、販売された、ひとつのスタート地点であり、かつ「美術」を販売開始した地点でもあると理解することができるのである。

## その二、相場——整備される市場

次に、文献史料から、美術商の活動の位相をとらえてみたい。この調査の開始時点で稿者の興味の焦点は、美術商による作品の価値付け、評価がどのように行われるのか、だった。個別の事象、状況が想定されるが、大きく言えば、近代となっておよそ今日につながる美術市場、マーケットが確立されていく過程とそしてその傾向と美術史的価値の連動について具体的にとらえたかった。本調査研究を開始した当時、より楽観的に考えていたが、その後、なかなか近代の美術商の一次資料やそれに類する資料等に出会うことができなかつたのは遺憾だった。他方、現代の美術商の方々等に聞き取り調査を複数行い、およその成り立ちを類推するかたちで想像ができた。要するに、現代に至るまでの市場の形成と成立を考えると、やはり近代におけるその形成過程の内実が重要だということである。戦前と戦後で大きな断絶はあるものの、いわゆる円を主体とした経済圏の成立とともに、新古の美術品の商取引が活発化した近代の様相を明らかにする意義は、インタビューを重ねる中で、多くの識者からも期待をされた点である。

まず仮説として、その商取引、市場が立ち上がり、大凡の相場が徐々に定

まっていた時期が近代だと仮定しよう。近世以前にも同様の相場等は存在したろうが、円を単位とした資本主義市場という意味で、近代と近世では大きな隔たりがあり、また現在でも日本国内の新古美術品の取り扱いの主軸を担う東京美術倶楽部の成立も近代であることから、近代から現在までを視野に入れ、大きなまとまりとして理解し、考察を加えていくことが適当である。そこで具体的に、その市場形成過程の一端を示す史料群を対象として、「相場」の成立の背景を浮かび上がらせ、先の仮説を証明したい。

このとき、近代の新古美術品の具体的な取引として注目すべきは、売立である。現在、東京文化財研究所がその目録データベースを公開し、研究に資する体制が構築されている。これにより、各作品の移動の詳細やその折の取引価格など、様々な情報を得ることが出来る。本調査研究でもその知見を大きく活用したところではあるが、本稿ではさらに異なる資料によって、その売り立てにかかる「金額」そして「相場」について迫ってみたい。なお、本報告書では、参考に資するため、本稿に関連する部位、主にいわゆる近代の美術品の売買取引にかかる部分を抜粋し、本書後半部に掲載してある。そして考察の手順としては各資料の特徴を分析し、美術市場の動向、価格決定の過程を類推していく。

まず基礎として考えておきたい史料が、『古今書画最高値段記録』である。表紙には「新古書画最高値段記録」と記載があるが、本文中は「古今書画最高値段記録」で統一されていることから、後者を書名として扱っていく。本書発行にかかる奥付はなく、表紙から理解されるとおり、帝国絵画協会・書画売買機関社による発行で、非売品だったと考えられる。複数年度にまたがって刊行されたようで、附録を除く本編は大正十年の編纂、附録が同十四年の編纂と読める。非売品とあって一般書籍のような販路を辿ったわけではなく、業界人を通じて用立てられる者だけが使用したと想像される。架蔵本には残念ながらほとんど書き込みがなく、画家名の脇に赤鉛筆で傍線が引かれている程度である。

その内容は、巻頭にある「はしがき」によれば、第一次世界大戦後の四カ年の売立記録をまとめたものとなっており、内容をつぶさに見ると、大正五年から同九年に及ぶ売立て結果の総覧である。画家ごとに、作品名称と落札価格が棒目録となっている。およそその期間の売買記録、そして目立った作品の売立金額が確認でき、ここから「相場」を類推することが可能になる。たとえば、狩野探幽のある作品を入札したいと希望する場合、その過去の記録から、画題、大きさ、描き込みの疎密などを勘案し、またその落札年と応札する時点の物価変動を勘案しながら、入札価格を決定するという方法があると、本書では説いている。闇雲に価格を決めているわけではなく、およその商取引の件数が重ねられた大正期の価格はそのひとつの基準とするにたり得る、すなわち「相場」が成立したと考えられたわけであり、ここにおいて近代そして現代へと連なる美術市場の成立を大正年間に見ることができ。一般論として考えてみても、明治後半によりやく社会制度が整備され、大正の大戦景気により、新興富裕層が増えたことにより、美術市場は活発化したと考えられる。本資料は、そのことを裏付ける資料となる。

本書は価格推定の「虎の巻」として刊行されたと目され、管見の限り類書は見当たらない。ただ同様の役割や効果をもつ書籍は何かしら存在したであろうとも容易に想像できる。本書の内容構成だが、「古代之部」計一四八頁、「支那之部」計二四頁、「現代之部」計二三頁、そして巻末に「附録」計四八頁の大きく四項目に分かれている。頁数としては「古代之部」が本書全体の半数を占め、大正十年以前に没した画家は「古代之部」に加えられているため、私たちが一般的に近代の画家だと考える者の一部が「古代之部」に収録されている。「附録」には取引にかかると様々な事案が記されている。たとえば贋作の作り方、見分け方なども記されており、この部分を読むだけでもさぶる面白い。明治前期までの廃仏毀釈に伴う混乱ある時代から整備され、商取引の市場が形成される過程に起こった事件事故がいくつも記されており、いわば業界の裏話が著されている。

非売品とされていた『古今書画最高値段記録』とは対照的に、年度毎の売買記録をまとめた書物は数種類市販されていた。架蔵本には『昭和三年度書画売買相場』がある。編集者吉岡班嶺、発行は中央美術倶楽部、小林正雄、定価一円である。本書冒頭の「はしがき」「注意」に続く広告として、『古今書画最高値段記録』が掲載してある。それぞれで補完し合いながら入札の便とされたい、との意図が読み取れる。

順だつて述べれば、冒頭にある刊行趣旨を表した「はしがき」に続いて、凡例と考えられる「注意」がある。その「注意」をつぶさに読むことで、本書の内容を知り、使用方法が明確になる。本書は昭和二年の一年間、東京美術倶楽部にて売立入札をなした落札値段を集め、人名別に列記したものであるという。画題は入札目録にならない、図は「墨」は水墨画、「淡」は淡彩画、「着」は着色画、「極」は極彩色と略記する。価格が百円以上の作品を採録し、それ以下は記していない。そして蔵品を売却した家名が記されている。そして、「古人之部」計九四頁、「支那之部」計一〇頁、「現代之部」計九頁に分類してある。昭和二年に売り立てられなかった画家は含まれないわけだが、前後年度の類書を活用することでその不足は補える。

順序を遡り、冒頭にある「はしがき」に戻ろう。そこには本書刊行の意義が記されている。その冒頭段落が肝である。引用しよう。

書画は、一般の日用品などの如く一定した相場がない、欲しいとなれば千円と思う画幅へ一万円払って買取る人もあり。又投売りする場合などには、一万円出して買った品を千円で引取る人もないと言ふ様なことも、昔日は往々あったのです。

この文句は、そのまま現代でも通用するのではないか。某テレビ番組が作品の鑑定と価格をネタにして、いまや長壽番組のひとつとなっている。書画ひいては美術品は、値段があつてなきがごとし、人の好みと経済力に左右さ

れて値段が決定される、という状況は今も昔も変わりなく、またその悲喜交々は強い興味関心を呼ぶようである。

続く段落では、近来、東京美術倶楽部を始めとして売り立てが活発になり、その売買価格が透明化されたことにより「大体の値段が判る」ようになったと主張する。話はさらに展開し、その大体の値段を基本として諸条件にあわせて入札が行われることから、「標準相場」が成立するのだと声高に主張する。ここで前段との矛盾が認められるが、真意としてはこちらにあり、データの蓄積による相場の成立を重視しているのは間違いない。しかもその「標準相場」は東京のみならず、全国共通であると説き、画商のみならず一般鑑賞家もこの標準相場を基礎にして売買が可能だと説く。このため画商の一部からは嫌がられるだろうとも記してある。本書があればすべての作家作品の標準相場が明らかになるとは思わないが、何もない、手探りなままで入札するよりも、十二分な情報がここに含まれていることは間違いない。ちなみに、古くは東京と地方で若干相場は異なっただけというが、情報化社会が深化することで、現在ではさらに東京相場に依存する傾向にあるという。

さて、『古今書画最高値段記録』『昭和三年度 書画売買取場』は組み物として活用するようそれぞれの「はしがき」等で指摘されている。前者が複数年にわたる画家のより詳細なデータを提示するのに対して、稿者は直近の最新データの提供という特徴がある。従って、両者を駆使することで、より確実性の高い相場価格を導き出すことが出来、あるいは作家の相対的な位置や価値を検討づけることもできるわけだ。

具体的に、「滝和亭」「橋本雅邦」で実践してみよう。前者は明治絵画のいわゆる旧派の代表であり、後者は新派の代表といえる。それぞれの価格、相場がどのようになっているのか、本書を使用することで明らかにできる。まず、滝和亭を『古今書画最高値段記録』で調べてみると、二頁(図4)にわたり、入札額が判明する。すべてが一千元を超える落札額であり、幅広い画題を描いた事実も認められる。この相場、価格帯を基礎としながら、昭和三

年の値が定まったと仮定される。すると、『昭和三年度 書画売買取場』の滝和亭の項(図5)では点数こそ多いものの、一千元を超えた事例は四件である。他方、橋本雅邦を見ると、前者(図6)では全五頁にわたり、その高額取引の様相が判明する。そして後者(図7)でも、一千元を超えた事例が二十六件認められる。以上のことから、ともに第一次大戦景気以後の経済不況が素直に反映されていること、他方、和亭と比較すると、まだ雅邦の人気は高止まりしていることがわかる。このように本書からは継続的な比較検討をすることにより、おおよその傾向を把握することもできる。そして、画題(主題)、大きさ、描き込みの疎密、素材がおおよその値段を決定していくことも、ここに記載される項目から判明する。すると、美術品の価格、値段とは社会経済に連動し変動はするものの、その裏付けられた価値があれば、一定以上の上下ブレは、常識的には業界内では考えられない、という共通した見解が生じる。これこそ、「相場の成立」なのだといえよう。個々としての美術商が単独で作りたいものではなく、その複数の動向により生まれ、ここにおいて、商取引を実践した美術商の確かな痕跡、その存在感を把握することが出来る。また、その相場が破棄される場合があるとすれば、社会がその基盤から動揺するとき、たとえば戦争や大規模な自然災害のときだろう。また画家個人の相場が崩れるとすれば、特殊な事態だといえる。

次に、現代美術すなわち存命作家を見ていきたい。この場合の価格、相場を知るためには、過去の入札結果の把握が肝要であることは疑いない。だが、多くの取引が為されない限りは、相場、価格帯を知ることが難しい。『古今書画最高値段記録』『昭和三年度 書画売買取場』の「現代之部」については、全頁を本報告書巻末の資料紹介に掲載したので、比較参考していただきたい。先に述べたように、画題(主題)、大きさ、描き込みの疎密、素材がおおよその価格帯が決まり、入札の結果で、その最終的な価格が決定されるわけだが、現代美術の場合、その価格帯決定の指標となる点数が確保される場合が少ない。また前年度に取引されていない場合もある。すると、何を頼りにす





れば良いのか、という話になる。そしてここで登場する考えが、ネームヴァリユーである。

このとき便利なのが、『帝国新書画名鑑』『帝国古書画便覧』になる。その奥付を見ると、前者は昭和七年一月一日発行であり、後者は同年四月一日発行である。しかし、その装丁から考えるに、類書であり、一組として発行されたと考えられる。先述した『古今書画最高値段記録』『昭和三年度 書画売相場』が価格に注意を向けたことに対して、本書は作家に集中した編集方針となっている。先に『帝国新書画名鑑』を論じるが、こちらはいわば名簿であり、番付の機能も有しており、それが氏名の順序に反映されている。近代日本の美術家番付については、東京文化財研究所のデータベースで数多く公開されている。番付紙面の上部、文字の大きい作家が有力者であり、次第に下段に、文字も小さくなり、その作家の価値評価がヴィジュアルで理解できる摺物である。『帝国新書画名鑑』などでも、その理解が共通し、巻頭から順に、ネームヴァリユーのある作家が順に並んでいる。

巻末の資料編として掲載した図版を参照されたいが、各人の住所、年齢、入選歴や受賞歴、画系や得意な主題がまとめられ、そこに価格が記載されている。価格の詳細は凡例に記されており、「価格は尺五絹本の潤筆料を標準とせり」とある。単純に算定するための、ひとつの指針ではないが、作家の人気によりおおよその価格の見通しを示している。その価格決定は本書刊行者おそらくは美術商に近い出版人の仕事だったろう。また一定の基準で作家たちを相互比較できる要素ともなる点が面白い。無論、この価格は推定されたひとつの基準であり、様々な要素によって指標価格は変動するわけだ。そして圧倒的に日本画家が多く、洋画家は岸田劉生のみである。また後述するが、工芸家、彫刻家にはその基準価格が明記されていない点も特徴的だ。加えて、本書の興味深い点を記しておけば、物故者一覧や鑑定者一覧が付属され、本書一冊でいわゆる近代の画家たちの様相が把握できる点にある。また電話番号も明らかにされており、本書を活用して画家に直接注文するこ

とも可能だった。本書とあわせるかたちで発行された『帝国古書画便覧』はより広く古書画を扱う総合便覧として編纂されており、流派や系統などの系図も記されている。専門画家の一覧では没年の古いものから記され、直近の昭和年代まで継続してまとめられている。そこで採集されている情報は「別号」「流派」「長所」「享年」「没年」「年代」「価格」である。本書緒言などにはこの「価格」が何か明記されていないものの、『帝国新書画名鑑』から類推して、同様に尺五の潤筆料を示唆しているのだろう。

以上のような出版物による整備がなされた背景には、活発な商取引があったことである。市や競への入札参加資格をもつ者すなわち美術商の存在がこのような資料からも類推されるわけだ。本資料からは、入札によって一般の個人が美術商を通じて、作品の売買へ参加したことを示唆している。美術商がその仲介者であり、顧客以上に金額に精通し、その上げ下げを操作する立場にあるといえる。とはいえ、ここまで見たとおり、おおよその相場が成立すれば、よほどの要件がない限り、個人でも作家と直接的に商取引が可能にもなる。次節では、この点の考察を深めたい。

### その三、販売店舗の有無

前節までの考察により、おおよそ大正年間までにいわゆる美術市場が成立し、一定の史的蓄積を所持し相場を得たと考えて良いだろう。ただし、前節で細かく検証できた事例は「絵画」の場合に限定されていた。他方、彫刻と工芸は単価なども示されず、その活発さが認められない。ここにおいて、絵画と彫刻工芸の販売の具体相が異なると指摘することが可能だろう。

本調査研究では、近代輸出漆器に重点を置いたことは本報告書の冒頭にある概要報告でも記した。工芸品は明治政府が万国博覧会で日本の美術を発信する際に、極めて重要な産品と位置付けており、その延長線上で漆器の生産は後押しされていた。その局面においては、工芸は絵画よりも重視されてい

たといっても過言ではない。それがいつ逆転したのか、という点、ひとつはジャポニスムの終焉を契機として考えることができるだろう。すなわち明治二十六年シカゴコロンプス万国博覧会でその兆候が認められ、明治三十三年のパリ万国博覧会でも顕著となった日本趣味のいわゆる飽和そして衰退現象である。そこから単純な日本イメージに連なる工芸品や絵画作品などは政府の後押しをうけづらくなり、個別の改良に焦点が移り始めていった。国外向けの漆器の粗製濫造という指摘もあるが、国内生産でも同様のことがあったのではなからうか。

ここでさらに視点を変更し、漆器の販売についてまとめてみる。漆器は、周知の通り、基本は共同制作になる。木地師、塗師が基本で、その後さらに加飾（蒔絵、沈金、芝山細工など）が加わる場合がある。それらをまとめるのが「問屋」であり、いわゆる作家名というよりも問屋名、工房名が重視される。そして、この問屋や工房が、販売の主体である場合が多い。すなわち、実際に作品、モノが列ぶ実店舗を有している場合が多いと推定される。この傾向は陶磁器やその他工芸品も同様であろう。

他方、「美術」について考えてみよう。工芸がそう意図して発信するようになるのは近代以後、さらに狭義で限定すれば、昭和二年（一九二七）に「美術工芸」が日展第四部として加わって以後となる。そして今もってその「出口」に苦慮すると産地では聞く。つまり販売先がなく、流通にのらないのである。問屋自体が販売店舗を構えるにしても、いわゆる産地の中である場合は自然に考えられても、他方、都市圏への新出は困難だと聞く。あるいは問屋が代表して、ホテル業界や飲食業界など、個別に営業をかけて顧客を確保する生産販売する型も顕著であり、有効な取引手段だという。その体制が戦後にも大きく変化し百貨店などをひとつの売却先、出口として機能していた時代も長かった。しかし、多くの工芸作家、工房はその販売に苦慮し続けている。近年では中川政七商店のように、旗艦店に預け販売する商機を小規模工房も持ち得ているが、それはほんの一握りの都市型の成功例である。

実作品を売買する店舗をもつ、この事実を試験的に考察していこう。いま指摘したとおり、近代そして戦後と現代に至るまで、陶芸や漆工の場合は、実店舗をもつ場合が多かったと考えられる。実店舗が小規模だった場合には問屋などを介して直接売買する取引もあったと考えられる。また百貨店などで売買されることもあっただろう。いずれにせよ、絵画と比較して、実作品を売る場はより多く設けられていたと考えられる。

一方で絵画はどうだったかといえば、作家個人で販売店舗を設けていた事例はほぼないといって良いのではないか。例外として挙げるべきは竹久夢二の経営になる「港屋絵草紙店」が代表的な事例だろう。ただし、この場合も、近世の絵草紙屋をモデルケースとするいわゆる版画等を主要商品としていただろうし、日本画洋画といったいわゆる本画が主力商品だったとは考えられない。この事例の延長線上でいえば、新版画を主とする版画類は、たとえば渡邊木版美術画舗のように、実店舗をもって販売を続けた事例として挙げられる。また創作版画の場合は、同人誌販売という手法があった。

以上の比較例を考えると、日本画洋画の新作販売は、ほぼ店舗販売という事例は確認し得ない。他方、近代においてはデパート、百貨店の存在が重要だった。特に絵画の場合、百貨店美術部が主催者となり、画会を組織し、新作絵画の出品販売を担った事例が近代では数多く認められる。彫刻工芸について、デパート売りが活発だったのかという研究は途上であり、残念ながら比較するまでには至らない。ただ、いわゆる美術工芸と日常使いの工芸とで大きな違いがあったことは想像に難くなく、いわゆる日用品は雑器のコーナーで販売されたのに対して、「美術工芸」は絵画同様のデパート内画廊（美術部）経由で販売されたと考えられる。

そして、この新作販売におけるおよその相場、価格帯を知るためには、過去の入札も当然重要だが、直近の画家の評価を知ることが大切だったと推察される。そのことを裏付ける史料が、名簿類である。本稿で具体例として挙げるのが、『昭和五年度改正 現代画家番付』である。こちらは昭和五年度

時点で、現役作家をまとめた一冊になる。日本画、洋画といういわゆる画家に終わらず、彫刻、工芸の作家たちも加えられている点で興味深い。番付という署名ではあるが冊子体であり、金額に関わる要素が含まれていない点が、ひとつの特徴である。では、これは何に供されたのか。番付という一枚摺の情報量では記載しきれない、経歴や住所が明記されている点に特徴がある。この住所を頼りに、たとえば画の注文が入る場合がある。あるいは、新進画家として売り出し中であれば、自らこの番付をもって顧客などへアピールすることができる。私たちが想像する以上に、近代においては各作家に直接注文することが普通のことだったのかもしれない。

## おわりに

本稿では、近代日本における美術商の諸相を論じるため、各種の文献資料を用いた。美術史にとって美術商はいわば裏方の存在である。あくまで歴史の表にその名が登場し残るのは、作家や作品であり、あるいは著名な蒐集家である。その価格やその仲介を果たした美術商は歴史の裏側に隠れてしまう。否、そもそもそれは社会の表層にさらけ出すことに馴染まず、近代そして現在まで同様だったのかもしれない。そう改めて考え直したとき、個別の美術商の動きを追いかけることよりも、その大きな動態、存在感をとらえる方法論にこそ意義があるのではないかと思いついた。そこで利用したのが、本稿で言及した史料類になるが、そこにあらわれた数字はある種淘汰された情報でありながら、それらを読解することにより、「美術商」という存在感を浮き彫りにできたと思う。個別の商店商社を対象にせず、おおまかな相場の成立という観点で本稿は論じてきたが、さらに個別的に、厳密に、その活動が史的価値とどう連動するのかが、また別角度から論じなければならぬ。

最後に。本調査研究を通じて、いわゆる「美術」というカテゴリー内にある「絵画」と「彫刻」「工芸」との絶対的な差を感じずにはいられない。先に「美

術」と「工芸」が対立的に語られると指摘したが、本稿の視点からすれば、「美術」と括られた市場の多くが絵画だといえる。古美術の中で言えば、いわゆる茶道具としての工芸全般の存在感は確かなものの、しかしそれらが近代の工芸と直結して市場が成立していたわけではない。概観して、新古の絵画にこそ「相場」が成立し、華々しく入札すなわち商取引が確認できるとまとめることができる。そして新たに属する現代画家たちは店舗を持ち得ず、画商や百貨店美術部などが仲立ちした取引が一般的だった。どこかしらの店舗に赴いて、作品を検討して購入できるという商取引が通例ではなかった。画商等による持ち込み、百貨店や画廊によるグループ展、個展など、様々な形態があつたにせよ、絵画においては、作家自身が店舗を設けて販売する形態はほぼ無かつたといつてよい。他方、工芸では店舗を設けている場合が多く、むしろ、美術商もとい商店の存在が大きかつた。古道具は道具屋で、新作は店頭で販売する形態を持ち得たといえる。

「美術」というカテゴリーのなかで、「絵画」と「工芸」のこの違いはどう理解すれば良いのか。圧倒的に絵画偏重で「美術」というジャンルが近代で成立し、現在でも同様かもしれない。しかし、工芸の重要性はここで繰り返すまでもなく、本調査研究では近代の漆器について、それこそ明らかにしたところである。逆説的になるが、本論で論じた通り、大正期に「相場」が成立したように、新古の絵画の華々しい取引がそのジャンル内部の偏向に、余計に拍車をかけたのではないか。そしてその当時の新しい工芸は横浜など一部の美術商は扱ったが、しかし多くの「美術商」が扱わなかったことが、またその差異を助長したのではないか。作品の売買という行為の差異もまた、「美術」のなかのヒエラルキー、そもそもその参与を操作してきたのではないか。

論を締めるではなく、また多くの問いを作り出してしまった。私たちはこれらをどのように考えれば良いのか。本来であれば、本調査研究でその回答にまで着地すべきであつたが、恥ずかしながら、この三カ年の調査研究では辿り着くことが叶わなかつた。また次なる機会に挑戦したい。

## 近代の横浜にみる「産地」の形成

鈴木 愛乃

### はじめに

本研究は、近代における美術商の役割を明らかにすることを目的としている。その一環で、近代の工芸における制作と販売の様相を明らかにするため、現在全国各地で制作されている工芸品の販売実態を調査してきた。しかし前論考で角田が述べているように、絵画における「美術商」のあり方を工芸の販売から見出すことは難しかった。工芸分野においては制作から販売までの過程は様々であり、その多様さもまた、他の美術品とは異なる点であると見えよう。いっぽう、訪れた各地で共通して実感できたこともある。それは制作から販売に携わる人々が集って「産地」を形成し、活動の基盤とすることの重要性と、「産地」が発信するブランドや独自性が、それを遵守するにせよ、反発し逸脱を図るにせよ、強く意識されていることである。

工芸品の制作・販売者が産地に帰属する意識は、近代以前からも工芸制作の根底にあった。鍋島焼のように、近世の幕藩体制下では、厳しく技術流出を取り締まっていた例もあった。そして近代になると藩の統制から解放され、交通網の発達によりモノや人の動きがさらに活発になった。加えて外国からの需要が増加し、各産地が輸出品制作に一斉に注力すると、同じ地平で新たな顧客を獲得する必要が生じた。こうした状況において、制作・販売の拠点となった地域と、そこに伝わる伝統的な技法・意匠が持つ固有の特徴は、より一層工芸に関わる人々に強く意識されたと考えられる。各地域において程度の差はあるが、地名を冠して流通する工芸品は、他地域と異なる材料、技法、意匠を特徴として押し出し、消費者に訴求する。地域に基づく独自性を主張する傾向は、工芸品が絵画や彫刻などと大きく異なる点の一つである。

よって本稿では横浜の漆器商とその周辺の活動を追い、工芸品の制作が行

われていくに従って産地として成立する過程を検討したい。横浜は近世には大規模な漆器制作の伝統はなく、近代になってから制作が盛んになった。他の産地と比べて特異な状況ではあるが、近代における新たな産地の形成について検討するには格好の例といえる。横浜に人々が集い、産地となる過程について検討したうえで、横浜における工芸の特徴を確認する。

### 横浜における漆器商、職人の増加

工芸品を制作する地域が産地として認識されるには、制作・販売に携わる人々が地域に定着し、生産量や生産額が増加することがあげられる。近代工芸の制作・販売活動が活発だった地域の多くは、材料が近隣に産出し、近世以前から工芸が重要な産業として根付いていた。いっぽう横浜は材料に乏しく、豊富な人材や大規模な生産を行う体制も揃ってはいなかった。しかし安政六年（一八五九）の開港にともない、貿易港として急速に発展していく中で、各地の工芸品を扱う商店が次々に出店した。輸出に対する地の利から、当地で制作も行われるようになった。

横浜に最初に入ってきたのは、近世以前からの漆器生産地で工芸品を扱っていた商店であった。駿河の商人は安政五年、横浜へ出店し外国向けに商売することを志願する。その結果、安政六年に現在の本町二丁目にあたる一区画を借地として与えられ、漆器商や生糸や茶を扱う商店が出店した<sup>1)</sup>。隣の区画には江戸の漆器商も出店しており、周辺には幕府の主導により二〇軒以上の漆器商が店を構えていた。このように、外国への漆器販売は開港前から期待されており、その環境が整えられていた。

明治末に横浜で活躍していた人々の履歴が書かれた『横浜成功名譽鑑』をみると、横浜に漆器商が開業する際の様々な経緯を確認できる。産地から出店した例として、本町一丁目到店舗があった漆器売込商・砂張屋の今村直之助があげられる。もとは静岡の漆器商であったが、新開地への期待から明治

十三年（一八八〇）に横浜に開業し、国内各地の漆器を販売したほか、舶来品も扱うようになったという。矢入屋漆器店の横山孝次郎も静岡の漆器商・矢入商店で経験を積み、明治十三年に横浜に矢入支店を開業した。

別の商売から漆器商に転換した例もある。住吉町二丁目の漆器貿易商・小川泰助は静岡で製茶売込商をしており、明治十三年に横浜に出店する。しかし明治十五年になると漆器貿易を兼業し、明治二十三年には本業をやめて漆器専門に扱うようになった。また、住吉町二丁目の漆器売込商・藤井彦兵衛は千葉県長生郡出身で、開港直後の萬延元年（一八七〇）頃に横浜に来て綿布の貿易をしていた。その後弁天通りにあつた藤井商店に入つて店を継ぎ、徐々に漆器の輸出を始め、特に人力車の輸出を積極的に行うようになったという。このように、他分野の商店が漆器業へも参入し、専業とすることも多かった。これは各地の文物が集積する貿易港という立地と、古くからの漆器産地ではないため制約が少なく、比較的自由に活動が行えたからこそ可能だったと考えられる。

いっぽう和洋紙卸小売商・青木勝次郎は、明治元年に居留地の商館に勤めていたが、明治四年に独立して弁天通りに漆器商を開くも失敗し、後に和洋紙類の発売を行つて成功を収めたという。<sup>③</sup>当時の人名録に掲載されている漆器商の欄を時系列で追うと、名簿に掲載されている商店が頻繁に変わつていくことがわかる。新規参入、別事業への転換も多かっただろう。また、「雑貨商」「美術商」と称する商店が他分野とともに漆器を制作・販売する例も一般的にみられる。販売の仕方は様々であるが、需要の増加に伴つて徐々に漆器に関わる商人が増え、横浜に次第に定着していったと考えられる。

例えば明治十四年発行の『横浜商人録』には、漆器を扱っていた「塗物商」が五九件、漆塗りを手掛ける「塗師商」が一三件、「蒔絵商」が三件記載されている。<sup>④</sup>明治二十三年には、横浜市と久良岐橘樹両郡の漆器制作に関わる営業者によつて横浜漆器職業組合が設立された。明治二十八年の商工局調査によると、設立に際しては「従来ノ弊習ヲ除却シ粗造ヲ矯メ精巧ヲ旨トスル

ヲ目的」としていたという。<sup>⑥</sup>明治十年代後半になると、海外における日本の工芸品需要が落ち着き、外国向け漆器が必要に迫られるため粗製乱造に傾いた点も問題になつて輸出不振となる。<sup>⑦</sup>輸出の落ち込みによる危機的状況へ一丸となつて対応するため作られたと考えられるが、団体としてお互いに引き締めを図る必要があるほど、漆器産業に関わる人々が増加していったことがうかがえる。明治三十二年には横浜漆器商同業組合も設立され、七二名が在籍していた。<sup>⑧</sup>

漆器商が次々と出店したのに伴い、制作も徐々に始まつた。前述した明治二十八年の商工局調査には、「横浜開港以来東京及会津地方ヨリ横浜市ニ来住スルモノアリテ外商ノ注文ニ応ジテ静岡其他各地方産出ノ漆器ヲ模製スル」と書かれている。<sup>⑨</sup>職人が外部から移住し横浜に根付いたと考えられていたのである。横浜はもともと漆器の産地ではなかったため特徴的な技術や意匠を持たず、まずは各地の漆器の模倣から始まつたとされている。また次の話も伝わっている。明治十二、十三年の頃、ドイツ商人・ウイケレル（ウインクレル商会）が、輸出向けに作られた漆器の粗製乱造を憂慮し、静岡、会津、東京の職人を集めて素地の乾燥器を備え付けた製造所を設立したが、収支が赤字となり廃止された。しかし製造所の管理人が独立して自ら製造所を設け、漆器の需要の高まりに伴つて、明治十五、十六年には盛況となつた。さらに静岡、会津、東京の職人が集まり、横浜の地物漆器を制作したという。<sup>⑩</sup>細部まで事実かは不明だが、前後の漆器関係の動向から類推しても十分に有り得ることだろう。いずれにせよ、明治前半には横浜に漆器制作者が集まり、横浜の地物としての漆器が制作されていたとわかる。

明治三十一年の神奈川県による統計によれば、当時の横浜市における漆器製造戸数は二七〇戸、職人は八二五名であつた。<sup>⑪</sup>神奈川県には小田原や箱根、鎌倉など、漆器で知られる地域は他にもある。しかし横浜を除いた漆器製造戸数を合計すると一七九戸、職人は六七〇名と大きな差がある。この頃には県内で最も漆器制作が盛んに行われていた。

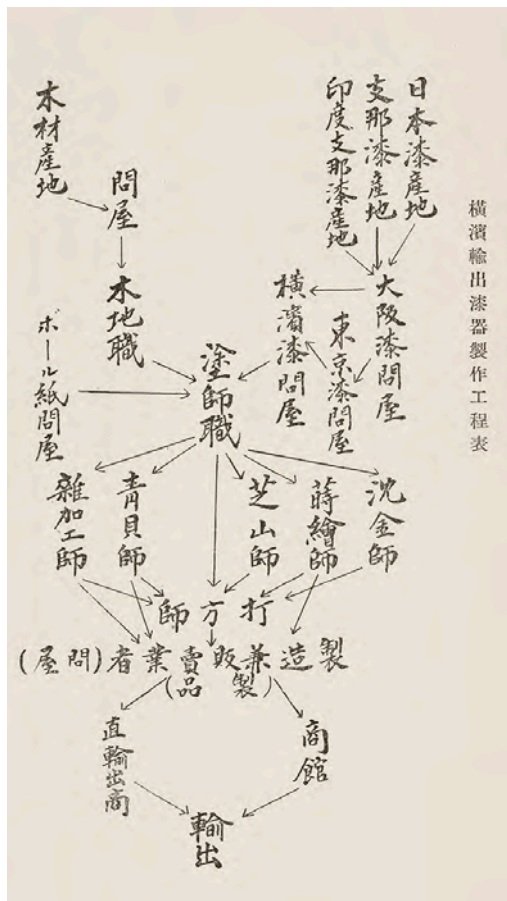
職人による組合も次々と組織された。明治三十一年に漆器の器胎を制作する職人を集めた横浜輸出漆器漆師同業組合が、明治三十二年には横浜輸出漆器塗師同業組合、横浜輸出漆器時絵師同業組合が設立された。明治三十二年の統計をみると、漆師同業組合は五〇名、塗師同業組合は一〇〇名、蒔絵師同業組合は六三名の組合員がいたという。商人だけでなく、各工程の職人に関しても同様に団体が結成されていたことから、多くの職人がおり、漆器の制作を安定的に行える基盤が整えられていたことが分かる。

これらの経緯をみると、商人が先に商いを始め、その後職人が制作を始めめることで産地が形成されたことがわかる。つまり、横浜の漆器生産においては漆器商、販売者が重要な役割を果たしたのである。現在でも、全国の工芸産地を回る中で、材料や職人が豊富にあつて商品を制作しても、商品の「出口」、つまり顧客につながる販売先がなければ利益が出ないという声を様々な製造者から聞いた。在庫を抱えることなく制作したものを確実に売するためには、販売を行う出口としての商人の役割が非常に重要である。横浜のように材料、人材のなかつた土地であっても、工芸品を販売する環境は開港前から整えられていた。商人を通じて売れる見込みがあつたからこそ技術を持った職人が集つたのである。このことは、漆器産地としての横浜の大きな特徴の一つとして挙げられる。

### 横浜の漆器制作

それでは具体的に、横浜の漆器の制作について検討したい。制作に関わる職人と工程については、昭和二年の『輸出漆器二関スル調査』に掲載された右図がわかりやすい。まず、様々な地域から漆や木材等の材料が運ばれる。横浜は工芸の材料が豊富に産出する訳ではないが、国内有数の港であり各国の文物が集まるため、材料の確保は容易だつただろう。その後は基本的に分業制で制作され、木地師、塗師、蒔絵師や青貝師、芝山師等の直接的に漆に

商工省商務局貿易課編『輸出漆器二関スル調査』、商工省商務局貿易課、昭和二年、二八頁  
横浜輸出漆器製作工程表



関わる工程のほか、金具を取り付ける打方師などを経て漆器が完成する。その設計から完成までの流れを取りまとめたのは、この表でいえば「製造兼販売業者（問屋）」であった。

明治期の横浜を代表する漆器商、美術商として知られる箕田長次郎は、こうした製造兼販売業者の一つである。箕田は江戸で骨董店を開いていたが、安政六年に横浜に店を移し、金属器や漆器の販売を始めるようになった。それぞれの職人に工芸品の制作を委嘱し、制作された工芸品は箕田の名前で万国博覧会へも出品された。つまり、商品の意匠や担当する職人を決め、各工程の職人を取りまとめて制作を指揮するプロデューサーとしての役割を持っていたのであり、職人たちはこのような商店から具体的な注文を受けて各工程の作業を行った。このような販売形態をとる美術工芸商は「囀品家」とも呼ばれていたこともあった。こうした商人が漆器制作を牽引し、それぞれの職人を指導していった。

職人はどのように横浜で制作を行っていたのか。大規模な生産体制を備えた製造業者は比較的少ない。例えば漆器商・田原栄は、四、五〇名の職工を雇っ

て制作をしていたが、このような例は少ないという記述がある<sup>15)</sup>。基本的にはそれぞれの工程を専門的に行う職人に制作を依頼したり、二、三人の職人を雇い、それぞれが木地、塗師、蒔絵等を担当して制作を行ったりと、小規模な工房が多かった。漆器制作は、陶磁器のように窠などの大規模な設備とそれに適した土地は必要なく、煙害等の問題もないため、周囲の環境による制約が少ないといえる。木材をある程度製材したあとは、小さな作業場でも制作が可能な場合が多い。またその素材や商品は、他の工芸品と比較して軽量で梱包等が容易な形状であるため、運搬にも適している。これらのことから土地が狭く人口の多い横浜においても、比較的漆器の制作は行い易かったのではないかと考えられる。

こうした職人・工房は商店が立ち並ぶ港の近くより内陸に入った地域に散在しており<sup>16)</sup>、それぞれの工房を経由して作品が徐々に完成していった。大規模な制作拠点は少なかったが、いわば開港地とその近隣全体が大きな工場として機能したともいえよう。

### 漆器の産地としての特徴

前項まで、横浜において漆器産業の展開を追ってきた。それでは、横浜の漆器産地としての特徴はどこにあるのだろうか。国内の漆器産地の中でどのような位置づけだったのかを文献から探りたい。

明治二十八年の都道府県別の漆器の産額を比較すると、最も多いのは和歌山、続いて静岡、石川、福島、神奈川の順である<sup>17)</sup>。当時神奈川の漆器生産に、近世以前からの産地に迫る勢いがあったのである。

さらに神奈川県内の生産額の内訳について明治三十一年時点の統計をみると、横浜が四〇万円、それ以外の地域の合計が八万七千四百円であった<sup>18)</sup>。当時の神奈川県内の生産額の多くを横浜が占めていたといえる。つまり、開港後に漆器生産が行われるようになった横浜は、三〇年ほどの間に急速に漆器生産

が発展し、全国的に見ても大きな産地として挙げられるほどになっていた。明治三十一年に著された横井時冬『日本工業史』には、「維新後漆器の海外へ輸出さるるもの多しと雖も和歌山県の黒江、静岡県の静岡、福島県の会津、神奈川県横浜を以て其重なる主産地とす」と書かれている<sup>19)</sup>。大規模な漆器産地と並んでいることに加え、特に輸出漆器が多く制作される産地として認識されていたことが分かる。

また同時期に行われた各県の漆器生産状況をまとめた商工局調査によれば、「横浜ニ於テ製造シ外国ニ輸出スル漆器ハ其種類多ク枚挙スヘカラズト雖モ多クハ茶箱、組物、手袋入、手巾入等ノ実用品ニシテ美術的裝飾品ハ至テ少ナク玩弄物ニ類スルモノモ亦多額ヲ占メ其用途詳ナラサルモノアリト云フ」とある<sup>20)</sup>。横浜において制作されていた漆器の種類が記されているが、比較的廉価で実用的な商品が幅広く作られていたことがわかる。

このように、新興の産地であった横浜は、輸出向けの廉価な製品を中心に扱うことが特徴だった。さらに大正五年（一九一六）に著された神奈川県内務部の『神奈川県ニ於ケル陶磁器業及漆器業』をみると、他の産地と横浜との違いが明確になる。要約すると、輸出漆器の生産は静岡が最も多く生産し、次いで横浜、箱根と続く。いっぽう会津、山中、高岡、金沢、黒江、輪島などもかつては輸出漆器を生産していたが、その価格が著しく低下しているために商品を作り続けることができなかったという<sup>21)</sup>。多くの産地において、横浜のような廉価な輸出漆器の制作が難しかったということは、逆にいえば横浜が初めから輸出向け商品の制作を志向してできた産地であり、その需要に特化した生産体制が確立されていたことを示している。

### 横浜の漆器の独自性

その地域で培われた技法、他産地と違う特徴等、地域の工芸の持つ独自性は、制作・販売活動の主軸となる。輸出に特化した商品を量産する新興の産

地であり、他所からの職人がその制作を担った横浜においては、どのようにその意識が形成されていったのだろうか。

横浜の漆器について、明治後期以降の文献により具体的な特徴が記述される例がみられるようになってくる。なかでも注目すべきは「芝山漆器」という言葉である。これは昭和の初めから、横浜の漆器を代表する名産品を意味する名称として文献上に散見されるようになる。

「芝山」とは芝山象嵌と呼ばれる裝飾技法の一つで、器物の表面を意匠の形に彫り、貝や象牙、珊瑚や牛骨等様々な素材で作ったパーツを象嵌することである。江戸時代後期に上総国芝山村出身の芝山易政によって考案されたことからこの名称がつき、江戸を中心に盛んに制作された<sup>23</sup>。その後明治期になると外国人からの需要が高まり、横浜で制作される輸出漆器にも芝山象嵌が取り入れられるようになったとされている<sup>23</sup>。江戸、東京を中心に作られた「芝山」を冠する工芸品は、漆器だけでなく象牙や金属器と幅広い素材を胎とする。様々な素材を切り抜き、表面を薄肉彫状に彫って作られたパーツが器面に象嵌される。いっぽう横浜で制作された「芝山」はほとんど漆器を対象とし、牛骨や象牙、貝で作られた立体的な花鳥の裝飾が、漆器の表面に飛び出すように象嵌されることが多い<sup>24</sup>。

本研究の成果の一つである、展覧会「近代輸出漆器のダイナミズム―金子皓彦コレクションの世界―」（神奈川県立歴史博物館、令和六年四月・六月）では、横浜で制作された芝山象嵌の漆器を中心に取り上げた。展覧会では同時に展示した「寄木細工」「青貝細工」等と統一を図る意図から、「芝山細工」を技法名として表記した。しかし現在活動している芝山象嵌の技術者、関係者に話を伺うと、「芝山細工」を江戸、東京中心に制作されていた芝山象嵌の特徴を持つ工芸品、「芝山漆器」を横浜で制作された芝山象嵌の特徴を持つ漆器という意味で使い分ける傾向があった<sup>25</sup>。比較すると作風・技法ともに大きな違いがあり、名称が呼び分けられるのは不思議ではないが、「横浜」と冠さずとも「芝山漆器」の語が地域性を含んで現在まで伝わっていること

がわかった。

「芝山漆器」は、単に技法の名と工芸分野の名が結びついた名称ではなく、先行する江戸、東京の芝山象嵌との差異を示しながら、「芝山」の持つブランド性や技法を引き継ぐ自負もあらわすという意図も込められているようである。こうした用語は慣習的に用いられてきたもので、過去に遡って明確な定義を定めることは困難である。むしろ「芝山」という語が、特に横浜の漆器を語る中でどのように用いられてきたかを概観し、「芝山漆器」という名称が、どのように横浜の漆器の独自性を担う意味を持つようになったのかを確認したい。

明治二十四年一月一八日に発行された『横浜貿易新聞』には、輸出品の売行きに関する記事の中で「芝山入塗物」が不調だったと書かれている。芝山象嵌で裝飾された漆器が一定量横浜で取引されていたとわかる。それが立体的な裝飾を施した横浜の漆器を指すのかは不明だが、「芝山漆器」という名称が成立していない、もしくは一般的に用いられてはいなかったといえる。明治二十六年の『横浜貿易敏捷』の「雜種売込商」の部をみると、弁天通りに出店している岩崎平吉、宮崎岩吉、守安瀧三郎の三名が取り扱う商品に、「芝山入漆器」と書かれている<sup>26</sup>。仕入先は判明しないが、この頃までには横浜で芝山象嵌を施した漆器が制作されていたと考えるのが自然である。

大正二年に開催された、神奈川県横浜市総合勸業協会による勸業共進会の審査報告では、横浜の漆器の製法を粗雑であると指摘しながらも「横濱ノ芝山物ハ漆器面ニ牙角類ノ彫刻物ヲ嵌入セル所精巧華麗ニシテ特異ノ名産タルヲ失ハズ」と述べられている<sup>27</sup>。ここでいう「芝山物」は現在「芝山漆器」として伝わっている漆器の特徴と一致する。そしてそれが名産であることを失わないという言葉から、芝山象嵌の技法をとり入れた漆器はこの以前から横浜特有の名産として認識され始めていたとわかる。

そして昭和二年（一九二七）に著された商工省商務局貿易課による『輸出漆器ニ関スル調査』には、「本縣ニ於ケル漆器ノ殆ント九分通りハ横濱市ニ

生産セラレ主トシテ芝山漆器及横濱彫トス<sup>28</sup>、昭和三年の「本邦固有工藝品の生産状況」には「横濱漆器の一種に芝山象嵌、芝山漆器といふものあり」と書かれている<sup>29</sup>。ここで横濱の漆器を語る上で代表的な存在として、「芝山漆器」が挙げられている。この時から様々な漆器関係の文献において、横濱の名産としての「芝山漆器」の名称が見られるようになっていく。

この名称の浸透と、横濱における特産品としての意識に影響を与えた存在として触れておきたいのは、横濱不老町で芝山による装飾を施した漆器の製造販売を行っていた村田商店である。関東大震災後の大正十四年に著された『横濱復興録』には、「美術芝山漆器商」として村田勝次郎の名が挙げられている<sup>30</sup>。これは昭和初期の文献に先立って「芝山」と「漆器」が一つの名詞として用いられた例である。その後も村田商店は、様々な人名録に「芝山漆器商」として記載されている。他にもこのような漆器を制作・販売していた漆器商がいたと考えられるが、村田商店の他に「芝山漆器」という語を使っている者は少ない。勝次郎氏の息子・貞良氏は昭和二十六年の『日本漆工』にも、依頼を受けて芝山漆器に関する詳細な記事を執筆している<sup>31</sup>。戦後に至っても、「芝山漆器」の中心的な存在だと考えられていたのだろう。村田商店は横濱の漆器販売がその後下火になったなかでも職人を支援しながら制作を委嘱し、昭和四十五年まで芝山漆器の制作を続けていた。現在に至るまで、「芝山漆器」という名称が横濱で制作された漆器として認識されているのは、文献だけでなく、村田商店がその制作・販売を牽引し、積極的に名称を使い続けたことも大きく作用していると思われる。

各地の職人が集まって成立した産地である横濱には、固有の技法や意匠といったものはなかった。徐々に制作者が定着する中で、新たに興った技法、意匠による独自の造形が生まれ、それに名称が与えられる。名称が浸透するに従ってそれは地域性を帯びようになり、「産地」に対する意識を強めることとなった。こうした意識の発展に寄与したのが、販売を担う漆器商であった。他の産地とは異なる特産品として戦略的に需要者に訴求する上でも、制

作・販売活動の軸になっていったのである。

## おわりに

本稿では、材料、制作環境、人材の不足した環境横濱に、商人・職人など漆器関係者が集まり全国有数の輸出漆器の産地になっていく過程を概観した。横濱の漆器業は、初めに商人が活躍して販売環境を整え、次に職人が集まり制作を始めるといふ順序で展開した。横濱は新興の産地と認識されていたが、急激に発展した背景には、このように販売者としての漆器商が初めから多く存在したことが挙げられる。近代工芸における商人の役割は、単に職人から消費者へ商品を販売する窓口であるだけでなく、職人を取りまとめ、工芸の制作を直接的に指導する立場にあった。商人が主導で産地が形成されたこと、外国向けの輸出品に特化し様々な地域の職人、技術が集って制作が行われたことは、産地としての横濱の大きな特徴である。

また、様々な地域の技法を取り入れながらも、特徴的な技法が発展し、産地における制作・販売活動の軸となったことを確認した。販売に際しては、他地域との差異を最も敏感に捉え、地域の独自性を積極的に売り出す役割を担っていたのも商人であっただろう。こうした漆器商の活動を中心に、産地への帰属意識も強められていったと考えられる。これらのことから漆器の産地としての横濱においては、このような商人が工芸の制作・販売を全体的に方向づけ、産地として成立するのに重要な役割を果たしたといえるだろう。

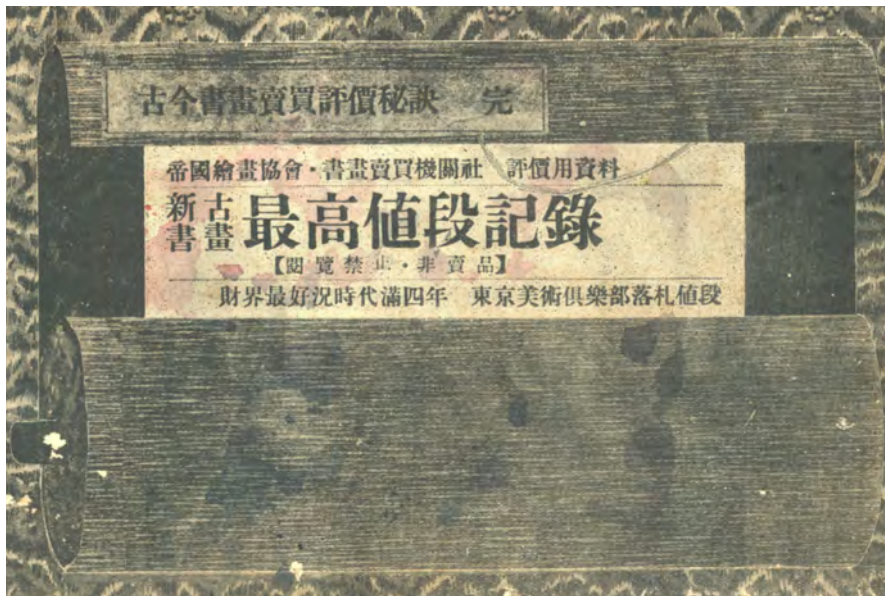
今回の調査では、工芸の視点から制作・販売に関わる人々の拠点としての産地の形成と、制作・販売の実態、固有の技法にまつわる意識の変化について横濱の例を検討しつつ、特に販売者の重要性を確認することができた。他分野、あるいは他地域との比較も丁寧に行うべきではあるが、調査で得た情報の多さもあり整理作業が追いついておらず、十分に検討することができなかった。今後の課題とし、引き続き調査を続けていきたい。

(註)

- 1 『横浜市史稿』産業編、横浜市役所、昭和七年、五六頁。
- 2 森田忠吉編『横浜成功名譽鑑』開港五十年記念、横浜商況新報社、明治四十三年、二〇四頁。
- 3 前掲註2、二四二頁。
- 4 そのうち一〇件は元町の塗師である。元町は開港前から横浜に住んでいた人々が、居留地の設置に伴い移動・集住していた地域であるから、昔からいた職人も少なくなかったと考えられる。
- 5 横山錦柵編『横浜商人録』、横浜商人録社、明治十四年、二〇頁。
- 6 二八年商工局調査『第二次輸出重要品要覧』工産之部、農商務省商務局、明治三〇年、四〇頁。
- 7 明治二十四年二月一月の『横浜貿易新聞』には、「本邦漆器輸出状況」として、明治十四、十五年頃にアメリカで日本漆器の破損しやすさが問題になり、輸出が減少していること、ドイツやフランスで日本の漆器の模倣品が制作されていることが記されている『横浜貿易新聞』、横浜貿易新聞社、明治二十四年二月一月。
- 8 『神奈川県統計書』明治三十二年、神奈川県、明治三十四年、四五九頁。
- 9 前掲註6、三十八頁。
- 10 横井時冬『日本工業史』、吉川半七、明治三十一年、三一五頁。
- 11 『神奈川県統計書』明治三十一年、神奈川県、明治三十三年、四二八頁。
- 12 前掲註8、四五九頁。
- 13 前掲註8、四五九頁。
- 14 嘯品家については、樋田豊次郎「明治の工芸を輸出したひとたち」(『ナセル・D・ハリリ・コレクション』海を渡った日本の美術)第一巻、同朋舎出版、平成七年)に詳しい。
- 15 前掲註6、三十九頁。
- 16 漆工関係者の分布地図については、「関連地図」(『近代輸出漆器のダイナミズム』金子皓彦コレクションの世界)『神奈川県立歴史博物館、令和六年、八四頁)にまとめた。
- 17 『第二次輸出重要品要覧』工産之部、農商務省商務局、明治三十年、三頁。和歌山県は五八五、七八七頁、静岡県は三五四、三三〇頁、石川県は三一九、五五六頁、福島県は二四七、二七四頁、神奈川県は二二六、九四〇頁である。
- 18 前掲註11、四二八頁。
- 19 前掲註10、三一一頁。
- 20 前掲註6、三十九頁。
- 21 「往時ハ福島県津塗石川県山中塗等モ静岡塗横浜塗ト共ニヤヤ盛ニ輸出セラリタリト雖モ今日ニ於テハ其ノ価格ノ極端ナル低下ノ為ニ殆ド輸出ヲ見ス謂フモ不可ナク現在第一位ニアルハ静岡塗ニシテ横浜塗箱根塗之二次グ其ノ他高岡塗金沢塗黒江塗輪島塗等ノモノ幾分輸出セラルルヲ見ルモ此等ハ到底静岡横浜箱根ニ於ケルガ如ク低廉ナルモノヲ製出スルコト不能ナルヲ以テヤヤ優秀ノモノヲ出ス」(神奈川県内務部『神奈川県二於ケル陶磁器業及漆器業』、神奈川県内務部、大正五年、二九頁)。

- 22 芝山易政については、前田香雪「芝山象眼創製者の傳及其系統」(『日本美術協会報告』第一二二号、日本美術協会、明治三十一年、一九一、二四頁)、江戸の芝山の流れについては菊地泰子「江戸時代後期芝山象眼作品について」(『大阪市立美術館蔵「芝山」在銘品を中心に』(『大阪市立美術館紀要』第二〇号、大阪市立美術館、令和二年、五、四九頁)に詳しい)。
- 23 現在も横浜では芝山漆器の技術継承のため、横浜芝山漆器研究会が活動している。
- 24 江戸・横浜の芝山の造形的な比較やその背景の考察に関しては、拙稿「横浜芝山漆器」の実像 ―歴史・技法・背景―(『近代輸出漆器のダイナミズム』金子皓彦コレクションの世界)『神奈川県立歴史博物館、令和六年、二二五、二三三頁)に述べた。
- 25 横浜で制作されたこのような漆器を「芝山細工」と説明することに違和感があるという指摘もいただいた。反対に、江戸の芝山に技法や作風が近い場合、芝山象眼による漆器であっても、あまり「芝山漆器」とは呼ばないようであった。
- 26 伊藤辰治郎『横浜貿易捷徑』、横浜貿易新聞社、明治二十六年、六三、六四、六九頁。
- 27 春日倅一郎編『神奈川県横浜市聯合勸業協会開催勸業共進会審査報告』、大橋徳寿、大正三年、一九一頁。
- 28 商工省商務局貿易課編『輸出漆器二関スル調査』、商工省商務局貿易課、昭和二年、二三頁。
- 29 中山正男「本邦固有工藝品の生産状況」(一)商工省工務局編『工業調査彙報』第六卷第二号、一九二八、七頁。
- 30 小池徳久『横浜復興録』、横浜復興録編纂所、大正十四年、二七頁。
- 31 村田貞良「芝山漆器」『日本漆工』三十六号、日本漆協会、昭和二十八年六月、八頁。
- 32 戦後の村田商店の活動に関して職人の目線から見た記録として、横浜で活動する芝山師の宮崎輝生氏による『貝と漆 横浜芝山漆器と七十年(わが人生)』(神奈川県新聞社、令和五年)がある。

※本史料のうち、「現代之部」を抜粋した。  
「古代之部」が大半を占め、いわゆる古美術の取引が盛んであることがわかる。



古今書畫最高値段記録  
——(一七四)——

### 現代之部注意

一、本書は大正十年に編輯に着手したものであるから、其當時生存して居つた人は、今日(大正十四年)亡くなつて居つても此部に掲載せり。

一、東京美術倶楽部の賣立入札は主として古書畫であるから、現代作家の品は極めて少く、従つて市場で百圓以上に賣買されて居る作品で、掲載に洩れて居る人が澤山あることゝ知るべし。

一、書畫屋が自己の懇意の畫家の畫を高價に世上に賣出さんとして入札品に加へ、他人の名義で高價に入札せしめたるものも無き事は保證せられず。

一、畫家が書畫商に依頼し、又は結托して共同にて利益を得んが爲めに右の如き策略をなせるものも無き事も保證せられず。

一、右の目的の品は、多くは尺八絹本又は二尺絹本の大着色大密畫にて、尺五絹本等は極めて稀なり、之れ尺五にては餘り高價に入札すること能はざるを以てなり。

一、之を要するに、現代之部は、餘り價格を評定する参考にはならざるもの多し、讀者は宜しく其心にて見らるべし。

一、年齢は大正十年の年齢なり。

一、略歴中、帝技は帝室技藝員、會員は帝國美術院會員、美院は日本美術院、美校は東京美術學校、委員は帝國美術院展覽會委員何段格は文展星取成績に依つて帝國繪畫協會の制定したる地位にて詳細は「帝國新書畫番附」に明記せり。

### 現代之部

▲岡本芳水	京都生、四四歳、芳文門、文展入選四回、三段格 着色老松群鶴 五〇一 七、七、越後 阿部
▲井上白楊	東京生、三二歳、美院院次、院展入選七回 伊勢物語 一〇三 八、三、四、札 元
▲田中柏陰	静岡生、五五歳、直入門、關西南畫界の香宿 松雲水石 一二五〇 七、六、西、青 柳 家
▲土田麥僊	新潟生、三五歳、榎風門、國畫制作展同人 學 兒 横 一一一八 七、六、西、青 柳 家
▲高島北海	山口生、七二歳、南宗派大家、元文展審査員 朝鮮金剛山 三五〇 九、三、五、青 森 市田
▲東郷平八郎	鹿兒島生、海軍大將、日露海戦に功あり(伯爵) 書 二行 書 四四〇 五、三、七、札 元
▲廣瀬東畝	高知生、四七歳、寛政門、文展入選八回、帝展三回 老松 群 禽 一三九 九、四、七、岩 澤 家

(ハ、ホ、ヘ、ト) 芳、白、柏、麥、北、平、東 (一七五)

古今書畫最高値段記録  
—(一七六)—

▲小島獨山	京都の僧	水墨山水	八五〇	九三三	札	元
▲小堀頼音	栃木生、五九歳、會員、帝技、東美教授	八幅太郎	八五八	八二六	同上	家
高	綱	双	五三八	六六六	札	元
大塔宮	熊野落	月下美人	一一五〇	九三三	同上	家
五六九	九三三	國府寺家				
▲尾竹竹坡	新潟生、四五歳、新嘗門、五段格、人物山水を能す	金地青緑山水	六双	八九〇	八七五	札
▲田近竹邨	京都現住、六二歳、直入門、五段格、關西南畫界重鎮	青緑 松韻泉聲	一八三六	六二八	札	元
松 韻 泉 聲	着色 前後赤壁	秋景山水	一一五〇	七五七	同上	家
蓬萊山水	松鶴高士	秋江自適	二〇五〇	八三六	同上	家
一〇五八	一〇五八	長谷川家				
一八一三	九四六	札				
▲小野竹橋	岡山生、三四歳、橋風門、文展四段格、國展同人	南島夏景	二〇〇〇	七二七	札	元
夏冬山水	山林の島	山水	二〇〇五	八三七	同上	
二〇一	二二一	同上				
二六六	二九六	同上				
九三九	九三九	丹羽子				

古今書畫最高値段記録  
—(一七七)—

▲莊司竹眞	東京生、七二歳、是齋門、風俗人物、山水を能す	武甲山麓晚春景	五四八	九三三	同上	家
秩父觀音堂山水	四八一	同				
▲磯田長秋	東京生、四三歳、新嘗門、五段格、歴史人物を能す	難波	一一一	八二九	札	元
馬上人	舟人	舟人	一八八	九三三	同上	家
▲島崎柳塙	東京生、五二歳、玉章門、五段格、最も美人を能す	舟人	六双	三八八	八六九	札
▲薦谷龍岬	青森生、三六歳、廣業門、委員、廣業門下新進名手	山路	三六六	九四七	同上	家
▲川端龍子	紀州生、三七歳、美院同人、洋畫を學び日本畫に入る	夕映	五三九	八四四	同上	家
露竹	秋意	松島	七八九	八三三	札	元
六二八	六二八	田村家				
一八八	九三三	同				
▲神木鷗津	東京生、四三歳、南宗派、曾て支那に遊び山水を能す	溪山幽亭	六一〇	六六九	同上	家
湖山仙禽	柳塘烟月	柳塘烟月	五〇〇	六六五	札	元

〔ト、チ、リ、ヲ〕 獨朝、竹長、柳龍、鷗

古今書畫最高値段記録  
—(一七八)—

▲川北霞峰	京都現住、四八歳、芳文門、京都美工教授、委員	青楓瀑布	二八〇	八五三	札	元
春溪秋色	夏山行旅	華嚴瀑	三〇三	八三三	同上	家
五〇〇	二九四	國府寺家				
▲山田介堂	京都現住、五三歳、是齋門、關西南畫壇の重鎮	青緑山水 烟波萬里	六五〇	八七五	札	元
設色山水	青緑山水 過端	米法山水	一一五〇	九三三	同上	家
青緑山水 松下壽星	松下壽星	山田耕花	一一〇五	九四六	札	元
一〇三	一〇八	同上				
▲山田耕雲	京都生、四五歳、芳文門、五段格、花鳥山水を能す	秋草小禽	二四〇	九三三	札	元
▲庄田鶴友	奈良生、四五歳、春華門、自由畫壇同人	山家	二〇〇	九四七	同上	家
晚秋	中村岳陵	釋迦	二六六	六二六	札	元

緑月陰	六双	二〇〇	九三三	札	元
霜月	六双	一四一	九二六	同	元
月下鳴鹿	六双	一一五	九三五	青森 中田	元
阜月	六双	一五五	九三三	國府 寺家	元
山路	六双	六一五	九四六	札	元
<b>▲山内多門</b> 宮崎生、四六歳、玉堂門、委員、最も山水を能す					
春秋牧場	六双	五〇〇	八三三	札	元
薩南防津泊舟	六双	二〇〇	八三三	同	元
四月の頃	六双	六五〇	九三三	青森 市田	元
十六羅漢	六双	五二〇	九三三	國府 寺家	元
秋景山水	六双	五五〇	九四一	岩 澤家	元
<b>▲水上泰生</b> 福岡生、四〇歳、廣業門、五段格、花鳥畫に秀でたり					
春秋花鳥	四双	一一三	八三三	札	元
四季花鳥	四双	一一八	八三一	田 村家	元
青蛙	四双	一一〇	八三三	札	元
紅葉小禽	四双	六一九	九二六	同	元
梅に雀	四双	二〇〇	九四七	岩 澤家	元
<b>▲小村大雲</b> 鳥根生、四〇歳、春舉門、委員、歴史畫に長ず					
勿來關	六双	六八〇	七三三	札	元
宇治川先陣	六双	三五三	八三三	同	元
山家夕戰	六双	四二二	九三三	丹 羽子	元
合戦	六双	五一八	九三三	札	元
<b>▲横山大觀</b> 水戸生、五四歳、雅邦門、美術院同人					
老子出關	六双	一五三八	六六六	札	元
岩上觀音	六双	一八〇〇	七五三	同	元

赤壁	一四二〇	七三三	同	元	
連雀	三九〇〇	七三三	同	元	
花に栗鼠	一〇〇五	八三三	横濱 安齋	元	
筒井	三二五〇	八三三	岡上 家	元	
松林紅布	一〇〇〇	八三三	同	元	
孟宗竹	一三二〇	八三三	同	元	
白雲裏	二五〇〇	八三三	同	元	
黃初平	一〇〇〇	八三三	同	元	
虎溪三笑	一〇〇〇	八三三	同	元	
赤壁	二五〇〇	八三三	内田 家	元	
蓮葉	一三三〇	八三三	清水 家	元	
瀧	一三三〇	八三三	同	元	
紅雀	一〇三三	八三三	札	元	
栗鼠	一一〇一	八三三	同	元	
朝晴雪	一一二八	八三三	兵庫 加集	元	
棚下涼風、海上陽光	一一三九	八三三	堀 家	元	
白菊	一五六〇	八三三	青森 市田	元	
蓬萊山	三七五〇	八三三	同	元	
草廬三顧	二五一一	八三三	同	元	
春秋	二八五〇	八三三	同	元	
牧童	一〇〇八	八三三	國府 寺家	元	
赤壁	一三〇〇	八三三	同	元	
聽泉	二八〇〇	八三三	岩 澤家	元	
竹保九如	一〇五八	八三三	同	元	
天保	三八〇〇	八三三	同	元	
<b>▲西園寺陶庵</b> 京都生、七三歳、維新の元勳、内閣元老(公爵)					
三行書	一七五	六六六	札	元	
七行書	一七五	七七一	同	元	

蘇東坡	一〇〇〇	九三三	青森 市田	元	
<b>▲入江爲守</b> 號雨亭、五四歳、東宮侍從長(子爵)和歌を能す					
配所秋思	双	一五〇	六六六	京都 伊藤	元
小松林不二	双	一八七	七三三	札	元
<b>▲狩野探令</b> 山形生、六八、狩野派、美術協會委員、狩野派大家					
破墨山水	三二〇	八三三	田 原家	元	
着色樓閣山水	四三一	八三三	同	元	
眞山水樓閣	一四九	八三三	榎 山家	元	
昭代嘉祥	三六〇	八三三	札	元	
<b>▲村田丹陵</b> 東京生、五一歳、御橋門、有職故實の畫を能す					
波の圖	三一九	八三三	札	元	
狩の圖	三六〇	八三三	中村 家	元	
蓬萊山	四五二	八三三	同	元	
奈須野與市	二五一	九三三	札	元	
<b>▲吉川靈華</b> 東京現住、四七歳、新普門、委員、道釋人物を能す					
羅浮仙	一〇〇〇	八三三	札	元	
博山爐	二三〇〇	八三三	榎 山家	元	
維摩	一九〇〇	八三三	同	元	
壽老	一三九〇	八三三	田 村家	元	
壽老	二五〇八	八三三	札	元	
壽老	二四九〇	八三三	同	元	
松下仙女	二四〇〇	九三三	青森 市田	元	
<b>▲結城素明</b> 東京生、四七歳、玉章門、委員、東美教授、會員、					
琵琶行	双	一三〇〇	七三三	札	元
中唐美人左右花鳥	双	一〇〇〇	八三三	同	元

古今書畫最高値段記録  
——(一八二)——

雲嶺飛泉	七十七	兵庫	加集
唐美人	八八〇	札	元
若葉山路	一五〇〇	青森	市田
夏山深遠	八一三	同	
松蟲秋草	一〇三〇	同	

▲岡田蘇水 楊木生、永湖門、文展入選六回、山水に長ず  
夏景山水 一一一 九三六 札 元

▲田中頼璋 鳥根生、五四歳、玉章門、委員、山水を能す  
梅花高士綠陰聽泉 捲四 一〇〇五 八三三 札 元  
中瀨見觀音左右山水 參 五一三 八四四 田原 家  
春秋山水 捲り双 六八八 九三三 札 元  
蔭楡書屋 五三九 九三六 同  
山 八〇〇 九三五 青森 市田  
四季山水 四 一六〇〇 九四五 戸田 子

▲落合朗風 京都生、二六歳(新派)文展、帝展に各入選す  
夏 藤 一三五 九三六 竹 元  
海苔干す村 一三五 九四一 岩澤 家

▲句佛上人 大谷光演、俳句を能くし、畫は酒風に學ぶ  
美人草、錦木 双 六〇〇 八三三 札 元

▲都路華香 京都生、五二歳、榎嶺門、委員  
江村訪友 一六一〇 七三九 札 元  
養老新樹 一一二〇 九三五 兵庫 加集  
錦波 一四三〇 九四八 札 元

▲村上華岳 大阪生、三四歳、酒風門、國東創作展の同人  
大坂生、三四歳、酒風門、國東創作展の同人

古今書畫最高値段記録  
——(一八三)——

牡丹	一三〇	六十五	札	元
跡見花蹊	大阪生、八二歳、對山門、現跡見女學校校長たり			
西湖山水	双	二六九	八七七	清水 家

▲淺井觀波 東京生、二五 (新派會)印度に研學す  
熱國の朝 二六一 八四六 九層樓主人

▲下村觀山 和歌山生、四九歳、雅邦門、美術院同人  
維摩 一三五〇 五七三 札 元  
林和 六一一 六十一 同  
春朝 二一九 七四三 同  
寒山拾得 一七〇 七五三 同  
春日手向山 二二五 同  
幽靜 一四三 七十四 青柳 家  
虹 一三〇 七十三 札 元  
三輪神 三六〇 七十三 岡上 家  
林和 二〇一 八二六 同  
秋暮歸牧 一一八 八三六 高橋 家  
雨嵐山納涼木枯寒天 四 四一〇 八六六 札 元  
陶滯明 一六五 同  
花鳥畫帖 一一八 同  
山水畫帖 一一五 同  
春秋瀑布 一五〇 同  
老中君 双 一三三 同  
老中山村 六双 一〇〇 同  
觀月 一三三八 同  
雪松 一一一〇 同

(ソ、ラク) 蘇、頼、朗、句、華、花、觀  
——(一八三)——

古今書畫最高値段記録  
——(一八四)——

壽老	一八〇	八十五	札	元
隱士	一七五〇	八十三	同	
高士	二二一	八十二	平塚 山 家	
曲浦朝	二六〇	八十四	札	元
和歌の朝	一四三八	八十三	同	
雨後の夕	一三二八	八十三	同	
種邊	一〇五〇	九三六	同	
海邊	一八一八	同		
蓬萊	三二五八	九三三	青森 市田	
陶淵明	二一八〇	同		
春人	一五八〇	同		
八仙	五〇〇	九四八	札	元

▲荒井寛方 楊木生、四四歳、美術院同人會て印度に遊學す  
辨財天 二七五 八三三 札 元  
乳糜供養 二五三 八三三 同  
觀音 三七五 八六五 京都 伊藤

▲橋本關雪 神戸生、四〇歳、酒風門、委員、南宗の新生面を拓く  
松下高士 二〇〇 八三三 札 元  
瀧山福海 二二〇 同  
壽山觀瀑 一八〇 八三三 同  
高士觀瀑 一六〇 八三三 同  
柳蔭漁客 二八六 九三三 同  
亂雲仙客 一三二八 九三五 青森 市田  
高山四皓 三〇〇 同  
淡彩瀑布 一三〇〇 同  
峽江夏月 一〇〇〇 同  
青綠山水 一七〇〇 同  
柳蔭美人 二二八〇 八四一 岩澤 家

松館仙隱 一〇〇〇 同  
 秋江漁隱 一〇〇〇 同  
 ▲大橋萬峰 岐阜生、六五歳、獨學寫生にて虎を能す  
 猛虎 一五八 六十一 札 元  
 ▲川村曼舟 京都生、四二歳、奉事同、委員、山水を巧みにす  
 楓彩色日本三景 参 一四四〇 八十三 馬島家  
 泰山行旅 一二四〇 八十七 清水家  
 青緑飛瀑 六五五 九十五 青森市田  
 青山行旅 五三五 同  
 桃花源 一〇〇一 同  
 清潭棹影 一一八〇 九三元 國府寺家  
 ▲山田敬中 東京生、五四歳、玉堂門、委員、山水を能す  
 中西王母左右山水 参 二一五〇 八十四 田原家  
 山水 一五〇 八十七 三内田家  
 ▲松林桂月 山口生、四七歳、幽谷門、委員、花鳥山水を能す  
 春秋山水 双 一〇八八 九十二 兵庫加集  
 秋山問奇 四八四 九四 八札 元  
 ▲池田桂仙 津市生、五八歳、父雲橋に學ぶ、五段格  
 松溪幽谷 六〇〇 八十九 札 元  
 青緑山水 八八〇 八十三 同  
 秋山行旅 七〇〇 八十三 同  
 青緑櫻閣山水 捲り 一二六八 九十二 丹羽子  
 赤壁前遊、五柳鴨莊 双 八五八 同  
 秋亭對話 一四〇五 九四 八札 元  
 (夕、マ、ケ) 寬、萬、曼、敬、桂  
 (一八五)

古今書畫最高價段記録  
 (一八六)  
 ▲菊池契月 長野生、四四歳、芳文嗣子、委員、會員  
 涼雲 六五〇 六十八 赤星家  
 秋夜 六一〇 七十三 秋山家  
 竹取姫 一二〇〇 八十三 札 元  
 後園閑歩 五二九 同  
 新秋 八〇〇 九十二 同  
 美人 七三三 九十三 青森市田  
 美草 八八〇 同  
 冠草 二五〇 同  
 赤壁 六八二 九三元 國府寺家  
 ▲富田溪仙 福岡生、四四歳、華香門、美院同人  
 堅田雲 捲り 二九八 八十二 田村家  
 雲上羅漢 二七五 九十三 札 元  
 澗城 四三〇 九四 一岩澤家  
 白糸瀧 七五〇 同  
 ▲鈴木啓處 東京生、五一歳、寛政門、花鳥を能す  
 菊に錦鷄 捲り 二五七 九四 五戸田子  
 柳鷺 二〇七 同  
 ▲眞野曉亭 東京生、五二歳、鳴齋門、風俗人物を能す  
 金地に富士 六双 二五一 七十三 札 元  
 ▲河鍋曉翠 東京生、五二歳、鳴齋女にて父に學ぶ  
 美人羽つき 一三〇 八十三 札 元  
 童子遊 一一〇 同  
 勿來關 一一〇 同

▲矢澤弦月 長野生、三六歳、廣業門、委員、  
 秋景瀑布 一〇八 九十四 一岩澤家  
 柳下高士 一六八 同  
 白梅 三六〇 同  
 羅浮仙 捲り 一八一 同  
 松下水亭 一四〇 九四 八札 元  
 ▲中村不折 長野生、五七歳、淺井忠門、委員、洋畫大家  
 春湖賞月 一六一 八十三 札 元  
 水景山水 一一〇 九十三 同  
 寒山拾得 一五二 九十四 堀家  
 文珠 一三五 九十五 青森市田  
 山繪 一五五 九三元 國府寺家  
 大津繪 一六〇 同  
 雨後山水 一三〇 同  
 虎溪三笑 一〇八 同  
 黃初牛 一〇六 九四 五戸田子  
 ▲木村武山 茨城生、四七歳、雅那門、美院同人、設色の妙手  
 中唐美人 参 四八〇 七十一 札 元  
 觀音 一五八八 同  
 花鳥 四〇一 七十三 同  
 菊花 四五六 八十三 同  
 三尊佛 一三二〇 九十二 同  
 寒月 五三五 九三元 國府寺家  
 ▲松本楓湖 茨城生、八二歳、容齋派、會員、歴史人物の大家  
 蒙古兵船覆没 五六〇 八十三 札 元  
 極彩色武者 五二二 九十五 兵庫加集  
 (子) 契、溪、啓、曉、弦、不、武、楓  
 (一八七)

古今書畫最高値段記録 (一八八)

▲小西福年	福井生、三三歳、松年門、山水を能す	波に日の出	一六三 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 札
▲小林古徑	新潟生、四四歳、牛古門、美院同人	芥川	一一〇〇 <small>円</small> 、八五 <small>円</small> 、五三 <small>円</small> 札
▲伊東紅雲	東京生、四三歳、丹波門、五段格、歴史人物を能す	光る竹	一一〇〇 <small>円</small> 、八六 <small>円</small> 、六六 <small>円</small> 同
▲河村虹外	福井生、六二歳、關西南宗派の宿老たり	着色養老	一〇一九 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 同
▲尾竹國觀	新潟生、四三歳、新晋門、竹坡の弟、五段格	松島	一七六〇 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、六六 <small>円</small> 同
▲佐竹永陵	東京生、五〇歳、永湖嗣子、五段格、山水人物を能す	松摩	二六〇〇 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、五五 <small>円</small> 同
▲松岡映丘	兵庫生、四一歳、貫義門、東美教授、委員	遠	三三八八 <small>円</small> 、九四 <small>円</small> 、一岩、澤家
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	花の山	一一〇 <small>円</small> 、八三 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 札

古今書畫最高値段記録 (一八九)

▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	雪の朝	一〇五八 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 札
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	都の春	一三三八 <small>円</small> 、同
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	子の日遊	一三三〇 <small>円</small> 、八三 <small>円</small> 、五三 <small>円</small> 札
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	春の秋	一〇五〇 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 同
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	夏山行旅	四九〇〇 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、五五 <small>円</small> 同
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	男山	一〇一三 <small>円</small> 、同
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	花山	三三〇〇 <small>円</small> 、九四 <small>円</small> 、八札
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	着色人物	六双、五二九 <small>円</small> 、八四 <small>円</small> 、田原家
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	十牛圖意	一一三〇 <small>円</small> 、五三 <small>円</small> 、五三 <small>円</small> 札
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	武陵桃源	一五〇〇 <small>円</small> 、六五 <small>円</small> 、七同
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	群仙會	一一〇七 <small>円</small> 、六六 <small>円</small> 、五同
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	仁帝	二〇〇八 <small>円</small> 、七五 <small>円</small> 、七同
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	群仙會	三三八〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、六同
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	十牛圖意	三〇〇〇 <small>円</small> 、八三 <small>円</small> 、三同
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	蓬萊山	四三三五 <small>円</small> 、八八 <small>円</small> 、九同
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	蓬萊山	一〇三九 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、六同
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	蓬萊山	六三八〇 <small>円</small> 、八三 <small>円</small> 、五同
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	三獸慈愛	一五六一 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、九同
▲尾竹越堂	新潟生、五四歳、新晋門、竹坡、國觀の令兄、三段格	山介堂箱	一〇〇三 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、三札
▲富岡鐵齋	京都生、八六歳、會員、技藝員	群仙會	二一三八 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、元
▲石井天風	千葉生、三九歳、彦那門、委員、山水、人物に能す	唐煎茶	四八一 <small>円</small> 、九四 <small>円</small> 、一岩、澤家

古今書畫最高値段記録 (一九〇)

▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	春秋山水	三五五 <small>円</small> 、六五 <small>円</small> 、三三 <small>円</small> 札
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	夏景牧童	二八八 <small>円</small> 、六七 <small>円</small> 、一同
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	鹽原眞景	二五五 <small>円</small> 、同
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	松竹	二八八 <small>円</small> 、六七 <small>円</small> 、一同
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	青緑春秋樓閣山水	二七〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、四同
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	極密波上辨財天	三三〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、四同
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	雪中人家	三三一 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、四同
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	霜葉	五五〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、四札
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	湖日野	五二〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、三札
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	春色	五二〇 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、三札
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	溪上路海邊	七八六 <small>円</small> 、八六 <small>円</small> 、五同
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	着色山路海邊	一一四三 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、三同
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	晴山行旅	九〇〇 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、三同
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	遲日	八三五 <small>円</small> 、八三 <small>円</small> 、三同
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	松竹	一六六 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、九札
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	小春	一七〇 <small>円</small> 、九三 <small>円</small> 、九同
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	鷹田其石	富山生、東美卒、二六一 <small>円</small> 、七五 <small>円</small> 、三札
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	月夜櫻谷山水	四一八 <small>円</small> 、七三 <small>円</small> 、四同
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	羅漢	三〇〇 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、七同
▲木島櫻谷	京都生、四五歳、景年門、委員、歴史人物を能す	唐美人	三〇〇 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、七同
▲長野草風	東京生、三七歳、玉堂門、美院同人	鑄木清方	東京生、四四歳、年方門、委員、美人畫の大家なり
▲本多天城	東京現住、五五歳、芳盛門、東美出身、文展入選	紅梅白繪	一〇〇〇 <small>円</small> 、八七 <small>円</small> 、九札

白百合に菊	双	一五二三	八十三	札	元
日ざかり		一一二八	八十三	同	
青松白帆		一一八〇	九三	同	
夏夕		一四五五	同		
美人梅	捲り	一三五八	九三	市田	元
早梅		一九〇〇	九四	一岩澤	家
▲速水御舟 東京生、二九歳、楓湖門、美院同人					
郊外の春		五六〇	七五	札	元
紫紅居宅		七五一	八十三	同	
雨中		九五一	九三	市田	元
古中		五六八	同		
曉霧		六二五	九四	札	元
▲川合玉堂 岐阜生、四九歳、雅邦門、會員、技藝員、日本畫壇泰斗					
溪山春色		一一二八	七五	札	元
綠陰垂釣		一〇〇〇	七五	青柳	家
秋林溪風		一一五〇	七五	札	元
溪村春野		一六五〇	八三	高橋	家
松山探芝		一〇〇〇	八五	木下	元
竹溪春寒		一一五八	八六	札	元
四季山水	四	二八八〇	同		
山村秋霽		一一六一	八七	同	
朝富		一五五〇	八三	同	
中壽	參	一六八〇	八三	同	
海濱秋色		一四四〇	八三	同	
積雪夏雨	双	一一三六〇	同		
幽居觀瀑		二〇〇〇	九三	同	
柳江洗馬		一〇七七	九三	同	
胡枝帶月、老僧迷雪	双	一九〇〇	九三	同	

夏景山水		一五三八	九三	札	元
波頭淺春		一三八〇	九三	市田	元
雨中歸漁		一八八〇	同		
竹溪春寒		一九〇〇	同		
松溪群猿		一八三〇	九三	札	元
綠陰渡舟		二一八一	九四	同	
深山春溪間	双	二八五〇	同		
山村秋霽		一七三〇	同		
中壽	參	二六〇〇	同		
▲内海吉堂 京都生、七三歳、南宗派、花鳥を能す、文展入選二回					
游鯉	双	一四二一	六三	札	元
▲野田九浦 明治十二年大阪に生れ廣業に學び委員となる					
唐美人		一五八	九三	札	元
瀑布櫻花		一三五	九四	一岩澤	家
▲安田靱彦 東京生、三九歳、額普門、美院同人					
松風村雨		一四〇〇	七三	札	元
天臺仙境		一六〇〇	同		
觀音		一一八八	七三	青柳	家
觀音		一三二八	八三	同	
羅摩		一一〇〇	八三	同	
羅浮		一六〇〇	八三	同	
林和靖		一八五八	八三	同	
▲小杉未醒 日先生、四一歳、泰陽會員、日本畫を能す					
周茂叔		三三〇	七三	青柳	家
竹林幽居		二五八	七三	札	元

石崎光瑤	富山生、三九歳、額風門、委員	八一六	八三	札	元
藤花栗鼠		一一八〇	九四	一岩澤	家
▲榊原紫峰 京都生、四五歳、京都繪專出身、國展同人					
櫻		一三〇〇	九三	市田	元
籬		一三三六	同		
椿		七五〇	九四	一岩澤	家
▲佐藤紫煙 岩手生、五二歳、和亭門、美術協會委員、花鳥を能す					
不老長春		一〇七	八七	札	元
▲上村松園 京都生、四三歳、額風門、現代國秀作家の泰斗					
楚蓮		五一八	六六	札	元
小野小町		一四〇〇	七三	秋山	家
▲荒木十畝 長崎生、五一歳、寛政嗣子、會員、京都花鳥畫大家					
四季花鳥		六八八	八六	札	元
雪中		九〇六	八三	同	
雪中		五二八	九三	同	
早春雉子		一一〇〇	九四	一岩澤	家
芭蕉		七五〇	九四	京都若林	家
▲橋本秀邦 東京生、四二歳、雅邦嗣子、父に學んで人物を能す					
虚空藏菩薩		一五五	八七	清水	家
▲池上秀畝 長野生、四八歳、寛政門、委員、花鳥山水を能す					
山水花鳥		一六三九	七三	札	元
山水花鳥		一〇六八	同		

古今書畫最高値段記録  
——(一九四)——

着色岩上孔雀	一一二二	八、三六	岡上家
竹に栗鼠	一〇〇〇	八、三三	札
孔雀	一〇五〇	八、三三	同
蘆園孔雀	一一二八	同	同
春園孔雀	二三五〇	九、三六	同
富貴白鶴	一〇〇〇	九、三五	青森市田
時雨	一〇〇〇	同	同
龍峽烟雨	一一五〇	同	同
井村常山	一一六三	九、四八	札
愛知生、八〇歳、南宗派大家、晩年常陸に隱栖す			
水墨山水	六双	五〇五	八、三〇
大畑家			
山元春舉	大津生、五一歳、寛齋門、會員、技藝員、美工教授		
夏の登山	一〇三六	八、三三	札
金砂子	一〇〇〇	八、五五	末松子
春の京名所	三五八八	九、二五	兵庫加集
祥瑞の圖	三八八〇	九、三五	青森市田
平福百穂	秋田生、四五歳、玉章門、徳庵の男にして、委員なり		
老杉	八八〇	八、三〇	札
松梅	八一〇	八、三三	同
月下虎	五八八	八、二九	同
柳村山水	五八八	八、二九	田村家
竹内栖鳳	京都生、五八歳、樞密門、會員、技藝員		
翠竹喜雀	一一二〇	六、四二	札
夏景瀟瀟	一九〇〇	六、五五	同
雨景	三三〇〇	七、二五	同
双鶏飲啄	一八〇〇	七、四三	同

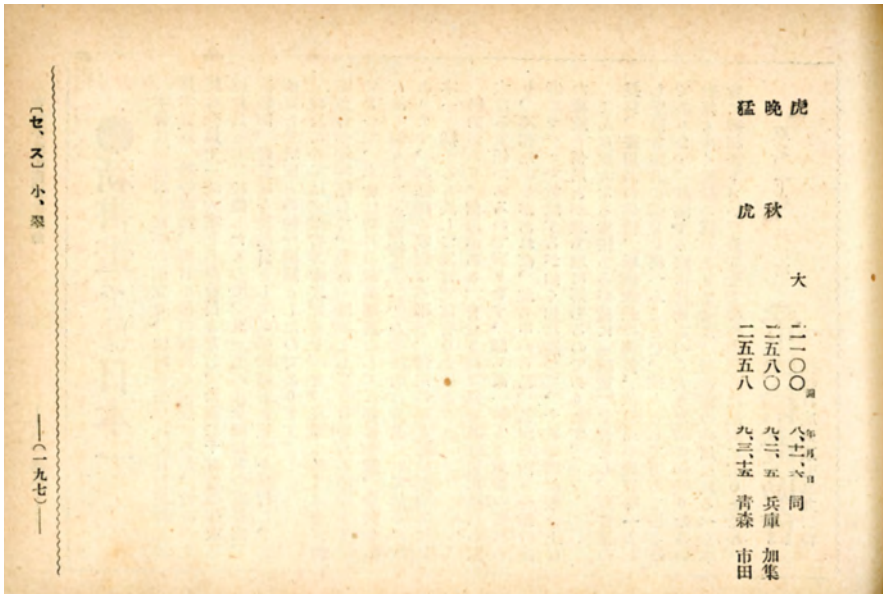
雪中喜雀	一一三五	七、五三	同
着色夏野	一〇八二	七、一〇	高田家
溪村秋霽	一〇〇〇	八、三六	岡上家
野中雀	一一一一	八、三〇	札
雪小雀	三二五〇	八、五二	同
柳小雀	一一八八	八、六六	同
夏溪獨釣	一八八〇	八、九一	同
青線山水	一〇〇〇	八、三三	同
雪中椿小禽	三〇三〇	八、二一	榎山家
錦溪秋雨	七六五〇	八、三三	札
苗代	一三五〇〇	九、二二	同
群雀	一五三九	九、三三	堀
盛林	一〇〇〇	九、三五	青森市田
七三八八			
澁澤青淵	榮一、八二歳、實業界に立ち、社會事業に盡力す(子爵)		
書二行	三九二	八、三三	札
書一行	二八八	九、三三	同
阪正臣	愛知生、六六歳、御歌所長、歌道に長じ畫も能す		
日月畫	一〇〇〇	八、三三	札
伊藤小坡	京都生、四五歳、香崎門、四段格、闊秀大家		
秋草美人	三五〇	七、三九	札
花見	四二〇	八、三三	同
清水の春	五六三	九、三三	同
美人	三五〇	九、四一	岩澤家

(シ、ヒ、セ) 常春、百橋、青正、小

——(一九五)——

古今書畫最高値段記録  
——(一九六)——

野口小蕙	東京生、四四歳、小嬢女史の女、母に學びて名手なり		
双鶏	二二二	九、三三	札
双鶏	二三八	同	同
鶏捲り	二四〇	九、四八	同
川崎小虎	愛知生、三六歳、子虎の男、東美出身、歴人を能くす		
青線春景山水	六〇〇	六、三五	同
慶園祝壽	二五一〇	六、九〇	同
小室翠雲	群馬生、四九歳、草雲門、會員、南畫界大家		
琴棋書畫	一〇〇〇	六、七七	札
青線山水	一〇〇〇	八、二一	榎山家
着色唐美人	一一五〇	九、二九	丹羽子
青線山水	二双	九、三六	札
梅林樓閣美人	三二七八	同	同
青線松下觀瀑	一〇〇五	九、三五	青森市田
寒林歸牧	一一五〇	同	同
秋景閑居	一〇〇〇	同	同
梧桐清暑	一三六〇	九、四八	札
山	一八〇〇	同	同
西山翠嶂	京都生、四四歳、栖鳳門、委員、花鳥を能す		
綠竹小禽	一六一八	八、三三	札
綠竹百鳴	二二一八	九、四一	岩澤家
大橋翠石	岐阜生、五八歳、木邦動物畫の泰斗、殊に虎の名手		
虎	二九〇〇	八、三六	岡上家
金地猛虎	三一〇〇	八、六六	播州本間
秋山双虎	一五六八	八、一九	札



昭和  
三年度  
書畫賣買相場 全

※本史料のうち、「現代之部」を抜粋し、  
加えて「はしがき」「注意」を掲載した。

はしがき

一(三)一

書畫は、一般の日常品などの如く一定した相場がない、恣しいとなれば千圓と思ふ畫幅へ一萬圓拂つて買取る人もあり。又投賣りする場合などには、一萬圓出して買つた品を千圓で引取る人もないと云ふ様なことも、昔日は往々あつたのです。

しかし、近來は書畫の賣買が非常に盛になつて東京美術俱樂部を始め、京都大阪の美術俱樂部でも、殆んど毎日曜に賣立入札會が催されるようになり、従つて探幽の三幅對は何程位、雅邦の尺五絹本は何圓位と大體の値段が判る様になつたのです。

其大體の値段を基礎として、之れは殊に出來がよいから何程、それは餘り圖柄が平凡だから何程と、價格を推定して入札するから、茲に初めて公定値段とも云ふべき、標準相場が立つことになつたのであります。

この標準相場は、單に東京美術俱樂部のみの相場であるかと申すと決してそうではなく日本全國へ此相場が通用されるのです。即ち北海道で買つた書畫でも、臺灣で求めた書畫でも、東京へ持つて出て、美術俱樂部へ委託

すれば、誰人の委託でも此標準相場で賣れるのです。故に今日に於ては書畫商人は申す迄もなく、一般の鑑賞家も皆この値段を標準にして賣買して居るのであります。

處が、ある一部の卑劣なる書畫商人に於ては、此標準相場を發表されることを非常に苦痛に思つて居ります。其理由は之を一般の素人に知らしめる時は、高價のものを安く買取る事も出來ず、又相場よりも法外に高く賣込む事も出來ないからであります。

編者は斯る卑劣なる行動をなさず、正々堂々之を天下に公表し、素人も商人も此標準値段に依つて、盛に賣買することを推奨するのであります。即ち本書は、書畫賣買の虎の巻であつて、此一冊を座右に置けば、素人の方々でも、確信を以て賣買が出來て損失をなす事は絶対にありません。

殊に近來盛になつて來た書畫通信販賣の雜誌や目錄の掲載品を購求する人々に取つては本書は實に一日も缺くべからざる寶典であります。

昭和三年一月

編者 吉岡班嶺 誌

はしがき

一(三)一

### 注意

○本文を見る前に必ず左記を一通り御覽下さい、然らざれば、折角本文を見ても誤解を生じます○

- 一、本書は昭和二年一月より十二月までに、東京美術倶楽部に於て賣立入札をなしたる落札値段を洩さず集め、之を人名別に列記したるのです。
- 一、筆者は、雅號に依つて、五十韻順に列記してあります、即ちアイウエオ、カキクケコ順序になつて居ります。
- 一、雅號の數多ある筆者は、吾々が最も多く普通に呼ぶ雅號に依つて居ります、例へば狩野探幽は又守信とも主明とも云ふが、吾々は常に探幽と呼んで居るから「タ」の處へ收めて置きます。
- 一、雅號を用いない人は、名に依つて居ります、即ち乃木希典は「キ」東郷平八郎は「ヘ」の部に收めて置きます。
- 一、姓號の下にある傳記は、簡單のもので、詳細を知らんとする人は他の傳記のある書を御参考になさい。傳記の終の「……年前」とあるは、昭和三年より何年前に歿したと云ふ事の略字です。
- 一、畫題中には單俗のものもあるが、東京美術倶楽部の入札目錄の畫題を其儘にして置いたのです。
- 一、圖様も墨は水墨畫、淡は淡彩畫、着は普通の着色畫であつて、殊に極彩色のものは極としてあります。
- 一、書幅に於ても横は横書、行は行書、草は草書、又假名書は假としてあります。

一、価格は百圓以上のものは悉く載せてあります、勿論東京美術倶楽部の入札品にも百圓以下のものもあるが、これは誤解せぬ事になつて居ります。

一、月日は凡て昭和二年なることは申す迄もなく、月日の早いものから順次に列記してあります。

一、最下段の何々家は、藏品を賣却した人の家名です、只蕃族のみは何々何爵家としてあります。

一、本文を古人之部、支那之部、現代之部の三部に分ち、日本人又は日本へ歸化した人で、此書發行前に死歿したものは古人之部に收めてあります。支那から輸入した作品、又は支那人で日本へ來遊し再び支那へ歸つた人は支那之部に收めてあります。現在存命中のものを現代之部に入れてあります。

一、現代の畫家で、載つて居る畫家よりも、其作品が高價のものもありますが、昭和二年中に東京美術倶楽部の入札會に作品の出なかつた人は載つて居らないのです。

一、同じ筆者の作品で、且つ同じ大きさのもので、其値段が懸離れて高いものは、圖様が珍しいとか、出来が非常によいとか、有名な人が愛玩した経歴の附いたもの等で、珍品名品傑作等と稱せらるべきものでありますから、普通の出来のもの、標準にはなりません。

一、古人で其作品の高價な人は、此書に載つて居る人以外にも深山あります。即ち昭和二年中の東京美術倶楽部の入札會に生憎其作品が出なかつた人は洩れて居ります、此書に洩れて居る人は『最高値段記録』又は『帝國古書畫便覽』を参考になされば、作品の賣買相場が判然致します。(おわり)

### ◆この書畫賣買相場を御覽の方には◆

#### ◆必ず本書の姉妹篇になつて居る古今最高値段記録

と對照して見る事が肝要です

最高値段記録は、歐洲大戰後の、財界の最好況時代滿四ヶ年間に於ける、東京美術倶楽部の入札會の落札値段を、一回も洩さず集めて本書と同じ形式に編輯したものであります。

其後物價も多少下落し、書畫も全體の上から云ふと多少下落して居りますが、詳細に調べて見れば大に下落した作品もあり、少しく下落したのもあり、又多少騰貴したのもあります、故に此二書を對照して見れば、作品に對する個々の相場の変動が判明して賣買には頗る便利であります。

最高値段記録は非賣品で已に絶版ですが、賤本が少しありますから、御入用の御方には賣費金貳圓で御分け致します發行所は矢張り帝國繪畫協會です。

現代之部

- ▲堂本印象 京都現住、三八歳、京繪出身、帝展委員  
山 居 藏 尺巾絹 着 一丈 三三 兒島松森家
- ▲佐竹永陵 東京生、東京現住、五七歳、永瀨制子、文島瀨山水に長ず  
壽老 白 鹿 二尺絹 着 一丈二寸 山口稻垣家
- ▲木島櫻谷 京都生、京都現住、五二歳、京年門、委員歴史人物に長ず  
四季山水三幅對 尺巾絹 着 七〇 三四 田中某家  
曲 尺巾絹 着 二元 三二 兒島松森家  
春秋花鳥 雙幅 尺五絹 着 三六 四五 木谷某家
- ▲橋本關雪 神戸生、京都現住、四七歳、稻垣門、委員南宗の新生  
柳 隱 漁 翁 尺巾絹 着 三六 三三 妙喜庵某家  
白描法仕女飼牛圖 紙半切 着 三六 三三 清野林家  
春江 細 雨 尺五絹 着 一五 二一 同 同  
幽 峽 奇 帆 尺巾絹 着 三六 三三 兒島松森家  
漁 樵 問 答 紙横物 着 二五 同 同  
春江 渡 舟 尺五絹 着 三六 四五 木谷某家
- ▲下村觀山 和歌山生、京都現住、五六歳、雅邦門、美術院同人  
華 虹 雙 幅 尺巾絹 着 一五 三三 妙喜庵某家  
菊 紙半切 着 三〇 同 同

〔リ、ロイ、エ、オ、カ〕 朝日印、永瀨關雪 一〇一〇一

書畫賣買相場

- 達 摩 尺八絹 着 淡 三六 三三 清野林家  
高 士 尺八絹 着 九六 三三 兒島松森家  
夕 月 尺八絹 着 三〇 同 同  
觀 出 尺八絹 着 三〇 四八 林 家  
白 菊 翁 尺八絹 着 八六 二四 山口稻垣家
- ▲川合玉堂 岐阜生、東京現住、五六歳、雅邦門、會員、帝技  
驟 雨 歸 漁 尺八絹 着 淡 五二 三三 清野林家  
杜 若 飛 燕 尺五絹 着 一〇 同 同  
紫 藤 小 禽 紙半切 着 一六 同 同  
竹 旭 波 紙横物 着 三六 三三 兒島松森家  
溪 山 色 絹大幅 着 一三 四八 林 家  
晚 江 歸 漁 尺八絹 着 三六 同 同  
川 狩 尺五絹 着 三六 同 同  
山 雀 紙横物 着 一〇 二三 堤 某家  
蘆 紙横物 着 一〇 二三 堤 某家
- ▲鑄木清方 東京生、東京現住、五一歳、年方門、委員美人畫の大家  
紙 雛 尺三絹 着 三〇 三三 妙喜庵某家  
夏 月 絹横物 着 三六 三三 山内親山家  
春雨の晴間六曲屏風 一 雙 着 八〇 四八 林 家
- ▲松林桂月 山口生、東京現住、五三歳、函谷門、委員、長所花鳥山水  
金碧青山白雲 尺五絹 着 一七 三三 兒島松森家

一〇一〇一

〔キ、ケ、コ、シ、セ〕 玉、清桂、古十秀 一〇一〇一

- 青山 閑 居 二尺絹 着 一六 四五 木谷某家  
賦 色 軍 鷄 尺八絹 着 三六 同 同  
松 林 幽 居 尺五絹 着 三六 同 同  
喬 木 燕 尺五絹 着 二六 同 同  
松 鶴 尺五絹 着 一六 二三 堤 某家
- ▲池田桂仙 津生、京都現住、父雲樵に學ぶ南宗派山水人物に長ず  
前 赤 壁 尺五絹 着 二六 四五 木谷某家  
普風徐來人宛在池雙幅 尺五絹 着 三六 同 同
- ▲小林古徑 新潟生、東京現住、四六歳、年古門、美術院同人  
牡 丹 雙 幅 紙半切 着 三三 三三 妙喜庵某家
- ▲荒木十畝 長崎生、東京現住、五七歳、寛政制子、會員花鳥畫の大家  
黃 梅 小 禽 尺五絹 着 一八 四二 山内親山家
- ▲池上秀畝 長野生、東京現住、五五歳、寛政門、委員花鳥山水に長ず  
紫 藤 小 禽 尺五絹 着 一六 三三 兒島松森家  
池 呼 尺八絹 着 三〇 四二 山内親山家  
老 松 舞 鶴 絹大幅 着 四八 四八 林 家  
黃 鹿 二尺絹 着 三六 同 同  
四季花鳥四幅對 尺八絹 着 三六 同 同  
紅 燈 全 紙 着 三六 同 同  
高 士 觀 瀑 尺五絹 着 一六 四五 野 原 家  
柳 塘 黃 蘆 尺二絹 着 一六 同 同  
紅葉=雄子柳=雙雙幅 尺八絹 着 五八 二四 山口稻垣家



日 之 出 尺八絹 着 二二二 山口稻垣家

▲村田丹陵 東京生、東京現住、五六歳、御橋門、有職故實の畫に長ず  
高貴 看 櫻 尺八絹 着 一元 三四 田中某家

▲山内多門 宮崎生、東京現住、五一歳、玉堂門、委員、山水に長ず  
春莊訪友秋水泛舟双幅 尺八絹 着 三〇〇 三四 田中某家

▲宇田荻郵 京都現住、三三歳、梨月門、委員、花鳥人物に長ず  
鶉 尺五絹 着 一五 三三 兒島松森家

▲東郷平八郎 鹿兒島生、八三歳、元帥、海軍大將、大勲位伯爵  
五 字 額 一五二 三四 田中某家  
八 字 額 三四 三三 兒島松森家  
四 行 七 絶 全紙 着 三三六 二二 林濱野家

▲西園寺陶庵 (公認) 京都生、八〇歳、維新の元勳、内閣元老、大勲位公爵  
二 行 尺三統 草 着 五八〇 六三 福澤家

▲小堀鞆音 栃木生、東京現住、六五歳、土佐派會員、帝技、東美教授  
稚 兒 文 珠 尺八絹 着 二〇〇 三三 妙喜庵某家

▲橋本獨山 京都相國寺管長、鑑賞に學ぶ  
給 上 對 座 尺五絹 着 九二 三三 兒島松森家  
幽 谷 泉 閣 尺五絹 着 七五 同 同

▲田中柏陰 京都生、京都現住、六二歳、直入門、山水に長ず  
〔女子、十八〕 大丹多、荻、東、陶、獨、橋 一〇二七

書畫賣買相場 一〇二八

中觀、香左芝相長三幅對 紙半切 着 一元 五〇 野原家  
春布松竹梅石二幅對 着 一元 五〇 野原家

▲土田麥僊 新潟生、京都現住、桐風門、委員、國展同人、長所人物、花鳥  
啄 木 鳥 尺中絹 着 二元 三三 妙喜庵某家  
栢 榴 小 禽 尺三絹 着 一五 三三 兒島松森家

▲平福百穂 秋田生、東京現住、五二歳、種庵の男、玉章門、帝展委員  
老 松 紙聯落 着 三三 三三 兒島松森家  
鶉 紙半切 着 三六 四二 山内親山家  
鳳 仙 花 尺三絹 着 四六 四五 木谷某家  
秋 山 遊 鹿 尺中絹 着 三三 二七 毛利某家  
香 魚 紙聯落 着 一六 二二 林濱野家  
白 梅 紙大幅 着 三六 二九 勝伯柳下家

▲木村武山 茨城生、東京現住、五三歳、雅那門、美院同人、設色の名手  
觀 晉 絹大幅 着 六九 四八 林家  
熊野梅花人物 絹橫物 着 三九 九三 村井家

▲福田平八郎 大分生、京都現住、三七歳、京繪出、委員、花鳥に長ず  
芍 尺五絹 着 三〇 三三 兒島松森家

▲高島北海 山口生、山口現住、七九歳、南宗派、元文齋、山水に長ず  
金 碧 山 水 二尺絹 着 三〇〇 三三 兒島松森家  
夏 秋 山 水 双幅 尺五絹 着 一五九 一〇〇 某家  
露 景 山 水 二尺絹 着 一五九 一〇〇 山口稻垣家  
富士川 春 景 二尺絹 着 二二 同 同  
龍華寺 望 嶽 絹橫物 着 二五 同 同

春景、鐵舟寺望嶽 絹橫物 着 一元 同 同

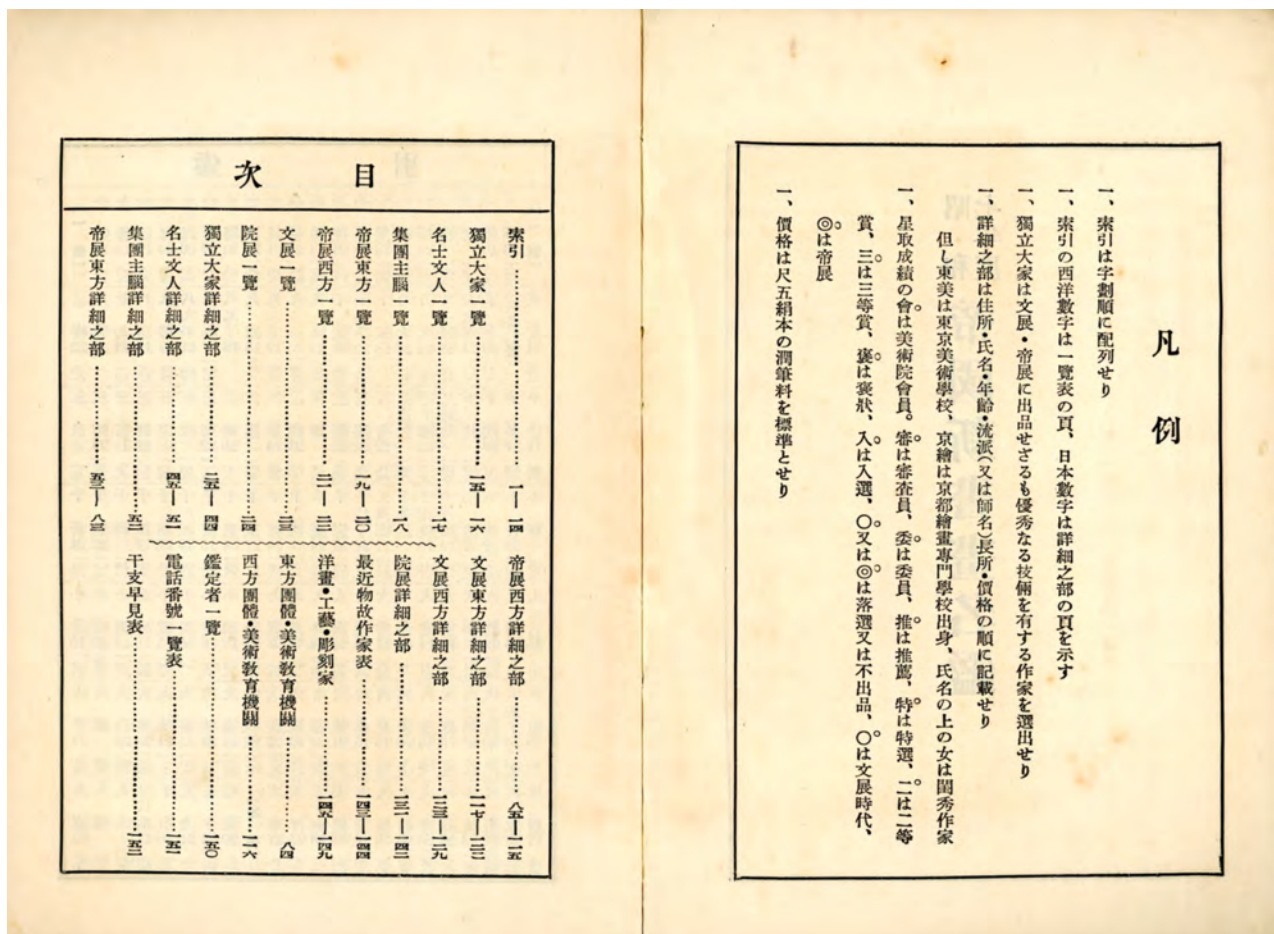
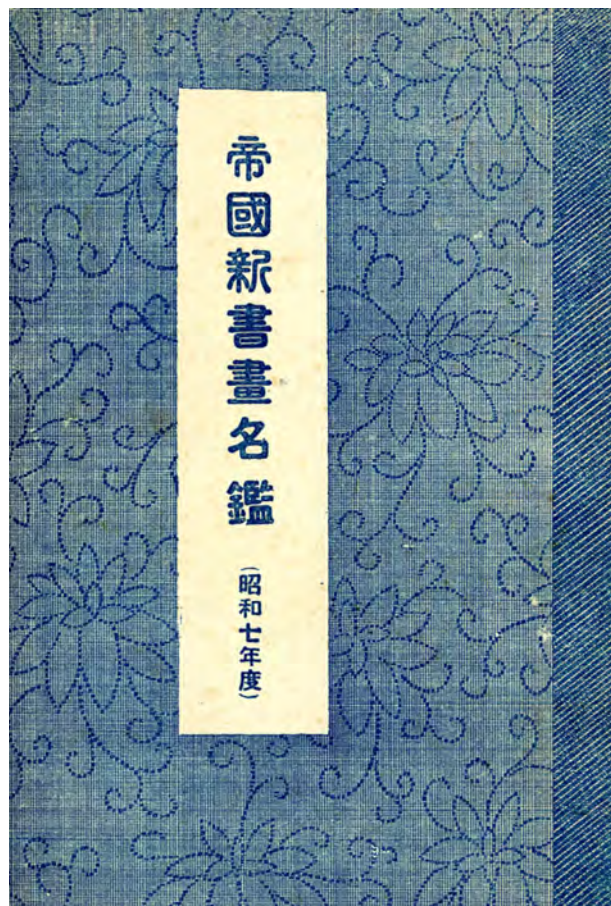
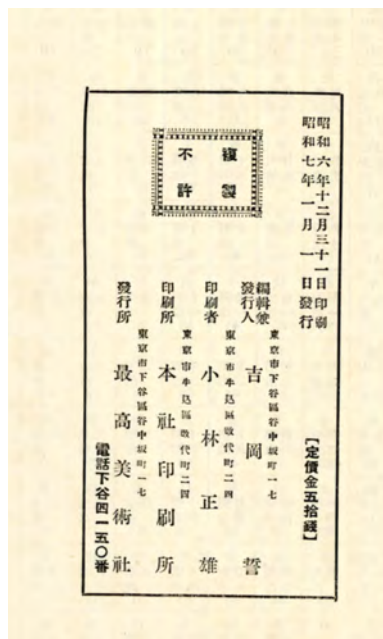
▲川村曼舟 京都生、京都現住、五二歳、春華門、帝展委員、山水に長ず  
富 士 川 尺八絹 着 三六 三四 田中某家

▲田中頼璋 鳥根生、東京現住、五九歳、玉章門、帝展委員、山水に長ず  
水會山中 殘 雪 尺八絹 着 一八 二二 林濱野家

▲吉川靈華 東京現住、五四歳、新音門、帝展委員、道釋人物に長ず  
月下高士登子脚雙幅 紙半切 着 四六 三三 妙喜庵某家  
かざしの花 畫 紙半切 着 三九 四二 山内親山家  
狩 場 明 神 紙橫物 着 一三 同 同  
官 女 畫 贊 紙橫物 着 三三 同 同  
酒 賣 女 畫 贊 紙橫物 着 三三 同 同  
香 賣 女 畫 贊 紙橫物 着 三三 同 同  
伯 藏 主 紙橫物 着 一〇 同 同  
馬上美人 畫 贊 紙橫物 着 三九 同 同  
梅 紙橫物 着 三六 同 同  
聖 德 聖 物 語 紙橫物 着 一〇〇 同 同

〔ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、マ、ラ、レ、ニ、ハ、武、平、北、島、頼、璋〕 一〇二九

※本史料のうち、作家の詳細がわかる部分のみを抜粋した。後続の史料と本史料は一組として活用が期待されたと考えられる。









五七

本郷區助坂町六八 太田 秋民 十歳 人物 七〇  
 市外上落合四二五 小泉 勝徳 七歳 東美 花山 七〇

〔帝展 五段格〕  
 下戸塚三三 相模郡北尾形 月山 八歳 人物 七〇  
 市外代々橋橋ヶ谷 今中 泰久 及 四七 玉堂 花鳥 七〇  
 本郷區駒込神町三三 佐竹 水隆 六歳 永徳 山水 七〇  
 深川區富岡町二ノ三 稲田 浩海 八歳 永徳 山水 七〇  
 大井町倉田三二六九 伊藤 牛藏 六歳 竹園 山水 七〇  
 市外長崎町四原六一 竹原 常風 六歳 龍井 山水 七〇  
 市外長崎町四原六一 安田 牛藏 六歳 竹園 山水 七〇  
 下谷區谷中眞島町一ノ四 宮田 司山 四歳 十歳 花鳥 七〇  
 市外世田ヶ谷代田六 戸室 臨泉 七歳 玉堂 山水 七〇  
 市外瀧野川上中里五ノ古屋 正壽 八歳 多門 山水 七〇

〔帝展 四段格〕  
 市外大崎町上大崎 關谷 雲崖 五歳 雲山 山水 七〇

五八

市外松澤村松原三 石渡 風古 四歳 玉堂 人物 七〇  
 市外世田ヶ谷橋本七ノ七 横尾 翠田 三歳 翠雲 山水 七〇  
 下谷區池之端七軒町六 大木 野千五 七歳 龍井 人物 七〇  
 市外野方町江古田 藤田 豐四郎 七歳 龍井 人物 七〇  
 下谷上野橋本町三六 常岡 文雄 五歳 東美 花鳥 七〇  
 下谷清水町一五 岩田 正巳 七歳 龍井 人物 七〇  
 下谷七軒町吾大 藤方 泰 白甫 四歳 十歳 花鳥 七〇  
 本郷區東片町三 藤崎 逸隆 六歳 東美 人物 七〇  
 市外神文谷八二二 落合 朋風 七歳 梨月 人物 七〇  
 市外日暮里町二二 眞井 晃隆 七歳 東美 人物 七〇  
 市外駒澤町深澤二二 吉田 登雲 七歳 桂月 花鳥 七〇  
 芝區三田四國町一五 高瀬 五郎 七歳 東美 人物 七〇  
 市外杉並町高圓寺 關部 光邦 七歳 東美 山水 七〇  
 市外千住大川町一 池澤 青崎 七歳 龍井 人物 七〇  
 赤坂區坂町二二 榎本 千花 七歳 清方 人物 七〇

市外日暮里元舎彩三六 恩田 得壽 六歳 雅那 花鳥 七〇  
 市外杉並町天沼二 石塚 省三 七歳 東美 花鳥 七〇  
 野方町江古田南原三三 市原 壽一 七歳 忠夫 人物 七〇  
 池谷町上智四一 小早川 清三 七歳 清方 人物 七〇  
 網生市五ノ雲鈴木方 岡田 晴峰 六歳 翠雲 山水 七〇  
 小石川區第六天町一 藤岡 榮峰 三歳 玉堂 山水 七〇  
 本郷區弓町一ノ二五 坂内 青丸 四歳 東美 人物 七〇  
 市外世田ヶ谷中原六 坪田 正宗 六歳 東美 人物 七〇  
 市外和日堀町和泉四 伊藤 龍海 五歳 廣業 人物 七〇  
 市外松澤村松原三 岸浪 靜山 四歳 翠雲 山水 七〇  
 市外原宿町三〇六 佐々木 林風 四歳 東美 凡 七〇  
 四里鴨宮仲二〇 四四 鈴木 朱雀 三歳 花鳥 人物 七〇  
 牛込區加賀町二ノ三 太田 一彩 三歳 玉堂 人物 七〇  
 市外池袋町一〇九三 村島 西一 三歳 東美 花鳥 七〇  
 下谷區谷中眞島町一 金子 米野 七歳 翠雲 山水 七〇

五九

六〇

六一

市外駒込町三三 増田 千代松 三歳 花鳥 七〇  
 市外大森谷月三三 藤井 毅禮 五歳 凡 七〇  
 本郷區駒込駒坂町一ノ四 横尾 芳月 三歳 龍井 人物 七〇

〔帝展 三段格〕  
 牛込區市谷砂土原町三 大島 佳山 五歳 山人 七〇  
 牛込區若宮町三三 都筑 眞琴 七歳 玉堂 花鳥 七〇  
 市外神代町谷二四二 西尾 廣精 七歳 凡 七〇  
 本郷區駒込林町一七 藤田 久也 七歳 東美 人物 七〇  
 市外瀧野川四ヶ原 乾 南陽 三歳 雅那 人物 七〇  
 市外日暮里町四九八 藤田 柏邦 七歳 東美 人物 七〇  
 本郷區駒込駒坂町三三 廣川 博一元 七歳 東美 人物 七〇  
 市外野方町上高田 小柴 泰泉 七歳 山水 七〇  
 市外西里鴨宮仲三三 田嶋 美山 七歳 玉堂 山水 七〇  
 市外瀧野川上中里五ノ古屋 池城 興九 七歳 翠雲 山水 七〇  
 下谷區眞島町一ノ四 太田 義一 四歳 葉明 人物 七〇

六二

市外西里鴨宮仲三三 野本 文雄 七歳 川端 風景 七〇  
 市外井坂町上井草三三 藤部 幸兵 七歳 玉堂 山水 七〇  
 小石川區高田老松町四ノ三 浅見 松江 七歳 人物 七〇  
 本郷區駒込林町七六 角田 繁合 七歳 廣業 花鳥 七〇  
 市外下落合二一六二 白井 剛夫 七歳 人物 七〇  
 千原區八幡町菅野式 高田 美一 七歳 玉堂 花鳥 七〇  
 王子町堀之内 齋藤 隆志 三歳 龍井 花鳥 七〇  
 赤坂區赤坂米田町三三 三輪 敏夫 七歳 龍井 風景 七〇  
 市外松澤村松原六 山下 巖 五歳 多門 風景 七〇  
 市外代々木西原 秋元 節朗 七歳 龍井 風景 七〇  
 市外世田ヶ谷若林 藤澤 菱花 七歳 龍井 花鳥 七〇  
 市外池袋町柏木三三 藤藤 弓弦 七歳 新音 人物 七〇  
 本郷區四片町十三 田代 古雄 五歳 半古 人物 七〇  
 下谷區眞島町一ノ一 富田 范溪 三歳 秀敏 花鳥 七〇  
 金澤市十三間町三三 玉井 敬泉 七歳 歌中山 花鳥 七〇

西里鴨宮仲三三 七四 宮澤 謙夫 三歳 東美 風景 七〇  
 世田ヶ谷下北澤二二 大山 雅堂 三歳 翠雲 山水 七〇  
 市外瀧野川四ヶ原 江川 武村 四歳 廣業 人物 七〇  
 市外代々木五四六 井上 恒也 七歳 東美 人物 七〇  
 深川區島崎町五 高須 芝山 四歳 芝田 山水 七〇  
 市外杉並町高圓寺 清水 有聲 四歳 玉堂 人物 七〇  
 市外西里鴨宮仲三三 外海 烟富 七歳 桂月 山水 七〇  
 市外瀧野川四ヶ原 三三 蛭子屋 勇壽 九歳 花鳥 七〇  
 廣布區常町九四 大津 雲六 七歳 桂月 山水 七〇  
 小石川區大塚坂下町三三 門井 掬水 七歳 清方 美人 七〇  
 市外世田ヶ谷下北澤三三 大栗 栗園 四歳 翠雲 山水 七〇  
 市外杉並町馬橋三三 久本 春雄 七歳 東美 花鳥 七〇  
 下谷區上根岸一 二 吉田 茂三 七歳 川端 風人 七〇  
 市外南千住町五ノ一 藤 啓敏 四歳 眞藏 花鳥 七〇  
 市外瀧野川神泉二二三 八幡 白帆 三歳 百穂 凡 七〇

〔帝展 二段格〕  
 本郷區駒込林町一四 穴山 勝堂 七歳 映丘 山水 七〇  
 市外世田ヶ谷上町 南都 春井 七歳 玉堂 花鳥 七〇  
 市外下落合七三 上原 桃蔵 五歳 眞藏 花鳥 七〇

六三

六四

六五

市外高麗寺四九	三枝	赤光	竹城	花鳥
赤坂青山町二	木村	接雲	翠雲	山花
三重松坂町殿	二見山	紫明	四東	山花
本郷區生町二	八木	宗木	月取	真藏
市外上馬五	六	浪	龍	乾
市外上馬三	一	田	豐	龍
市外松澤村赤堤	六	泉	赤	石
市外松澤町四	〇	小野	竹	松
市外松澤町三	一	佐藤	華	折
下谷區谷中清水	二	佐藤	華	折
市外野川中里	〇	木田	蕉	風
市外野川町上馬	六	渡	元	清
市外野川町四	三	加藤	國	堂
本郷駒込林町一	六	佐藤	人	美
世田谷町榎木	七	四	平	野
小石川區關口水道	町	藤	藤	藤

六六

下谷區中根岸町世	二	柴田	耕	海
下谷各中上三	崎	野	上	山
神奈川縣高上	藤	谷	竹	林
市外代々木	初	葉	山	田
市外上戸塚上	藤	一	木	根
市外梅島町二	六	中	谷	光
市外千歳村島山	七	池	田	太
市外世田谷太子	堂	二	渡	三
市外長崎町西	向	六	王	井
市外松澤村松原	六	〇	安	田
市外板橋町中	丸	〇	橋	瓜
市外長崎町芝	井	一	〇	小
下谷區登佳町一	〇	〇	〇	〇
本郷天神町七	〇	〇	〇	〇
市外野方下	沼	袋	二	〇

六七

下谷區上野榎木町	五	渡	年	七
市外世田谷太子	堂	四	島	〇
小石川區鎌倉	町	七	池	上
本郷神明町	早	舟	方	〇
市外阿佐谷	世	尊	院	中
市外花原町	戸	越	五	六
下谷區上野榎木町	〇	八	〇	〇
市外駒込新町	一	〇	〇	〇
日本橋區新和	泉	町	六	〇
市外阿佐谷	四	三	五	〇
小石川區表町	久	新	社	安
市外駒込	上	馬	三	〇
市外千歳村	島	山	三	〇
市外黒鷲町	上	駒	三	〇
千歳村下	祖	師	ヶ	谷

六八

本郷區根津宮水町	山	榎	本	〇
本郷區駒込神明町	天	九	〇	〇
本郷根津須賀町	一	〇	〇	〇
市外上落合	二	〇	〇	〇
市外大久保	百	人	町	三
本郷區根津須賀町	二	〇	〇	〇
市外表町	下	非	草	三
市外長崎町	大	和	田	三
神奈川縣藤澤	湯	沼	〇	〇
四谷區本村町一	〇	〇	〇	〇
市外世田谷	三	三	〇	〇
市外板橋町	馬	場	二	〇
下谷區上樓岸町	四	〇	〇	〇

六九

市外世田谷	代	田	六	〇
小石川小日向	三	〇	〇	〇
赤坂區青山	高	樹	町	三
市外野川	一	四	〇	〇
市外上高井	戸	原	〇	〇
宮城縣松島	海	岸	〇	〇
小石川區原町	大	光	山	〇
本郷區駒込	林	町	一	〇
市外南千住	一	〇	〇	〇
市外上駒込	三	林	武	方
市外野方町	上	沼	袋	六
金澤市上	本	多	二	〇

七〇

市外駒込	千	駄	木	町
市外下高井	戸	二	六	〇
市外野川	町	上	馬	三
市外駒込	新	町	四	〇
市外杉並町	阿	佐	谷	六
世田谷太子	堂	三	〇	〇
下谷區谷中	三	〇	〇	〇
市外野川町	野	川	中	里
市外世田谷	白	田	〇	〇
市外松澤村	赤	堤	六	〇
市外和	田	堀	町	南
本郷區根津須賀	町	二	〇	〇
市外和	田	堀	町	南
市外千駄木	三	〇	〇	〇

七一

本郷駒込	千	駄	木	町
市外下高井	戸	二	六	〇
市外野川	町	上	馬	三
市外駒込	新	町	四	〇
市外杉並町	阿	佐	谷	六
世田谷太子	堂	三	〇	〇
下谷區谷中	三	〇	〇	〇
市外野川町	野	川	中	里
市外世田谷	白	田	〇	〇
市外松澤村	赤	堤	六	〇
市外和	田	堀	町	南
本郷區根津須賀	町	二	〇	〇
市外和	田	堀	町	南
市外千駄木	三	〇	〇	〇

七二

市外天口町	野	澤	九	〇
市外世田谷	下	北	澤	〇
市外野川	町	上	馬	三
市外中野町	千	光	院	二
市外野川	五	三	〇	〇
市外野川	四	〇	〇	〇
市外吉祥寺	野	田	力	間
市外長崎町	大	和	田	三
下谷區	本	町	九	〇
市外小岩村	小	岩	三	〇
市外田端	六	〇	〇	〇
下谷區	初	音	町	四



八一

Table listing artists and their works, including names like 神奈川比之木, 市外新井, and 小石川區...

八二

Table listing artists and their works, including names like 宇都宮市中原町, 市外池袋, and 淺草區...

〔東方團體・美術教育機関〕

Table listing various art organizations and institutions such as 東京文部省, 帝國博物館, and 女子美術學校...

八三

八四

八五

Table listing artists and their works, including names like 京都東山高家, 京都市高倉, and 京都市西野...

八六

Table listing artists and their works, including names like 京都新島丸下, 京都東山通妙法院, and 京都八坂通東大路...

八七

Table listing artists and their works, including names like 京都北野紅梅, 京都油小路, and 京都四ツ院...

八八

Table listing artists and their works, including names like 京都左京區永觀堂, 京都小川通, and 京都下鴨森前町...

九一

京都下鴨下河原町三ノ川口 吳川 楓風 人物 聖  
 京都御池通堀川東入 竹内 鳴鳳 楓風 人物 聖  
 京都小松原六三北町 谷角日談春元 契月 人物 聖  
 京都市三十三間堂 野添 平米 八 契月 人物 聖  
 京都岡崎東天王町六 龍吟 紅朝元 京極 人物 聖  
 京都平野上柳町七 木村 丈天 三 寫生 凡 同  
 名古屋南熱田玉ノ井石川 英鳳 三 聖峰 花鳥 同  
 京都伏見桃山崎井野野野 空外 美工 山花 同  
 京都市下河原町 橋本 虹影 三 楓風 花鳥 同  
 京都右京區嵯峨若野大次 藤瀨 三 楓風 花鳥 同  
 京都葛城如堂前二 橋本 鏡香 五 聖山 人物 同  
 京都衣笠小松原北町中野 草葉 三 春華 凡 同  
 京都東山區古門前 入道 根原 三 契月 人物 同  
 愛知縣守山町文化村 橋山 龍生 文 櫻 凡 同  
 京都東山清雨寺山の内鐘ヶ江辰一 寫生 凡 同

九二

京都衣笠南道町一四 大幸 雲泉 西 契月 凡 同  
 京都法勝寺町一七 川上 拙以 三 聖峰 凡 同  
 京都淨土寺西門橋北入吉田 銅牛 三 京極 凡 同  
 京都東山安井南邊 三輪 超世 四 印章 凡 同  
 四安市泉町一九 金森 觀揚 三 越堂 人物 聖  
 京都左京區吉田中 大踏 柴田 吟 紫 六 春華 凡 同  
 京都岡崎天王寺町 浦島 春華 七 春華 花鳥 同  
 京都東福寺山内南野院川畑 春華 三 春華 山花 同  
 名古屋錦屋上野山 朝見 香城 三 聖峰 山水 同  
 京都鳥丸通上御膳前下河野 秋起 三 竹 聖山 同  
 京都鹿ヶ谷法然院町七松永 冠山 元 京極 山水 同  
 京都今所野町 宮前 水田 貞聖 五 京極 山水 同  
 京都左京區水都堂町 猿原 大華 式 京極 花鳥 同  
 京都紫野北越町 藤山 辨次 三 京極 凡 同  
 京都鳥丸通丸太町上 西村 霞明 三 寫生 山花 同

八九

京都左京區吉田下大路橋中 直齋 三 春華 人物 公  
 京都下鴨宮崎町 東原 方體 三 楓風 花鳥 公  
 京都五條橋東六ノ二 三木 翠山 三 寫生 花鳥 公  
 京都今船野南日吉町 野田 哲三 春華 人物 公  
 名古屋市中區上津町 首稻 三 土佐 人物 公  
 【帯屋五段格】  
 京都錦小路柳馬場西入木村 野光 六 契月 凡 同  
 京都岡ノ町竹屋町上上村 松葉 三 京極 花鳥 同  
 大阪住吉平野馬場三 矢野 鏡山 元 櫻村 山水 同  
 京都今出川上ノ白倉 二階 六 五老 山水 同  
 京都市高倉御池上ノ山本 紅雲 三 楓風 花鳥 同  
 京都市等持院西町 山本 成隆 三 楓風 美人 聖  
 大阪清水町綿屋町 尾崎 成隆 三 楓風 美人 聖  
 大阪中河内郡長瀬村 木谷 千種 元 浮世 美人 聖  
 京都深草町字石峰寺山田 藤葉 三 春華 花鳥 聖

九〇

【帯屋四段格】  
 京都所子治町浮島前 松元 道大 七 京極 人物 公  
 京都釜座通一條下 三宅 廣白 三 京極 山花 公  
 大坂市天王寺上之宮 生田 花柳 三 恒富 人物 公  
 京都市外稻野山岡吉 中島 春隆 六 春華 山水 公  
 京都市外稻野山岡吉 中島 春隆 六 春華 山水 公  
 京都市外稻野山岡吉 中島 春隆 六 春華 山水 公  
 京都上京區丸通寺内北上 聖三 楓風 凡 同  
 京都下鴨中川原町 不登 立山 四 楓風 人物 聖  
 京都大森停留所東下 中村 春樹 三 春華 山水 聖  
 京都市下鴨芝木町三ノ小村 藤隆 三 京極 花鳥 聖  
 京都市岡崎法勝寺町 藤田 雲光 元 聖峰 花鳥 聖  
 京都東山區今熊野南伊藤 淡水 三 春華 花鳥 聖  
 京都衣笠南道町四ノ岡本 海陽 六 楓風 凡 同  
 京都北白川平井三ノ西 櫻井 三 京極 花鳥 同

九五

京都府伏見菊屋町 江口 藤河 四 楓風 凡 同  
 京都古門前御手東入 長瀬 雲華 九 芳文 凡 同  
 京都衣笠下山壽院前入 川邊 華雲 三 京極 山水 同  
 京都上御靈前通馬口小村 春樹 三 春華 山水 同  
 京都吉田泉殿町 橋本 仙華 五 春華 山水 同  
 京都上京區大泉町吹田 京佐 三 楓風 山水 同  
 京都岡崎町真如堂前 島田 清竹 三 京極 人物 同  
 京都鹿ヶ谷寺前町 貴道 燕衣 三 春華 山水 同  
 大阪港區泉尾通一ノ入 稻村 虹亭 三 春華 山水 同  
 京都市外花園村大雲院 木偶 元 聖峰 凡 同  
 京都上京區小山水木町 藤山 春深 六 楓風 山水 同  
 京都淨土寺馬場二ノ藤村 茂雲 三 楓風 花鳥 同  
 京都府深草寶塔寺前 山口 大子 三 春華 凡 同  
 京都東區町六六 木村 杏園 三 南泉 凡 同  
 京都花園妙心寺海鏡院大島 芳登 三 京極 凡 同

九六

京都府野今宮町三 衣笠 大 三 春華 風景 同  
 市外修學院村中林三 堀 飛火 野 三 京極 凡 同  
 京都深草町石峯山 村上 蘭田 三 竹園 山水 同  
 京都東山若王子町四ノ加藤 晴樹 四 楓風 花鳥 同  
 京都梅津間町六 青木 生沖 三 楓風 山水 同  
 京都市外花園町十 高山 完 三 聖峰 凡 同  
 名古屋中區下南津町 喜多村 麥子 三 聖峰 花鳥 同  
 京都市外區賀茂 森町 樹平 七 京極 風景 同  
 奈良市降院殿町 井倉 三 一 三 京極 風景 同  
 京都油小路小下 齋木 武雄 三 契月 人物 同  
 京都等持院中町三七 平間 且隆 三 春華 花鳥 同  
 京都嵯峨野有橋川町 中村 清太郎 三 京極 凡 同  
 京都山北野織屋川町 辻 宇佐雄 三 京極 風景 同  
 京都東區丸太町下 中川 正次 元 五雲 花鳥 同  
 京都下鴨芝木町一ノ幸田 春耕 六 春華 花鳥 同

九三

京都山科御陵鴨戸二 奥村 紅穂 三 五雲 風景 聖  
 京都堺町夷川上 今尾 景春 三 聖峰 風景 同  
 京都東山區衣笠殿町 岩屋 義雄 三 契月 花鳥 同  
 京都東大路八坂西小石山本舖三郎 春華 三 花鳥 同  
 京都府花園上谷口 秋田 仙高 三 聖峰 人物 同  
 京都府山科上安來中津中堂 長隆 三 聖峰 風景 同  
 京都下鴨宮崎町三ノ戸田 北道 三 聖峰 花鳥 同  
 【帯屋三段格】  
 京都大原村 藤隆 小松 三 三 聖峰 花鳥 同  
 京都寺町通今出川上ノ中塚 一杉 三 五雲 花鳥 同  
 京都下鴨中河原一本松 中井 藤谷 三 楓風 凡 同  
 京都左京區岡崎法勝寺町 柴原 春樹 六 美工 山水 同  
 京都新一條萬里小路東栗林 太外 三 春華 人物 同  
 京都塔之段松ノ木町 和氣 春光 六 契月 花鳥 同  
 京都塔之段櫻木町六ノ土肥 森樹 六 楓風 人物 同

九四

京都上京區小松 寺田 蘆秋 元 聖峰 花鳥 同  
 京都西三木丸太町上ノ山口八ノ三 京極 凡 同  
 京都淨土寺院町 稻垣 三 聖峰 山水 同  
 京都南禪寺水鏡堂町三竹村 白藤 六 光輝 凡 同  
 同時寺六供町西二木本 三 陽 三 玉雲 山水 同  
 京都市外深草石峰寺山佐ノ木春華 元 春華 凡 同  
 京都下鴨宮崎町五ノ大高 爲山 三 聖峰 花鳥 同  
 京都鹿ヶ谷櫻谷町八ノ堀江 春雲 三 春華 花鳥 同  
 京都紫野御所田町 赤井 龍民 三 契月 風景 同  
 京都今出川七木杉 高橋 史光 六 契月 人物 同  
 京都花園妙心寺 北野 以信 一 聖峰 人物 同  
 神戶市下澤通一ノ大橋 北井 三 聖峰 人物 同  
 京都河原通御所前上ノ田村 豐州 六 五雲 花鳥 同  
 京都塔之段表下町 須藤 雨亭 六 竹園 山水 同  
 和歌山縣海草郡御津川 三指 四 竹園 山水 同

九三

九七

京都下鴨北園町三	廣本	進云	春華	山水
京都南禪寺町正	院	豐島	停雲	楓風
京都市島丸通	丸太町南大	一	墨子	蘭
京都市須磨町月見山	立臨	泰山	楓風	凡
大坂北區堂島中	水野	燕清	楓風	山人
京都市佛具屋町	魚浦上武内	荒紅	楓風	山人
京都市立賣下	光澤寺内小島	紫光	楓風	山人
京都小川通御池上	加地	種月	春華	山人
京都新島丸通	通下小松	華影	楓風	山人
京都下鴨北園町	三	奥本	青雲	三竹園
京都出雲路内	河原町八本庄	陶苑	三翠峰	風景
京都上京區	笠大藏町杉山	群司	三春華	風景
京都下鴨松ノ木町	心井上	正晴	三翠峰	風景
京都市外總町	若宮三宮尾	光峰	三鶴女	風景
京都清水三丁目	谷口力池田	榮廣	三印象	凡
京都伏見稻荷	板木橋三水野	深神	三翠峰	風景
京都智恵院北	林海峽院鐵田	又二郎	三翠峰	風景
京都法然院	町八四	冬木	清三	光球
京都市大宮通	四條南入	中島	一則	三契月
京都寺町	本町寺内	島津	華山	五雲
上京區南田三	田川方和田	善華	三翠峰	人物
大坂上福島北	丸尾	芝香	三春油	山水
京都西崎野	種子辻	榮藤	紫山	三春華
京都市衣笠	天神ノ森町大藏	春登	三春華	花鳥

九四

九八

京都下立賣通	小川四入川	三	江	三
京都小松原北	町六	九	池	内
京都乙訓郡	新野村	梅村	三	深
京都同崎岡	寺町二	木村	三	櫻
京都市中長者	西河院	入加	柳	三
大坂西區	區南海通	仁木	作	三
京都淨土寺	南田町	六	四	大
大坂天王寺	寺人町	三	一	三
京都下鴨	芝木町	三	一	三
奈良公園	四季亭内	不二	木	阿
京都赤坂町	一	六	二	奥
京都松原	六道珍皇寺	内	岩	周
京都出水	通衣通東	入	伊	藤
大坂東區	北清水	六	三	竹
京都下鴨	中川原町	三	山	木
京都左京	下鴨北園町	一	寺	島
京都北野	紅梅町	三	五	若
京都市淨土	寺	三	三	三
京都右京區	花園南町	三	中	野
京都智恵院	三門前北	福山	三	三
京都市外	深草石室	寺	通	田
京都特異	町三	九	寺	津
京都小山上	總町	三	七	持
京都下鴨	森少前町	二	高	田
京都上京	西田下	大	路	三
明石市	櫻町	一	丁	目
京都下加茂	芝木町	同	本	神
大坂北區	上福島	中	四	丸
京都五條	坂八幡	南	入	森

九九

一〇〇

一〇一

京都妙心寺	雲祥院	前田	賢	三
京都一極	通屋川	東	上	井
名古屋	市區	區	町	云
舉市	町	四	一	一
京都猪	通上	立	下	下
大坂市外	豐中町	高	上	原
京都萬里	小路	丸方	國	友
京都左京區	大北山	赤坂	山	兩
大坂市北區	相生町	芝	中	島
京都仁王門	通川	端	吉	田
京都左京	町	芝	木	二
京府	府	島	一	六
京都若	王子	神	社	坂
京都清水	坂土	地	會	社
京都左京	大	桑	井	月
京都等持	院	町	一	七
京都同崎	岡	寺	町	東
名古屋	御器	所	町	東
京都淨土	寺	馬	場	町
京都市外	大	太	村	市
伏見市	東	東	寺	町
京府	府	光	照	町
名古屋	千	種	町	元
京都市	左	京	區	谷
京都衣笠	大	藏	町	三
京都上京	區	淨	土	寺
京都同崎	岡	東	町	六
別府市	楠	通	六	丁
京都上京	區	上	總	町
大坂府	牧	野	村	美

一〇二

一〇三

京都下鴨	鴨	木	町	七
大坂住吉	區	南	田	通
京都平野	宮	北	三	村
京都油	小路	下	三	二
京都右京	區	花	岡	伊
廣島縣	高	田	郡	向
京都野	野	東	門	町
京都下鴨	松	木	町	六
京都相國	寺	南	門	前
京都上京	區	紫	竹	東
京都市	風	ヶ	谷	之
京都岩上	通	松	原	北
京都東山	區	山	科	町
京都押	小	路	東	洞
京都同崎	岡	町	墨	谷
大坂南區	西	橋	町	三
京都北野	紅	梅	町	三
京都左京	區	淨	土	寺
京都寺町	通	廣	小	路
京都衣笠	南	道	町	八
尾道市	長	江	町	三
京都二條	離	宮	西	通
京都北	松	ヶ	崎	上
京都八坂	通	大	和	大
京都油	小	路	通	竹
京都太	藏	寺	南	門
京都東山	區	山	浦	水
京都大和	大	路	七	條

一〇四

105

京都三條泉橋東門方川津 東門：花鳥  
 京都室町御池下 山口 峯井：寶生 花鳥  
 大坂市外玉田町三 杉本 春江：春華 山水  
 京都市墨谷顯學院内 玉城 木一：京繪 人物  
 京都新橋木町竹屋 北田 斐津浦：藤崎 山水  
 京都今出川大宮東入 中井 正利：新瀨 凡  
 京都下京區日吉町 大津 壽生：京繪 花鳥  
 京都市外深草町六 大津 秀世：新瀨 花鳥  
 相州大磯町山王三三 村上 三郎：京繪 人物  
 京都東山高蓋寺北門 佐野 源水元 竹園 山水  
 京都葛野郡大森村 谷方 吉原元 京繪 凡  
 京都東山通松玉水町 田島 大光：契月 人物  
 京都墨門通丸太町北三三 坂一：京繪 花鳥  
 京都神樂々町町番形 坂一：京繪 花鳥  
 京都下鴨芝木町三三 大西 久光：京繪 花鳥

106

大坂南區下寺町四ノ橋本 花乃：恒富 人物  
 在 米 國 橋本 三三 關 人物  
 京都四洞院通姉小路北中井 陶處三 契月 凡  
 京都市西區東三近江方 秋田 成香三 成國 人物  
 京都市堀川通今出川上 多川 富良：京繪 人物  
 大坂西區南堀川下通四別役 月乃：恒富 人物  
 京都吉田町牛宮七 二宮 一地：京繪 凡  
 京都上京區天神町谷口 竹重四 櫻谷 風景  
 京都都伊部町青藤院行 安田 梅屋三 翠峰 人物  
 京都都錦町須賀村三浦 理觀六 京繪 山水  
 京都都錦町少谷寺前町三 稻垣 晴雲六 南宗 人物  
 京都都錦町之段尾沙門町 岡本 春堂三 春華 山水  
 京都都錦町通油小路西 竹内 四郎三 京繪 山水  
 京都都上京區小松原北町濱 孤嘯：櫻谷 凡

107

京都衣笠天神町一ノ上野 旭峰二 京繪 風花  
 京都下鴨松之本井上方新田 孝治三 京繪 花鳥  
 大坂府豐能郡池田町 狩野 千彩三 千種 人物  
 名古屋中區仲ノ町 平田 翠谷三 翠峰 花鳥  
 京都佛具屋町松原上 大津 晴雲三 翠峰 山水  
 大坂府小坂町永利三 墨田 季月：恒富 人物  
 大坂府外大船船橋小舟渡邊代子 恒富 人物  
 大坂南區豐町三三 大谷 更光元 大東 風景  
 京都市衣笠町水方 安田 茂：櫻谷 花鳥  
 京都下鴨芝木町一井上 流光：新瀨 花鳥  
 京都淨土寺馬場町二池井 龍三：櫻谷 凡  
 大坂市南區鹽町一ノ平野 光國元 櫻谷 風景  
 名古屋東區田代町新井 正三：京繪 凡  
 京都市外山端 城山 光三：契月 花鳥  
 京都葎屋町下立賣井不入田 性三三：京繪 花鳥

109

大坂南區東清水町三 岡本 更生元 慶徳 凡  
 大坂市外池田町岸家内高橋 竹堂三 竹園 山水  
 京都衣笠小松原木島内福地 太歌三 櫻谷 花鳥  
 京都淨土寺馬場町三 泰川 南三 關 風景  
 京都上京區東三須賀町高須 白雲三 竹園 山水  
 京都市外深草町平木下 青隆三 翠峰 風景  
 京都南區寺田島島力稻垣 珠三 京繪 凡  
 京都高辻通御馬場内入保野千代子三 橋屋 花鳥  
 京都市外花園村宇多野 岡本 萬三：京繪 風景  
 京都祇園町東河合力濱田 石民八 京繪 風景  
 京都水町一淨心寺内 沖田 深水三 京繪 山水  
 大坂西區成區原通 宇田 大虛三 京繪 山水  
 名古屋市區藤原町 大竹 敬康三 翠峰 花鳥  
 京都都錦町少谷寺前町 中地三 契月 風景  
 京都府修學院村一乘寺本池 誠強三 光輝 風人

110

京都上京區衣笠 南道町平川 見生三 契月 花鳥  
 京都岡崎入江町佐藤方佐伯 泰三三 櫻谷 花鳥  
 神戸市山下町二ノ瓦 古川 素山三 五雲 山水  
 京都市外大宮村神光院三 明三 慶徳 風景  
 京都都錦町寺前町山本方島谷 自然元 櫻谷 風景  
 京都市外山崎町 香川 龍三：翠峰 山水  
 大坂市北區佐藤町 東條 隆光元 寫生 山人  
 京都市外船場町并頭 加納三 太郎三 京繪 風花  
 京都二條河原町西入 大橋 虛風三 契月 風景  
 京都相國寺山内林光院松井 大浩：京繪 風景  
 京都岡崎町南御所町 毛利 秋泉：春華 花鳥  
 大坂府北河内郡教野村福岡 青嵐三 東美 風人  
 大坂阿部野二ノ三五 久保田香芸三 春華 山水  
 大坂豐能郡櫻井谷村 船井 秋浦三 櫻谷 山水  
 三重縣桑名町寺町 藤田 七九：翠峰 山水

111

京都衣笠通二條上 鏡之江理家元 光輝 風三  
 奈良縣生駒郡都路村 立野 雲元 關 山水  
 京都談話町六條上 村田 一往三 玉堂 山水  
 京都姉小路蜜町東入 鈴木 大華六 五雲 花鳥  
 大坂此花區玉川町 藤田 青藤六 春華 山水  
 京都山科町御殿所三 小村 杏園三 翠峰 花鳥  
 京都下鴨芝木町三三 小村 華任六 櫻谷 花鳥  
 神戸市山下町二ノ北 前田 典三：京繪 山水  
 京都市外小坂村小坂 河川 中門三 櫻谷 山水  
 大坂市外中區院光寺高井 孫三 櫻谷 山水  
 滋賀縣東淺井郡田根村北 關三 櫻谷 山水  
 京都葛野郡梅津村 橋本 順三：京繪 風景  
 京都小川一條下 佐々木 高三：京繪 花鳥  
 大坂市港區市場通ノ八若田 九峰三 櫻谷 山水  
 京都久世郡淡町海上八山田 泰三：印象 花鳥

112

京都下鴨宮崎町三四 川原 相三：翠峰 人物  
 大坂北區濱崎町二七 中尾 玉葉三 櫻谷 花鳥  
 京都岡崎顯慶寺町二 栗田 桂三：竹園 山水  
 大坂住吉區天王寺町 平野 長三：櫻谷 風人  
 京都御池通東河院東入山岸 政三：星 風景  
 大坂府守口町九ノ一八 直原 加三：櫻谷 風景  
 大坂住吉區南田邊町 太田 加三：櫻谷 風景  
 京都都四洞院上長者寺 司馬 三：櫻谷 風景  
 京都鳥丸三條下 寺里 木三：櫻谷 風景  
 京都花園町妙心寺 寺里 木三：櫻谷 風景  
 靜岡縣二俣町 秋野 六：櫻谷 風景  
 京都紫野今宮町一六 江馬 進三：櫻谷 風景  
 京都葎屋町九次町南入松山 政三：櫻谷 風景  
 京都等持院東町土力青木 秀信三 慶徳 花鳥



一一三

市外大井町森前寺天	横山	松雲	山
本郷區道分町五八	田中	青山	東美人物
丸魚市拾町六八	尾崎	秀南	廣業人物
市外四久保四〇五	山口	錦洲	多門山水
四谷區永住町一	山内	神秀	七人山人
市外田端西森通言	淨法寺	高陽	九人山人
市外葛城町一三五	高田	鶴仙	七人山人
市外野下方活發寺	若井	道義	七人山人
市外東中野一〇一六	白石	春邦	七人山人
横濱鶴見橋前津崎方	白石	邦彦	七人山人
瀧野川町中里四六四	相川	松瑞	完人山人
小石川區若谷町云	塚原	靈山	七人山人
市外杉並町高圓寺西	加藤	紫雲	三多門人物
市外堀之内和田一六	園	巖舟	七人山人
市外上目黒駒場西	山本	文英	八人山人

一一三

市外杉並町高圓寺三	阿田川	眞水	六人山人
市外世田谷三番三	公文	若福	六人山人
龜戸區土手三番町	森脇	雲淡	六人山人
本郷區駒込神町町五	今井	爽邦	六人山人
市外田端町六一二	加藤	君原	四人山人
市外玉川等々方元	高木	錦湖	四人山人
市外西五軒町五二	戸田	玉雪	四人山人
赤坂青山北町六二	雙重	雪貞	五人山人
市外駒込町中道三	石川	丹藤	五人山人
日暮里渡邊町中通	歌川	若菜	五人山人
神奈川縣鎌倉長谷	中島	華篔	五人山人
下谷區上根井八二	岡田	光村	五人山人
淺草區原町一ノ	本田	天城	五人山人
小石川區指ヶ谷町	玉瀧	玉翠	五人山人
市外松澤村北上澤中	高橋	玉瀧	五人山人
市外杉並町天沼	長安	雅山	五人山人

【院展西方系】

京都兼光町御池南入	池田	桂仙	六人山人
京都東三本木丸太町	玉舍	春圃	五人山人
京都下長者町新町	上田	萬秋	六人山人
京都市堀河町四西井	敬岳	春華	五人山人
京都市鳥丸通出水上	廣田	百豐	六人山人
大坂天王寺松ヶ島	岡田	雪窓	九人山人
京都岡崎町冷泉通	高倉	觀康	八人山人
京都高倉通二條上	林	文城	八人山人
京都下鴨上河原二八	猪飼	嘯谷	八人山人
京都花園宇多野藤ノ木	渡邊	公觀	八人山人
京都市高臺寺同徳院	人見	少華	八人山人
京都下鴨宮崎町巴	有井	詳雲	八人山人

一一三

一一四

大坂市外香里遊園	近藤	權仙	六人山人
京都衣通二條上	岡本	芳水	五人山人
兵庫縣賣賣町月島	高橋	秋華	五人山人
大坂天王寺常盤通	中川	和堂	五人山人
大坂府下油田町	櫻野	南陽	五人山人
大坂南船場町清水町	島	御風	五人山人
京都東竹屋町野道東佐野	一星	新瀨	五人山人
東京市外中野上原三	小林	櫻村	五人山人
京都梨木通今出川下	岡	文清	五人山人
愛知縣枇杷島町一	石川	有鄰	五人山人
名古屋市上長者町二	長峰	大造	五人山人
京都下鴨宮河町五〇	岩田	秀耕	五人山人
京都府洛西磯崎以岡	青山	孝好	五人山人
京都北白川町	櫻	文峰	五人山人
京都日暮通下立賣上	中津川	涼風	五人山人

一一五

大阪谷町八ノ六	須佐	天齋	五人山人
大阪南區宮町八一	栗野	觀風	五人山人
京都府伊都丸九條村	木田	萬翠	五人山人
京都西川通丸太町北	澤	白鷗	五人山人
京都市外山科町大宅	三宅	皆山	五人山人
兵庫縣武庫郡瀨屋	岡田	泰祥	五人山人
金澤市仙入町一ノ五	紺谷	光俊	五人山人
兵庫縣武庫郡西ノ宮町久	千種	掃雲	五人山人
京都下鴨東林泉川町	合田	一條	五人山人
京都東區十二軒町三	竹村	秋峰	五人山人
岐阜市加納町四	清水	古關	五人山人
京都市安樂御池東入	今井	松窓	五人山人
神戶市宮川町六ノ四	星野	更國	五人山人
京都市田中町徳ノ口	松井	香瑛	五人山人

一一六

京都市同崎天王町	村瀨	秋月	五人山人
京都市西洞院一條上	伊藤	翠川	五人山人
大阪南區東清水町	岡本	大更	五人山人
京都魚沼通西洞院四	小西	長廣	五人山人
大坂東區寺山町四之	久保	井翠	五人山人
京都西洞院小路北	小林	雨郊	五人山人
大坂府守口町	松浦	錦雲	五人山人
京都河原町三條上	山本	天章	五人山人
別府市富士見通丁日	勝賀	瀨瀨	五人山人
京都神樂町八	八百谷	其雲	五人山人
京都高倉通佛光寺	山中	芳谷	五人山人
京都新島丸通下切通	下川島	梅丘	五人山人
京都三條大橋東北村方	平井	寒泉	五人山人
京都市東區町川越竹入	小田	碧洋	五人山人

一一七

京都聖護院山王町	牧	岐堂	五人山人
京都市外田中村	井上	素塔	五人山人
京都繩手通新門前	吉川	觀方	五人山人
京都清水寺土地會社	西堀	刀水	五人山人
京都錦樂師通富小路東大橋	三原	三原	五人山人
三重縣二見町	中村	左洲	五人山人
京都御池通油小路四	吉田	碩堂	五人山人
京都今出川京光明寺	笠原	清見	五人山人
京都三條通東山線四	宮田	玉清	五人山人
京都大宮通中立賣下	橋本	青橋	五人山人
京都鳥丸今出川上	中井	汲泉	五人山人
大坂東平野町二ノ五	松本	華洋	五人山人
京都土手通正雨下瀧	松浦	松浦	五人山人
京都栗田口町三條	永田	葵堂	五人山人
京都市鳥丸通三條上	高谷	仙外	五人山人

一一八

支那廣東美術學校內	鮑	少游	五人山人
新潟北蒲原郡五十公野	四方	春雲	五人山人
大坂天王寺細工谷	近藤	翠石	五人山人
大坂市東區七軒町	西川	桃嶺	五人山人
京都二條廣道東	峰内	是光	五人山人
京都御寺町通竹屋町	有山	白崖	五人山人
京都出水町通丸九四	岡	藤園	五人山人
京都熊野通高辻下	亭島	南洋	五人山人
大坂市北區寶砂町	坂田	耕雲	五人山人
北宮西區宮門町西三條	藤原	聚雲	五人山人
京都上京區御幸通	神原	桂山	五人山人
伏見市東區屋町三	梅景	香雪	五人山人
大坂市東區堂島裏一	山口	瑞光	五人山人
名古屋市東區殿河町	山口	瑞雨	五人山人
京都岡崎北御所町	山鹿	晴華	五人山人







昭和七年三月三十一日印刷  
昭和七年四月一日發行

不  
許  
製

編輯者 東京市本郷區根津宮本町二九 吉岡 誓  
發行人 東京市本郷區根津宮本町二九 吉岡 誓  
印刷者 東京市本郷區根津宮本町二九 小林 正雄  
印刷所 東京市本郷區根津宮本町二九 本社印刷所  
發行所 東京市本郷區根津宮本町二九 最美術社  
〔定價金壹圓〕  
發售東京一六八六一番

※物語作家も含めた一覽。作家の情報を概観し、また他の作家と単純比較するには重宝である。またいわゆる画家以外の儒者など「書」をなした作家の情報も含まれている点が興味深い。本報告書では紙幅の都合上、いわゆる画家の部位のみ抜粋した。

● 専門畫家

人名	別號	流派	長所	卒年	年代	價格
百濟	河成	安藝介	人物	仁壽三	1078	1,000
巨勢	金剛	巨勢佛畫	寬平頃	1100	1,000	
巨勢	相見	相見	同	同	同	
宅摩	爲氏	宅摩	同	同	同	
巨勢	公忠	采女	巨勢	同	同	
巨勢	弘高	廣濟	同	同	同	
宅摩	爲成	左近將	宅摩	同	同	
巨勢	是重	左近將	巨勢	同	同	
春日	其光	盛光	土佐人物	同	同	
春日	隆能	主殿頭	同	同	同	
宇摩	爲遠	豐前守	宅摩佛畫	同	同	
鳥羽	僧正	覺	土佐	觀畫	公保	延元
巨勢	宗義	山右衛門	巨勢佛畫	同	同	
春日	隆親	中務少	土佐人物	同	同	
僧	珍海	良	浪土佐人物	光永	萬元	

宅摩	榮賀	宅摩佛畫	正和頃	601	200		
巨勢	有家	巨勢佛畫	元享頃	601	200		
可	翁	然	北宗佛人	貞和元	586	1,000	
土佐	行光	綾前守	土佐人物	同	同		
土佐	如	抽如	雪	北宗山水	應安頃	541	1,000
粟田口	隆光	法眼	土佐佛花	同	同		
玉	曉	子	知足	野骨	山南	同	
周	文	越	淡	北宗山水	同		
粟田口	經	光法	眼	土佐佛花	同		
兆	殿	司	明	兆	同		
一	之	紅	段	主	同		
土佐	行秀	大	藏	大	土佐人物		



人名	別號	流派	長所	享年	年代	價格
廣瀨	泰山	清風	南宗山水	文化十	113	100
鳥居	清長	新助	浮世人物	同	同	100
歌川	豐春	一龍齋	同	同	同	117
佐久間	草履	同	同	同	同	同
板谷	廣長	桂	意住吉人花	同	同	同
濱田	杏堂	世	意南宗山水	同	同	同
王	澹正	遠信	倡山人	同	同	同
歌川	豐廣	一柳齋	浮世人物	同	同	同
歌川	融川	寬	信野山人	天	同	115
木下	應受	君	黃圓山	花	同	同
泉	守一	齋	浮世武者	同	同	同
石田	友汀	叔	明野凡	同	同	同
北尾	政演	京	傳浮世人物	同	同	115
鈴木	芙蓉	文	無文	山水	同	同
鈴木	探泉	守	之	野山人	同	同
吉村	蘭洲	榮	德圓山人	花	同	同
鈴木	綱潭	規	民光	殊島	同	同
高	嵩溪	烟	觀合	一	人	同
金子	金陵	允	非	文	同	115
竹内	春山	白	風	同	同	同
葛飾	北信	登	浮世	同	同	同
牧	墨	北	汀	同	同	同
倉石	米山	甚	助	同	同	同
倉石	直賢	子	齋	同	同	同
白井	圓	池	齋	同	同	同
林	金谷	盛	齋	同	同	同
橫井	金	谷	齋	同	同	同
大國	士	豐	齋	同	同	同
松浦	舜	齋	齋	同	同	同
山口	文	一	齋	同	同	同
山口	素	絢	伯	同	同	同
村瀨	村瀨	亭	小	齋	同	同
岡田	岡田	米	人	子	同	同
清水	清	水	曲	河	同	同
柴田	義	董	琴	清	同	同
土佐	光	時	南	同	同	同
勝川	春	英	九	齋	同	同

人名	別號	流派	長所	享年	年代	價格
鈴木	春	笑	與	信	野山人	同
鈴木	鳴	門	洪	齋	文	同
北尾	重	政	紅	齋	浮世	同
島田	元	直	豐	齋	同	同
增山	雲	齋	石	齋	同	同
窪	春	滿	齋	同	同	同
浦上	王	堂	齋	同	同	同
狩野	藤	石	齋	同	同	同
狩野	洞	白	齋	同	同	同
森	狙	仙	齋	同	同	同
栗田	洞	口	齋	同	同	同
合川	理	和	齋	同	同	同
渡邊	支	對	齋	同	同	同
永田	田	善	齋	同	同	同
八田	古	秀	齋	同	同	同
田中	古	齋	同	同	同	同
連水	春	齋	同	同	同	同
森	周	峰	齋	同	同	同
片桐	桐	齋	同	同	同	同
敏形	蕪	齋	同	同	同	同
勝山	秀	齋	同	同	同	同
遠藤	廣	齋	同	同	同	同
歌川	豐	齋	同	同	同	同
紀	竹	齋	同	同	同	同
狩野	波	齋	同	同	同	同
藤崎	素	齋	同	同	同	同
荒井	千	齋	同	同	同	同
狩野	良	齋	同	同	同	同
安田	田	齋	同	同	同	同
勝川	春	齋	同	同	同	同
酒井	抱	齋	同	同	同	同
野呂	介	齋	同	同	同	同
住吉	夜	齋	同	同	同	同
矢野	伊	齋	同	同	同	同
狩野	洞	齋	同	同	同	同
歌川	豐	齋	同	同	同	同

人名	別號	流派	長所	享年	年代	價格
細田	榮	之	齋	同	同	同
圓山	應	齋	同	同	同	同
山崎	鶴	齋	同	同	同	同
中村	芳	齋	同	同	同	同
西村	梅	齋	同	同	同	同
福地	白	齋	同	同	同	同
山崎	牧	齋	同	同	同	同
櫻井	秋	齋	同	同	同	同
江崎	寬	齋	同	同	同	同
山口	東	齋	同	同	同	同
山口	龍	齋	同	同	同	同
松川	綾	齋	同	同	同	同
赤松	鶴	齋	同	同	同	同
渡邊	衛	齋	同	同	同	同
廣瀨	藤	齋	同	同	同	同
新井	養	齋	同	同	同	同
橋本	養	齋	同	同	同	同
伊豆原	源	齋	同	同	同	同
並河	春	齋	同	同	同	同
勝川	國	齋	同	同	同	同
歌川	五	齋	同	同	同	同
三谷	珠	齋	同	同	同	同
士岐	瑞	齋	同	同	同	同
土岐	瑞	齋	同	同	同	同
瀨上	橋	齋	同	同	同	同
谷	橋	齋	同	同	同	同
下河邊	雪	齋	同	同	同	同
前川	雪	齋	同	同	同	同
中江	竹	齋	同	同	同	同
森川	嵩	齋	同	同	同	同
觀	嵩	齋	同	同	同	同
上田	耕	齋	同	同	同	同
二代	歌	齋	同	同	同	同
板谷	廣	齋	同	同	同	同
狩野	友	齋	同	同	同	同
狩野	探	齋	同	同	同	同
柳川	重	齋	同	同	同	同
張	月	齋	同	同	同	同

人名	別號	流派	長所	享年	年代	價格
谷	舜	齋	同	同	同	同
渡邊	赤	齋	同	同	同	同
青木	木	齋	同	同	同	同
大石	真	齋	同	同	同	同
高橋	草	齋	同	同	同	同
西村	熊	齋	同	同	同	同
三村	楠	齋	同	同	同	同
田能村	養	齋	同	同	同	同
龜岡	規	齋	同	同	同	同
狩野	探	齋	同	同	同	同
歌川	友	齋	同	同	同	同
市川	德	齋	同	同	同	同
原	在	齋	同	同	同	同
吉村	孝	齋	同	同	同	同
八木	巽	齋	同	同	同	同
板谷	廣	齋	同	同	同	同
山崎	雲	齋	同	同	同	同
山崎	董	齋	同	同	同	同
渡邊	如	齋	同	同	同	同
廣瀨	應	齋	同	同	同	同
圓山	應	齋	同	同	同	同
岸	應	齋	同	同	同	同
東木	南	齋	同	同	同	同
月岡	雪	齋	同	同	同	同
僧	月	齋	同	同	同	同
山崎	廣	齋	同	同	同	同
甲賀	文	齋	同	同	同	同
坂本	雪	齋	同	同	同	同
白井	華	齋	同	同	同	同
狩野	邦	齋	同	同	同	同
島田	元	齋	同	同	同	同
立原	杏	齋	同	同	同	同
酒井	文	齋	同	同	同	同

二五

人名	別號	流溪長所享	歿年	年代價格
渡邊	翠山	南宗山人	天保三	〇
森	傲山	南宗山人	天保三	〇
村上	松堂	山學	天保三	〇
狩野	洞益	信野山人	天保三	〇
松村	景文	德野山人	天保三	〇
鶴澤	探春	德野山人	天保三	〇
細川	林谷	南宗山人	天保三	〇
依田	竹谷	文見	天保三	〇
關	牛德	風世	天保三	〇
狩野	梅俊	信野山人	天保三	〇
英	一珠	重一	天保三	〇
長谷川	雪且	一陽	天保三	〇
高久	露屋	殊林	天保三	〇
菊池	梅翁	同	天保三	〇
田中	馬溪	四條	天保三	〇
廣瀬	柏園	岳	天保三	〇
森	鳳洲	充	天保三	〇
佐々木	鳳仙	純	天保三	〇

二六

東	別所	山崎	依田	遠坂	八島	川邊	河村	吉田	古市	山口	大西	小池	渡邊	荒木	世繼	三島	勝野
東寅木	東溪雲	董泉	竹村	仲雅	岳亭	華陰	文鳳	優武	金球	正隣	圭齋	曲江	松濤	如元	寂窓	上龍	苑古
星東洋山人	山四條花鳥	南嶺花鳥	庵文見山花	春泰	信浮世人物	推演山人	岸山人	岸山人	藤四條	同	同	同	同	同	同	同	同
天保三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

人名	別號	流溪長所享	歿年	年代價格
蒲生	羅漢	豹文	天保三	〇
天龍	道人	王	天保三	〇
岡	珉山	南嶺	天保三	〇
小田	南豐	同	天保三	〇
小栗	白圭	同	天保三	〇
岡村	鳳水	同	天保三	〇
菅井	梅關	同	天保三	〇
原	在明	同	天保三	〇
岡本	茂彦	同	天保三	〇
五十嵐	竹沙	同	天保三	〇
鈴木	南嶺	同	天保三	〇
有阪	北馬	同	天保三	〇
英	一珠	同	天保三	〇
岡本	豐彦	同	天保三	〇
渡邊	廣	同	天保三	〇
田中	日華	同	天保三	〇
林	文波	同	天保三	〇
浦上	春季	同	天保三	〇
岡田	半江	同	天保三	〇
狩野	晴川	同	天保三	〇

二七

二八

黒田	村田	石崎	小田	狩野	古藤	風	長澤	相澤	海北	木下	清水	牧田	大岡	池田	岸	長山	岡田	葛飾	今大路
稻草文	田俊	融思	清川	了承	養山	外	蘆洲	石湖	友德	應夏	水石	雲峰	雲峰	英泉	慶泰	孔寅	閑林	北齋	秀南
祥南嶺	恒東洋山人	齊南宗	同	同	同	高僧	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
天保三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

二九

人名	別號	流溪長所享	歿年	年代價格
土佐	光祿	左近將士	嘉永二	〇
野際	石湖	南宗山人	天保三	〇
大倉	笠山	南宗山人	天保三	〇
雲	華大	合僧	天保三	〇
谷	文二	南宗山人	天保三	〇
魚屋	北溪	南宗山人	天保三	〇
宋	榮園	南宗山人	天保三	〇
橋	華谷	南宗山人	天保三	〇
大西	椿年	南宗山人	天保三	〇
櫻間	青崖	南宗山人	天保三	〇
狩野	潤白	信野山人	天保三	〇
岸	望月	南宗山人	天保三	〇
望月	望月	南宗山人	天保三	〇
遠坂	文雅	南宗山人	天保三	〇
土佐	光孚	南宗山人	天保三	〇
菊田	伊洲	南宗山人	天保三	〇

三〇

河村	十市	中林	狩野	館	福田	上田	山本	岡本	山本	鶴澤	山口	東島	矢島	歌川	青根	小泉	江川	沖
玲鳳	石谷	竹洞	探淵	霞野	太華	公長	梅齋	俊齋	羽民	探龍	素岳	群芳	國直	國直	檀山	坦庵	一峯	
南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人
天保三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

石垣	山本	平井	喜多	佐々木	百々	野村	金子	大原	金井	山名	松野	三村	鈴木	歌川	立原	高久	浮田	岸
抱眞	梅逸	顯齋	武清	玉淵	廣安	雪窓	存舟	島洲	廣政	梅山	晴山	一笑	共一	廣重	春沙	隆古	一憲	連山
南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人
天保三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

三一

三二

鐵田	板谷	石田	熊坂	白川	市川	池邊	荒木	萩原	駒井	三浦	歌川	江馬	細香	關	河窪	小田	岡本	森村
廣松	廣延	悠汀	適山	芝山	東嶽	蓮翁	寬快	遙翁	孝禮	梧門	國芳	國芳	國芳	金城	海濱	秋暉	秋暉	抱眞
南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人	南宗山人
天保三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
永村	潤山	南宗	山花	豐文	久二	〇	〇
土佐	光清	土佐	人物	天		〇	〇
遠藤	廣實	古	我佳	吉	人物	〇	〇
勝山	孫文	仲	北宗	山人	花	〇	〇
吉村	孝文	行	南宗	山人	花	〇	〇
住吉	弘實	弘	定佳	吉	人物	〇	〇
八幡	貫稱	定	同	同	同	〇	〇
貫名	海屋	孫	南宗	山水	公	〇	〇
藤本	鐵石	鐵	士	同	同	〇	〇
逸見	一信	狩	野	山人	哭	〇	〇
岡田	爲恭	三	郎	士	佐	人物	〇
喜多	武一	郎	文	山	花	〇	〇
川口	月嶺	直	七	同	同	〇	〇
根本	愚洲	成	文	四	修	花	〇
橫山	清暉	成	文	四	修	花	〇
橫山	華溪	嵐	山	浮	世	人物	〇
三代	豐國	貞	浮	世	人物	〇	〇
福田	牛香	信	南	宗	山水	公	〇

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
森	高雅	玉	德	土	佐	人物	〇
沼田	月齋	舟	浮	世	同	同	〇
岡島	林齋	半	仙	狩	野	凡	〇
岸	月	世	同	同	同	〇	
谷口	大雅	堂	亮	來	音	南	宗
田中	介	介	節	同	同	〇	
岩崎	鷗	雨	同	同	〇	〇	
長谷川	風	淡	張	同	同	〇	
根本	幽	同	同	同	〇	〇	
木下	逸	同	同	同	〇	〇	
松本	交	山	同	同	〇	〇	
狩野	探	原	守	同	同	〇	
春木	南	華	同	同	〇	〇	
池田	孤	村	三	同	同	〇	
吉田	柚	同	同	同	〇	〇	
西山	芳	園	子	同	同	〇	
草場	佩	川	同	同	〇	〇	
岸	誠	丹	波	同	同	〇	
中林	竹	成	業	南	宗	山水	公

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
菊川	茨山	重	九	浮	世	人物	〇
蒲生	竹	山	同	同	〇	〇	
狩野	永	岳	山	同	同	〇	
中村	陸	舟	同	同	〇	〇	
魚住	荆	石	同	同	〇	〇	
千原	夕	田	同	同	〇	〇	
村山	牛	牧	同	同	〇	〇	
高橋	香	村	同	同	〇	〇	
島居	清	峰	同	同	〇	〇	
海北	友	樞	同	同	〇	〇	
勝山	孫	文	仲	同	同	〇	
日根	對	山	同	同	〇	〇	
大雅	堂	亮	同	同	〇	〇	
石川	晃	山	同	同	〇	〇	
林	南	雅	有	同	同	〇	
倉石	乾	山	同	同	〇	〇	
梅川	東	樂	東	居	同	〇	
齋藤	香	玉	齋	南	宗	山水	公
河北	泰	谷	房	實	同	〇	
和田	吳	山	同	同	〇	〇	

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
松村	玉	文	光	同	同	〇	
鈴木	雲	湖	我	古	文	山	
森	一	風	教	之	同	同	
狩野	董	川	中	信	同	同	
玉手	雲	洲	同	同	〇	〇	
中島	來	章	同	同	〇	〇	
原	在	照	子	同	同	〇	
長澤	蘆	風	同	同	〇	〇	
日高	鐵	斧	同	同	〇	〇	
山本	柳	塘	同	同	〇	〇	
圓山	應	章	同	同	〇	〇	
森	義	章	同	同	〇	〇	
吉田	大	風	文	同	同	〇	
竹村	日	東	林	同	同	〇	
菱田	日	東	林	同	同	〇	
細川	林	齋	同	同	〇	〇	
大西	椿	平	同	同	〇	〇	
佐竹	永	海	同	同	〇	〇	

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
曾根	精	莊	同	同	〇	〇	
吉村	孝	一	萬	同	同	〇	
齋藤	拳	石	同	同	〇	〇	
歌川	國	一	同	同	〇	〇	
圓山	立	士	同	同	〇	〇	
吉田	公	均	同	同	〇	〇	
土佐	光	左	同	同	〇	〇	
張	白	胸	同	同	〇	〇	
張	晉	齋	同	同	〇	〇	
八木	奇	峰	同	同	〇	〇	
前川	五	嶺	同	同	〇	〇	
谷	文	中	同	同	〇	〇	
沖	冠	岳	同	同	〇	〇	
石垣	東	山	同	同	〇	〇	
鐘木	雲	潭	同	同	〇	〇	
岸	天	岳	同	同	〇	〇	

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
春木	南	漢	同	同	〇	〇	
岡島	清	齋	同	同	〇	〇	
村瀨	雙	石	同	同	〇	〇	
十時	梅	谷	同	同	〇	〇	
鹽川	文	麟	同	同	〇	〇	
中島	華	陽	同	同	〇	〇	
陶山	勝	寂	同	同	〇	〇	
木村	雪	蕉	同	同	〇	〇	
小池	池	旭	同	同	〇	〇	
前田	鶴	堂	同	同	〇	〇	
三宅	英	齋	同	同	〇	〇	
木田	華	堂	同	同	〇	〇	
土佐	光	文	同	同	〇	〇	
梁川	紅	蘭	同	同	〇	〇	
尾口	雲	錦	同	同	〇	〇	
長谷川	玉	峰	同	同	〇	〇	
木下	蘆	洲	同	同	〇	〇	
板倉	樓	堂	同	同	〇	〇	

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
狩野	目	實	同	同	〇	〇	
淺野	梅	堂	同	同	〇	〇	
富取	富	取	同	同	〇	〇	
葛飾	爲	齋	同	同	〇	〇	
歌川	國	一	同	同	〇	〇	
土井	野	牙	同	同	〇	〇	
吉阪	鷹	峰	同	同	〇	〇	
川岡	墨	德	同	同	〇	〇	
山上	冬	屋	同	同	〇	〇	
雨森	敬	亭	同	同	〇	〇	
天	華	微	同	同	〇	〇	
大赤	墨	隱	同	同	〇	〇	
村瀨	太	乙	同	同	〇	〇	
長谷川	誠	一	同	同	〇	〇	
鈴木	梁	淡	同	同	〇	〇	
長野	清	瀨	同	同	〇	〇	

人名	別號	流派	長所	享年	段年	年代	價格
板谷	廣	春	同	同	〇	〇	
岡本	亮	齋	同	同	〇	〇	
岸	禮	雲	同	同	〇	〇	
住吉	在	觀	同	同	〇	〇	
齋藤	崎	庵	同	同	〇	〇	
安田	老	山	同	同	〇	〇	
野間	一	道	同	同	〇	〇	
中西	耕	石	同	同	〇	〇	
吉川	君	淡	同	同	〇	〇	
橫山	文	六	同	同	〇	〇	
狩野	三	圭	同	同	〇	〇	
帆足	杏	雨	同	同	〇	〇	
池原	日	南	同	同	〇	〇	
田中	抱	二	同	同	〇	〇	
岩瀨	牛	步	同	同	〇	〇	
三井	高	福	同	同	〇	〇	
佐藤	玄	覺	同	同	〇	〇	
山中	靜	逸	同	同	〇	〇	
澤渡	精	齋	同	同	〇	〇	

四一

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
藤田	吳江	南宗	凡	吳明治	六	三	100
井上	竹逸	令	德南	宗山	花	志	同
藤堂	凌雲	良	同	山水	大	同	同
池田	雲樞	平	信	同	同	同	同
羽倉	可亭	良	信	四	山	花	同
國井	應文	仲	實	同	山	花	同
松岡	環翠	正	同	南	宗	同	同
渡邊	小華	謙	南	宗	花	鳥	同
草場	結山	廉	南	宗	竹	同	同
山本	竹雲	中	立	南	宗	山	同
早瀨	宣仙	宜	孝	南	宗	花	同
加藤	眞管	時	喬	土	佐	人	同
淡島	椿岳	吉	梵	狂	畫	人	同
安田	米齋	橫	南	宗	凡	同	同
福島	柳園	翠	南	宗	山	水	同
河鍋	曉齋	潤	都	狩	野	凡	同

四二

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
藤堂	高潔	二	淵	文	山	水	同
鈴木	守一	元	重	光	琳	人	同
吉澤	雲庵	小	龜	化	文	山	同
木村	立嶽	龍	經	狩	野	山	同
松本	芳延	澤	浮	世	人	物	同
山本	桃谷	伸	鐵	狩	野	山	同
小林	水瀨	雅	齊	狩	野	山	同
倉治	春江	常	女	同	山	花	同
鈴木	瑞彦	文	昇	四	條	山	同
平福	德庵	文	池	四	條	山	同
根山	九江	堤	泉	南	宗	山	同
早瀨	永山	瀨	四	條	山	花	同
鈴木	永應	立	信	狩	野	山	同
鈴木	百年	世	壽	狩	野	山	同
柴田	是真	對	居	四	條	山	同
佐多	椿齋	龍	潤	狩	野	山	同
狩野	照信	勝	王	狩	野	山	同
守住	貫魚	輝	義	在	吉	人	同
月岡	芳平	大	森	浮	世	人	同

四三

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
中野	其明	晴	奇	光	琳	花	鳥
狩野	松川	貴	信	狩	野	凡	同
鳥居	清瀟	清	房	浮	世	人	同
五姓	田芳	柳	翁	狂	畫	人	同
川邊	白鶴	守	土	佐	人	花	同
狩野	探真	守	貴	狩	野	山	同
平野	五岳	吉	同	南	宗	山	同
西村	桃嶽	始	同	山	花	同	
山崎	董詮	始	同	南	宗	花	同
鈴木	萬年	世	欣	鈴	木	山	同
服部	波山	自	牧	南	宗	山	同
長尾	無墨	天	雁	南	宗	同	同
森	寬齋	公	肅	同	山	花	同
歌川	三廣	重	政	浮	世	人	同
藤井	松林	好	文	同	山	花	同
天野	方壺	俊	南	宗	山	水	同
清水	東陽	義	實	同	山	花	同
高林	芳谷	樞	女	南	宗	花	同
人見	洪堂	政	義	南	宗	花	同

四四

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
幸野	棋嶺	直	翠	四	條	山	同
杉谷	雲樞	雲	香	山	花	同	
中島	亭齋	元	久	壽	新	人	同
樋口	探月	守	保	狩	野	山	同
岸	竹堂	昌	綠	狩	野	山	同
西山	完瑛	謙	四	條	山	花	同
飯島	光峨	後	素	堂	四	條	山
狩野	藤川	壽	信	狩	野	山	同
野口	幽谷	和	榮	堂	南	宗	同
田崎	草雲	雲	南	宗	山	水	同
菅原	白龍	元	道	南	宗	山	同
加納	夏雄	公	同	山	花	同	
河田	小龍	崎	山	南	宗	山	同
谷口	葛山	貞	二	南	宗	山	同
衣笠	豪谷	齋	俟	南	宗	山	同
大倉	雨村	繼	農	南	宗	山	同
池田	琴峰	安	大	郎	四	條	山

四五

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
國分	文友	雙	松	四	條	山	同
河野	菱瀟	牛	湖	四	條	山	同
歌川	國和	一	陽	齊	世	人	同
瀧	和亭	蘭	同	南	宗	花	同
高橋	應真	翠	岳	四	條	山	同
守山	湘瀨	士	順	南	宗	山	同
原	丹橋	御	右	郎	南	宗	花
阪井	嘯月	浮	世	人	歌	同	
根本	雪峨	大	助	住	吉	人	同
大庭	學儂	鶴	南	宗	花	鳥	同
山田	文厚	雙	竹	四	條	山	同
川崎	千虎	額	屋	土	佐	人	同
森川	會文	英	同	四	條	山	同
田口	米作	機	川	浮	世	人	同
重	春塘	梧	更	南	宗	山	同
落合	芳樓	一	蕪	齋	浮	世	人
川邊	御稻	花	陵	土	佐	人	同

四六

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
村田	香谷	叔	南	宗	山	水	同
高橋	廣湖	天	鹿	齊	世	人	同
橋爪	友信	春	川	狩	野	山	同
西郷	孤月	規	新	瀨	山	水	同
中林	清淑	く	南	宗	花	鳥	同
織田	杏齋	啓	南	宗	花	鳥	同
木村	楊洲	啓	延	齊	世	風	同
兒玉	果亭	士	毅	南	宗	山	同
熊谷	直彦	齋	雅	四	條	山	同
川端	玉草	敬	幸	同	山	水	同
奥原	晴湖	重	吉	南	宗	山	同
望月	玉泉	重	岑	月	山	水	同
根本	樵谷	郁	二	郎	北	宗	山
酒井	道一	雨	華	庵	光	琳	花
竹川	友廣	道	四	條	山	水	同
山岡	米齋	仲	樹	南	宗	山	同
竹村	耕齋	千	佐	子	南	宗	山
望月	金鳳	小	猿	四	條	山	同

四七

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
田能村	小篁	南	宗	山	水	同	同
上田	耕沖	萬	次	郎	四	條	山
野村	文舉	石	泉	四	條	山	同
荒木	寬一	梅	隱	南	北	凡	同
永井	香圃	壽	六	南	宗	山	同
菱田	春草	秋	江	新	瀨	凡	同
久保田	桃水	四	條	山	水	同	同
綾岡	有真	一	四	條	山	水	同
板橋	貫隄	定	時	住	吉	人	同
片山	貫道	竹	屋	住	吉	人	同
小西	皆雲	巖	南	宗	山	水	同
長野	栗山	宗	區	南	宗	山	同
土佐	實武	土	佐	守	土	佐	人
前田	貫光	泰	通	合	住	吉	人
名草	逸峰	露	香	南	宗	山	同
石井	昭湖	重	賢	文	昆	山	同
森	春岳	素	道	岸	瀨	山	同
中島	杉陰	樞	發	南	宗	山	同
玉手	菊洲	二	郎	浮	世	人	同
英	一蜻	信	光	一	殊	人	同

四八

人名	別號	流派	長所	享年	歿年	年代	價格
村田	香谷	叔	南	宗	山	水	同
高橋	廣湖	天	鹿	齊	世	人	同
橋爪	友信	春	川	狩	野	山	同
西郷	孤月	規	新	瀨	山	水	同
中林	清淑	く	南	宗	花	鳥	同
織田	杏齋	啓	南	宗	花	鳥	同
木村	楊洲	啓	延	齊	世	風	同
兒玉	果亭	士	毅	南	宗	山	同
熊谷	直彦	齋	雅	四	條	山	同
川端	玉草	敬	幸	同	山	水	同
奥原	晴湖	重	吉	南	宗	山	同
望月	玉泉	重	岑	月	山	水	同
根本	樵谷	郁	二	郎	北	宗	山
酒井	道一	雨	華	庵	光	琳	花
竹川	友廣	道	四	條	山	水	同
山岡	米齋	仲	樹	南	宗	山	同
竹村	耕齋	千	佐	子	南	宗	山
望月	金鳳	小	猿	四	條	山	同

四九

人名	別號	流派	長所享年	没年	年代	價格				
吉嗣	拜山	獨宗	南宗山水	大正四	7	100				
山口	香崎	秀四	傑人	同	同	100				
荒木	寬敏	遠	南北花鳥	同	同	100				
小林	清親	生機	浮世人物	同	同	100				
渡邊	晴嵐	南宗	花山水	同	同	100				
今村	紫紅	三郎	容齋	凡	五	100				
益頭	峻南	尚志	南宗花鳥	同	同	100				
原	在泉	松	游在中	花	六	100				
梶田	牛古	錦太郎	容齋	凡	同	100				
村瀬	玉田	德	温	四條	山	花	同	100		
小坂	芝田	晴	南宗	山水	同	同	100			
池田	蕉園	守子	浮世	人物	同	同	100			
高森	碎巖	自知	南宗	山水	同	同	100			
野口	小嶺	親	南宗	山水	同	同	100			
前川	文嶺	子	耕	四條	山	花	同	100		
吉岡	華堂	修	圓	山	花	鳥	同	100		
鈴木	松年	百	傳	錦	山	花	鳥	同	100	
渡邊	省亭	希	知	子	容	齋	花	鳥	同	100

五〇

人名	別號	流派	長所享年	没年	年代	價格					
菊池	芳文	克	圓	四條	花	鳥	同	100			
羽田	子雲	亭	子	廣	業	人	物	同	100		
河崎	蘭香	菊	子	廣	業	人	物	同	100		
山田	寒山	洞	南宗	山水	同	同	100				
石川	鴻齋	英	南宗	山水	同	同	100				
寺崎	廣業	宗	山	花	鳥	同	100				
鈴木	華邨	守	廣	四條	花	鳥	同	100			
三宅	吳曉	守	廣	四條	花	鳥	同	100			
今村	興宗	保	廣	四條	花	鳥	同	100			
星形	月耕	華	藤	浮世	人物	同	同	100			
下條	桂谷	雲	北	宗	山	花	鳥	同	100		
荒木	小石	金	起	五	佛	花	同	100			
池田	錦織	晴	清	息	南	宗	山	花	鳥	同	100
山本	梅莊	輝	方	蕪	山	花	鳥	同	100		
河合	英忠	謙	宗	山	花	鳥	同	100			
高山	琴石	鐵	松	南	宗	山	花	鳥	同	100	
春陵	德	隆	南	宗	山	花	鳥	同	100		

五三

人名	別號	流派	長所享年	没年	年代	價格						
藤島	華櫻	米	傳	人物	同	同	100					
吉川	觀山	晴	三郎	雅	邦	凡	同	100				
下村	林齋	天	鳳	雅	邦	凡	同	100				
石井	雲洞	同	同	同	同	同	100					
小寺	華塘	同	同	同	同	同	100					
新堀	米舂	同	同	同	同	同	100					
田口	東嶺	同	同	同	同	同	100					
廣瀨	五老	安	之	直	入	山	花	鳥	同	100		
服部	華秋	同	同	同	同	同	100					
井口	渡邊	華	石	靜	雄	小	華	山	花	鳥	同	100
高島	北海	得	三	南	宗	山	花	鳥	同	100		
都路	探令	守	純	野	山	人	同	同	100			
小堀	稻香	鼓	乃	舍	土	佐	匠	人	同	100		
尾竹	越堂	同	同	同	同	同	同	100				

五四

人名	別號	師名	享年	没年	年代	價格
藤原	惺	北	山	人	同	100
菅原	得	處	玄	同	同	100
林	東	舟	信	同	同	100
堀	杏	鹿	正	同	同	100
那波	活	所	道	同	同	100
中江	藤	樹	原	同	同	100
三宅	寄	齋	亡	同	同	100
谷	時	中	素	同	同	100
小倉	尺	五	昌	同	同	100
松永	羅	山	道	同	同	100
中川	謙	叔	同	同	同	100
三宅	澹	庵	正	同	同	100
江村	讀	耕	齋	同	同	100
野中	雲	山	良	同	同	100

人名	別號	流派	長所享年	没年	年代	價格						
奥原	晴翠	南	宗	山	花	鳥	同	100				
小田	大	鶴	南	宗	山	花	鳥	同	100			
田近	竹	耶	一	樂	北	南	宗	山	花	鳥	同	100
栗原	玉	葉	文	子	廣	業	人	物	同	100		
佐竹	永	郎	信	文	鳳	山	花	鳥	同	100		
高橋	晃	山	盛	定	南	北	山	花	鳥	同	100	
在原	古	玩	重	壽	佳	吉	山	花	鳥	同	100	
松本	楓	湖	敬	忠	容	齋	凡	同	100			
宗	星	石	重	敬	南	宗	山	花	鳥	同	100	
關田	華	亭	淺	次	郎	南	宗	山	花	鳥	同	100
今尾	景	年	榮	齋	齋	錦	山	花	鳥	同	100	
山田	介	堂	雙	玉	南	宗	山	花	鳥	同	100	
富岡	鐵	齋	百	鎌	南	宗	山	花	鳥	同	100	
鈴木	松	樓	世	秋	鈴	木	山	花	鳥	同	100	
江上	瓊	山	景	遊	南	宗	山	花	鳥	同	100	
井村	常	山	貫	一	南	宗	山	花	鳥	同	100	
右田	年	英	梅	壽	世	人	物	同	100			
内海	吉	堂	復	文	麟	山	水	花	鳥	同	100	
勝谷	米	莊	京	繪	山	花	鳥	同	100			
山田	實	漫	畫	毛	同	同	同	100				

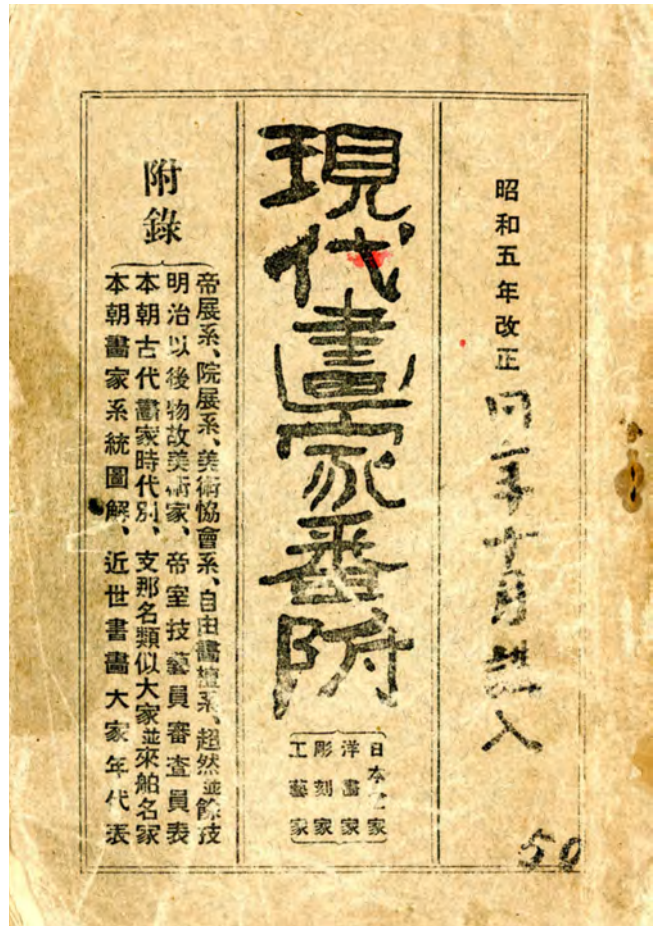
五一

五二

人名	別號	流派	長所享年	没年	年代	價格			
江村	專	齋	宗	具	宗	巴	同	100	
鶴岡	石	齋	信	之	活	所	究	同	100
人見	卜	向	軒	林	兼	山	同	100	
石川	丈	山	六	人	樞	高	空	同	100
三宅	堂	革	齋	道	乙	得	庵	同	100
林	鷲	峰	泰	齊	羅	山	同	100	
朱	舜	水	之	珍	山	同	100		
菊池	耕	齋	東	日	羅	山	同	100	
山崎	開	齋	敬	義	坐	山	同	100	
那波	木	庭	守	之	活	所	究	同	100
山鹿	素	行	子	敬	羅	山	同	100	
人見	鶴	山	宜	解	雲	峰	同	100	
熊澤	蒼	山	伯	繼	藤	樹	同	100	
北島	雪	山	三	立	書	家	同	100	
木下	順	庵	貞	幹	天	五	同	100	
德川	西	山	光	閉	朱	舜	同	100	
安東	省	庵	守	約	朱	舜	同	100	
中村	暢	齋	之	欽	益	軒	同	100	
伊藤	仁	齋	雅	植	丈	山	同	100	
大森	漸	齋	秀	祐	丈	山	同	100	

五六

※日本画、洋画を関東関西に分けて、番付のように構成した目録。単価のような数字は示されないものの、入選や審査員など細かい情報が示されている点が特徴。また、画家のみならず、彫刻家、工芸家に加えられている点も本史料の特徴である。それぞれ主だった作家（太字、大文字）であるところを中心に抜粋した。



### 序言

一、本表は新界の大家並に著名の鑑識家、批評家の精密なる詮衡を経たるものなり

一、詮衡の標準は人格、閱歴、技能、學識、社會的人氣等種々なる方面より觀察せしものなれば、青年作家と雖も特色顯著なる者は老大家の上位に昇り、絕對に情實に拘泥せず。

一、本表は現代の日本畫家、洋畫家、彫刻家並に工藝家の官展並に其團體展の成績及び地位を明示するを主眼とし、併せて美術史料として左の諸欄を抄録す。

「帝展系、院展系、美術協會系、自由畫壇系、超然並餘技」  
 「帝室技藝員、勳章受賞員表」  
 「明治以後物故美術家表」  
 「本朝古代畫家時代別表」  
 「支那古代畫家時代別表」  
 「本朝畫家系統圖解」  
 「三百年以降書畫大家年表」

日本畫家

### 美術俱樂部御利用下さる

當部迅速且丁寧責任を以て皆様の御用務をすみませ

本阿彌光遜先生	一口二付	金八圓	但し折紙は五拾
刀劍鑑定料	一口二付	金八圓	但し折紙は五拾
刀劍研料	一寸壹圓	金八圓	但し折紙は五拾
刀劍研料	一寸	金八圓	但し折紙は五拾
書畫鑑定料	一寸	金八圓	但し折紙は五拾

（多数の場合には鑑定料を相談可致候、御返品の際は返送料に料金を御添付願上候）  
 （鑑定は各専門に鑑識家の諮詢に附し決定候も鑑定料は美術俱樂部の名義を以て發行可致候）

書畫入札、書畫競賣、揮毫紹介  
 表装引受、美術圖書出版

現代畫家番附壹  
 刀劍番附五拾圓  
 書畫目錄一ヶ月一回

發行所美派俱樂部 通信出版部

東京麹町土手三番町十番地  
 電話九段四二五二番  
 振替東京三〇一〇〇番

(注 意)

記述を簡潔にするため特徴を用ひたるを左に解説す  
 (○)は抽任待遇の帝國美術院會員。(◎)は舊文展系帝展の審査委員。(◎)は帝國美術院展覧會委員。(◎)は帝國美術院賞。(◎)は推薦。(◎)は特選。(◎)は二等賞。(◎)は三等賞。(◎)は優待。(◎)は入選。(◎)は無鑑賞出品。(◎)は無出品(落選も含む)。(外)は海外滞留。(◎)は前任(後輩の頭部人名)は歸、出身學校(同輩等)は年齢。(◎)は遊學留學。學校名中(東)は東京美術學校。(東)は京都美術專門學校。(東)は京都美術工學校。(白馬)は白馬會。(太平洋)は太平洋美術會(水彩)は日本水彩畫會(關東)は關西美術院(明美)は明治美術會(日濤)は日本美術院(國)は國畫創作協會(南)は日本南畫院。(美協)は日本美術協會。(料)は二料會。(春)は春開會。

一、委員は文展十二回迄は文部省美術審査委員、帝展第四回迄は帝國美術院美術展覧會審査員、帝展五回以後は帝國美術院美術展覧會審査員、帝展五回以後は美術展覧會規定に依り二等賞を得たる者特選せられたる者、推薦せられたる者又は審査委員たりし者なり。

一、出品者の氏名又は筆號等の變更により重複の箇所あるやも知れず目下調査中。



<p>日本美術院同人 錦吉郎、宗費淵、五〇、茨城縣額數郡牛久科 任委委委出特入入入 (八一)</p> <p>東美、四四、東京府下世田谷區代田中原七三三 山口蓬春 任特賞特入入入入 〇任特賞特入入入入</p> <p>東美、映丘、三八、東京府下世田谷區代田中原七三三 御橋、東美、四一、東京府下世田谷區代田中原七三三 中村岳陵 推特特出特入入入入 〇推特特出特入入入入</p> <p>御橋、東美、四一、東京府下世田谷區代田中原七三三 山村耕花 推特入(日本南畫院同人) (裝三、院一)</p> <p>月耕、東美、支連、四五、東京府下品川町本宿二二 長野草風 推特特入入入入入 〇推特特入入入入入</p> <p>玉堂、支連、四六、東京府下日暮里町津邊町表道 荒井寛方 推(元國畫創作協會同人) (特一、入四)</p> <p>年方、歐印遊、五三、東京府下代々木町初音五三三 勝田蕉琴 推委委委入入入入入 (八一、入四)</p> <p>藤那、東美、印、四九、東京府下澁野川町四〇七 山田敬中 〇委委委推推推推推 (裝四、入五)</p> <p>玉章、六三、東京府下澁野川町田端四〇七 高取稚成 〇委委委推推推推推 (八一、入一)</p> <p>實義、六三、東京府下戸塚町源兵衛一三四 町田曲江 〇委委委委入入入入入 (八一、入一)</p> <p>廣業、白馬、歐遊、五二、千葉県市川町平田二〇九 大智勝觀 日本美術院同人 (八一)</p> <p>東美、四九、東京府下澁野川町角三二八六 吉村忠夫 推特特入出特入入入 (八一)</p> <p>東美、映丘、三三、東京府下東鴨町一一四一 田村彩天 推特特出特入入入入 〇推特特出特入入入入</p> <p>東美、廣業、四二、東京府下小石川原町一〇 伊東深水 特出特入入入入入入 (八一)</p> <p>清方、支連、三三、東京府下大井町瀧川一六二六 根上富治 推特特入入入入入入入 〇推特特入入入入入入入</p> <p>東美、三六、東京府下長崎町一八三六</p>	<p>直入、六五、京都御所御池下 田中柏陰 任推特出特入入入入 〇任推特出特入入入入</p> <p>廣業、契月、三九、京都御所少谷寺前町六九 登内微笑 京都御所少谷寺前町六九</p> <p>契月、三五、京都府下白梅町衣笠園 宇田荻郵 京都府下白梅町衣笠園</p> <p>契月、三九、京都府下衣笠村小坂原 金島桂華 京都府下衣笠村小坂原</p> <p>栖風、三九、京都府下衣笠村小坂原 矢野橋村 京都府下衣笠村小坂原</p> <p>春津、四一、大阪府下京阪沿線御殿山 幸松春浦 大阪府下京阪沿線御殿山</p> <p>竹外、三四、大阪府豊能郡豊中村吉通二二 小野竹喬 推(元國畫創作協會同人) (特一、入四)</p> <p>栖風、京繪、歐遊、四二、京都府下衣笠村等持院北町 大河内夜江 推特特入入入入入 〇推特特入入入入入</p> <p>契月、三八、神奈川縣大磯町山下町</p>
--	---

<p>日本美術院同人 廣湖、四四、東京府下小石川町二六 松本姿水 〇委委出特入入入入入 (八一)</p> <p>玉堂、四五、東京本郷駒込林町一九五 水上泰生 〇委委入入入入入入入 (八一)</p> <p>廣業、東美、四九、東京府下本郷本町二二 八木岡春山 推入入入入入入入入入 (八一)</p> <p>桂谷、五二、東京府下本郷本町三〇六 橋本靜水 推入入入入入入入入入 〇推入入入入入入入入入</p> <p>藤那、五五、東京本郷駒込林町四四五 橋本永邦 推入入入入入入入入入 〇推入入入入入入入入入</p> <p>交雅、四四、東京府下本郷本町五八二 廣瀨東畝 〇委委入入入入入入入 (八一)</p> <p>寬政、五六、東京府下本郷本町三四 山川永雅 〇委委入入入入入入入 (八一)</p> <p>朝音、五三、東京淺草橋場町一七七</p>	<p>東美、四一、東京下谷上野橋本町四三 服部有恒 推特特入入入入入入入 〇推特特入入入入入入入</p> <p>太平、南風、三五、埼玉縣與野郡南 眞道黎明 推特入出特入入入入 〇推特入出特入入入入</p> <p>(八一、入六) 磯田長秋 特特入出特入入入入 〇特特入出特入入入入</p> <p>朝音、五三、東京赤坂青山町五〇四五 伊東紅雲 〇委委委委入入入入入 (八一、入五)</p> <p>丹陵、五二、東京府下中野町打越二〇四〇 筆谷等觀 〇委委入入入入入入入 〇委委入入入入入入入</p> <p>日本美術院同人 雅那、東美、五五、東京府下杉並町下井草二〇〇九 小茂田青樹 元國畫創作協會同人 〇推特特入入入入入入入</p> <p>櫻湖、四〇、東京府下井草町田端七一八 狩野探令 美協會賞 推美、七五、東京下谷中清水町二〇 平田松堂 〇委委委委入入入入入 (八一、入五)</p> <p>玉堂、東美、四九、伯爵邸、東京神田駿河台鈴木町二二</p>
--	---





現代画家番付

一八

大木 豊平 入入入入入入入入  
 龍崎、三、東京市外湯野川町田端三四四  
 (入三) 桐谷 洗鱗 入入入入入入入入  
 永湖 雅邦、東美、歐米印遊、五三、千葉縣市川町青田  
 (入一、入二) 益田 田玉城 入入入入入入入入  
 玉草、東美、四九、東京市外高田町錦司、谷五八  
 入入入入入入入入  
 桂月、四七、東京市外駒澤町深澤一二二  
 (入一、入二) 戸室 臨泉 入入入入入入入入  
 玉草、四四、東京市外下谷町田代八八  
 (入一、入二) 野村 雪江 入入入入入入入入  
 (參一、參二、參三) 牛田 鶏村 入入入入入入入入  
 交文、五五、東京市外大森新井宿、四六七  
 (院展入六) 石塚 省三 入入入入入入入入  
 楓湖、三九、横濱根岸柏葉三五八一  
 入入入入入入入入  
 敬中、三四、東京市外杉並町天沼一〇八  
 (入三) 宮田 司山 入入入入入入入入  
 竹城、十、東京市外中野島町一四  
 (院展入二) 高瀬 春曉 入入入入入入入入  
 春華、四三、東京市外下谷津四〇〇  
 (院展入一) 網島 静観 入入入入入入入入  
 雅邦、東美、五四、東京市外杉並町田端四一五三  
 入入入入入入入入

大矢 峻嶺 入入入入入入入入  
 酒風、史遊、三七、東京市外神宮寺町北若宮  
 梅崎 朱雀 入入入入入入入入  
 關野、三四、京都府京都市中區南區  
 木村 丈夫 入入入入入入入入  
 三〇、京都府上野市上野町七七  
 梶原 緋佐子 入入入入入入入入  
 契月、三四、女、京都府京都市中區南區  
 (入四) 柴田 晚葉 入入入入入入入入  
 公親、春榮、京三、京都府京都市中區南區  
 川上 拙以 入入入入入入入入  
 京三、三、京都府京都市中區南區  
 京三、三、京都府京都市中區南區  
 (入四) 栗林 太然 入入入入入入入入  
 春華、四五、京都府京都市中區南區  
 (入三) 浦島 春濤 入入入入入入入入  
 春華、四五、京都府京都市中區南區  
 (院展入五) 大林 千萬樹 入入入入入入入入  
 永流、玉草、四三、奈良市高田町六五六、四  
 (入四) 中井 曠谷 入入入入入入入入  
 文展、酒風、五九、京都府京都市中區南區  
 入入入入入入入入

現代画家番付

二〇

中倉 玉翠 入入入入入入入入  
 (院展入六) 雅邦、玉草、五五、東京市外湯野川町田端二四一  
 入入入入入入入入  
 今井 爽邦 入入入入入入入入  
 雅邦、五八、東京市外湯野川町田端二四一  
 (入一) 竹原 朝風 入入入入入入入入  
 龍崎、三三、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入五) 村上 鳳湖 入入入入入入入入  
 玉草、五一、東京市外上野市上野町七七  
 (院展入三) 三浦 廣洋 入入入入入入入入  
 廣華、東美、四八、東京市外上野市上野町七七  
 (入一) 鹽崎 逸陵 入入入入入入入入  
 廣華、東美、四六、東京市外上野市上野町七七  
 (院展入五) 石山 太柏 入入入入入入入入  
 廣華、三九、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 廣華、三九、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 佐々木 林風 入入入入入入入入  
 東美、四六、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 (入三) 田代 古崖 入入入入入入入入  
 牛古、四八、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 (院展入一) 大坪 正義 入入入入入入入入  
 廣華、五五、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 (入三) 池田 龍甫 入入入入入入入入  
 廣華、四二、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 入入入入入入入入

土肥 蒼樹 入入入入入入入入  
 (入一) 酒風、京三、東京市外湯野川町田端二四一  
 入入入入入入入入  
 奥村 紅稀 入入入入入入入入  
 五三、三三、京都府京都市中區南區  
 鐘ヶ江 辰一 入入入入入入入入  
 三七、京都府京都市中區南區  
 吉田 鋤牛 入入入入入入入入  
 栗峰、京三、二八、京都府京都市中區南區  
 山口 八九子 入入入入入入入入  
 京三、四〇、京都府京都市中區南區  
 (院展入一) 甲斐 莊楠音 入入入入入入入入  
 廣華、京三、京都府京都市中區南區  
 新兒 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 佐々木 千早 入入入入入入入入  
 洋畫、四三、京都府京都市中區南區  
 (入一) 川本 參江 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 (入三) 川畑 春翠 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 (院展入一) 猪原 大華 入入入入入入入入  
 廣華、四二、東京市外杉並町天沼一〇七三  
 入入入入入入入入

日本画家

一九

日本美術協會委員  
 諸星 成章 入入入入入入入入  
 玉草、六一、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入二) 西村 青歸 入入入入入入入入  
 東美、四六、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入一) 山口 草平 入入入入入入入入  
 廣華、四二、東京市外湯野川町田端二四一  
 (入一) 關 藍舟 入入入入入入入入  
 玉草、五七、東京市外湯野川町田端二四一  
 新派、龍崎、六二、東京市外湯野川町田端二四一  
 和亭、六四、東京市外湯野川町田端二四一  
 久保田 米齋 入入入入入入入入  
 父米、草雲、雅邦、五七、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入二) 久保田 金徳 入入入入入入入入  
 東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入一) 藤岡 紫峯 入入入入入入入入  
 玉草、五〇、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入二) 田村 豪湖 入入入入入入入入  
 永湖、五五、東京市外湯野川町田端二四一  
 日本美術協會委員  
 久保田 米齋 入入入入入入入入  
 父米、草雲、雅邦、五七、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入二) 久保田 金徳 入入入入入入入入  
 東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入一) 藤岡 紫峯 入入入入入入入入  
 玉草、五〇、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入二) 田村 豪湖 入入入入入入入入  
 永湖、五五、東京市外湯野川町田端二四一

日本美術協會委員  
 柿内 青葉 入入入入入入入入  
 清方、三七、東京市外湯野川町田端二四一  
 入入入入入入入入  
 池澤 青峯 入入入入入入入入  
 龍崎、三一、東京市外湯野川町田端二四一  
 (入一) 武井 晃陵 入入入入入入入入  
 東美、三九、東京市外湯野川町田端二四一  
 (入一) 西尾 廣耕 入入入入入入入入  
 廣華、四三、東京市外湯野川町田端二四一  
 (入一) 伊藤 龍雁 入入入入入入入入  
 廣華、四八、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入三) 玉村 方久斗 入入入入入入入入  
 日光、三三、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入三) 井村 方外 入入入入入入入入  
 廣華、三九、東京市外湯野川町田端二四一  
 寬誠、日光、四四、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入三) 田口 黃葵 入入入入入入入入  
 東美、三三、東京市外湯野川町田端二四一  
 多門、四五、東京市外湯野川町田端二四一  
 (院展入一) 高瀬 五畝 入入入入入入入入  
 東美、五一、東京市外湯野川町田端二四一  
 日本美術協會委員  
 榑崎 鐵香 入入入入入入入入  
 關野、三三、京都府京都市中區南區  
 野添 平米 入入入入入入入入  
 京三、三五、京都府京都市中區南區  
 (入一) 谷角 日安春 入入入入入入入入  
 契月、三七、京都府京都市中區南區  
 島田 滴洲 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 長井 大有 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 (入三) 江口 鶴州 入入入入入入入入  
 京三、三九、京都府京都市中區南區  
 (院展入一) 近藤 樵仙 入入入入入入入入  
 廣華、六三、大阪府北河内郡香里町  
 (入二) 松本 仙舉 入入入入入入入入  
 春華、五〇、京都府京都市中區南區  
 (入一) 小柴 春泉 入入入入入入入入  
 廣華、三三、京都府京都市中區南區  
 横山 葩生 入入入入入入入入  
 文展、三〇、名古屋市中區五番町三三  
 契月、三一、京都府京都市中區南區  
 大幸 靈泉 入入入入入入入入  
 契月、三一、京都府京都市中區南區

現代畫家番附

野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小早川清	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
市原壽一	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
齊藤弓弦	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
都筑眞琴	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
幕田青雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
增田千代松	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
岩田正己	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
大島住山	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
長谷川光孝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
太田一彩	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
篠田柏邦	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
恩田得壽	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
長山はく	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
増田正宗	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
藤井霞郷	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
島田柏樹	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
松島白虹	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
坂内青嵐	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
廣川操一	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
本田蕉風	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
佐藤華岳	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
松元道夫	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
寺田蘆秋	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
和氣春光	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
山口大干	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
麻田辯次	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
加地種月	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
吉藤義雄	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
長瀬翠塘	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
大高爲山	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
柳澤眞一	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
今尾景春	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
中野草雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
石川英鳳	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
平尾竹霞	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
平野古桑	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
松尾晚翠	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
岡本芳水	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
高橋秋華	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
松永冠山	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
三宅鳳白	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
戸田北遙	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
梅村素溪	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	野口謙次郎	八八〇〇〇〇〇〇〇〇

三三

日本畫家

現代畫家番附

上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
清水有聲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
加藤國堂	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
松尾晃華	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小野竹桃	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
近藤乾年	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
中山秋湖	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
榎戸觀海	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
木村棲雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
岩田豐磨	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
乾南陽	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
福永公美	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
推塚蕉華	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
渡邊菜渚	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
越塚友邦	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
田中文雄	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
大塚烏丸	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
淺野綠耳	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
半田鶴一	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小松均	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
歸山千倉	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
加藤陶陵	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
藤田古郷	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
大橋基甫	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
有井祥雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
稻垣錦莊	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
細谷秀毅	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
立脇泰山	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
榎野南陽	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
奥村木巢	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
柴原魏象	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
榑原始更	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小島紫光	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
富田范溪	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
武内免江	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
水野燕青	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
豊島停雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
島村舜年	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小猿雪堂	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
金森觀陽	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
石川有隣	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
岡文清	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
水野青亭	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
長嶺折雲	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
小林春雄	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇
森谷南人	八八〇〇〇〇〇〇〇〇	上原桃畝	八八〇〇〇〇〇〇〇〇

三四

日本畫家



日本畫家

三三

〇八〇〇〇〇〇〇〇	玉堂、四二、福島縣東白川郡常磐村	〇八〇〇〇〇〇〇〇	加藤、三三、京都府外京橋東茶屋
〇八〇〇〇〇〇〇〇	小川、波邊、京都市外神保町五	〇八〇〇〇〇〇〇〇	國友、豐本、京都府小倉
〇八〇〇〇〇〇〇〇	丹波、波邊、京都市外神保町五	〇八〇〇〇〇〇〇〇	羽田、柏市、京都市外神保町五
〇八〇〇〇〇〇〇〇	新宮、五〇、京都市外大久保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	堀見、青嵐、京都市外神保町五
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、三五、京都市外小日向町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	渡邊、幾春、京都市外神保町五
〇八〇〇〇〇〇〇〇	石田、棧窓、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	中、啓牛、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	荒木、月、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	本、萬翠、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	山田、其山、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	岡田、泰祥、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	永湖、四三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	澤、白鷗、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	南宗、五九、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	稻村、虹亭、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	月耕、四九、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	野原、櫻洲、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	寬政、四九、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	關雪、三三、京都府東山崎

三二

日本畫家

三三

〇八〇〇〇〇〇〇〇	山本、芳堂、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	戸田、天波、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	中、月觀、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	神戶、更圓、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五五、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	勝、賀、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五二、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	久保、井、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	大、亦、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	松、井、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	小、西、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	淺、井、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	山本、朝雲、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	井、倉、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	竹、內、京都市外神保町三

三二

現代畫家番附

三〇

〇八〇〇〇〇〇〇〇	白井、剛三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	竹原、伸三、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	角田、磐谷、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	不二、木阿古、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	成、芳之、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	福山、津水、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	新藤、二九、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	柴、田、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、二三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	勝、三二、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	龍崎、二四、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	繁崎、三六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、三八、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	恒富、三三、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	十畝、四五、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	光雅、三五、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	多門、四一、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、三四、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	廣業、三一、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	岩崎、又次郎、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、四六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	千種、二六、女、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	廣業、四三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	京橋、三一、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	歌中、三八、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	玉堂、三七、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	多門、四五、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	廣業、三三、京都市外神保町三

現代畫家番附

三二

〇八〇〇〇〇〇〇〇	福實、五三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	秋野、靜、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五二、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五三、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五三、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五三、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三
〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三	〇八〇〇〇〇〇〇〇	東美、五六、京都市外神保町三

昭和五年度改正 現代画家番付

現代画家番付

Table of modern painters (left page), listing names like 上野 秀雄, 藤 敏, 岡田 眞, etc., with birth dates and locations.

三四

Table of modern painters (right page), listing names like 柳生 蓮, 石井 早, 村 雅彦, etc., with birth dates and locations.

三五

現代画家番付

Table of modern painters (left page), listing names like 印 高子, 高本 喜代子, 小坂 勝人, etc., with birth dates and locations.

三六

Table of modern painters (right page), listing names like 巖 崎, 石川 一, 伊藤 滄洲, etc., with birth dates and locations.

三七





岩井昇山 岩齊五七、埼玉縣大里郡岩井町  
 加藤棧圃 翠雲二〇、女、東京市外中谷町五五五  
 野口紅樹 洗禮、東京市外中谷町五五五  
 菊地素石 佛齒、碎嵐、四二、東京市外中谷町四〇〇  
 中川千穂 秀秋、碎琴、三八、東京市外中谷町三三四  
 青柳琴徳 泉亭、六三、長野縣下高井郡湯田  
 青木仙坡 碎嵐、六七、東京市外中谷町三三〇  
 天野雨外 新派、四一、靜岡縣志太郡野田町  
 阿部宇雅 南宗派、七五、新潟縣北蒲原郡木崎町  
 石島竹崖 南宗派、六〇、東京市外中谷町一八三三  
 石野東耕 素明、三七、神奈川縣川崎市磯町一三  
 川田墨鳳 西北六七、東京市外中谷町五五四  
 三尾光雲  
 川端茂章 玉章、四七、東京市外中谷町上六六六  
 上條義守 南北、五四、長野縣中野郡里山邊町  
 佐々木綿嶺 碎嵐、五六、東京市外中谷町二四  
 杉浦俊香 南宗、八二、東京市外中谷町九五九  
 鈴木雨溪 兩谷、五七、千葉縣香取郡高成町  
 鈴木岳陽 玉章、五八、東京市外中谷町一六〇三  
 玉井華秋 南北、東京市外中谷町三三〇  
 高田常齋 副宗、六三、横濱市中村町山上一〇一  
 土屋漁洋 南宗、五三、東京市外中谷町九九二  
 橋本桃仙 南北、七九、群馬縣新田郡登野村  
 林探樂 櫻美、五六、東京市外中谷町一七  
 橋本古竹 南宗、七五、東京市外中谷町四四  
 松元徹巖 寫生、五五、東京市外中谷町三九九

水谷芳年 (一) 南北、名古屋西區本町町  
 (二) 青山翠光 芳文、大阪府東區堂島一  
 (三) 山口瑞雨 泉亭、名古屋市中區東區  
 (四) 山康晴華 京繪、四、京都市中區  
 (五) 西村秀岳 百年、京都、御池通川原町東  
 (六) 上田龍水 京繪、京都府東門外  
 (七) 長谷川樂山 京繪、京都府小倉町東  
 (八) 水越松南 京繪、四、神戸市水湊町大徳宮前  
 (九) 古谷若泉 京繪、四、京都市小川通中立賣  
 (一〇) 村松雲外 關山、六〇、京都市堺町野池  
 (一一) 大谷玉華 玉章、島根縣安渡郡長久村  
 (一二) 吉川耕溪 桐風、大阪府天王寺町  
 (一三) 鈴木華嶺

田中一太郎 (一) 來徳、六六、京都府下成松町  
 (二) 里村對岳 京美、四五、京都市高倉町六角五  
 (三) 泉輝月 香越、京都府京町佛光寺南  
 衛藤晴村 竹園、三、京都市外中谷町  
 調本更生 津徳、二四、大阪府南區東清水町六〇  
 狩野千彩 千種、二四、女、大阪府東區能勢町  
 近藤白鳳 翠嶺、名古屋西區區橋町五  
 玉城木一 京繪、京都府市原谷  
 二宮新一 京繪、四、京都市南區南船場  
 谷口竹鳩 櫻谷、四〇、京都府龜岡町  
 安田梅晃 翠嶺、三五、京都府北區  
 三浦理親 京繪、三五、愛知縣豐田郡須賀賀  
 稻垣晴雲 南宗派、三五、女、京都府中谷町三

四六

水野秀方 年方、五五、女、東京市外中谷町三六  
 森田華香 寫生、五二、東京本郷區込邊町七八  
 渡邊半溪 南宗、七二、東京本郷區千駄木町一五一  
 渡邊晨 寫生、五九、東京市外中谷町三三三  
 渡邊白民 白楓、六三、東京本郷區千駄木町二八  
 橋本邦助 (一三) 橋本邦助 東美、四六、東京本郷區千駄木町三三  
 岡島徹湖 京美、四〇、東京市外中谷町一八伊井町  
 牧野永昭 永徳、五〇、東京市外中谷町三三  
 小林立堂 小虎、東京市外中谷町五七  
 加藤容山 小虎、東京市外中谷町八九  
 瀧川洗風 洗禮、東京市外中谷町田端五一三  
 日高秋鳳 泰生、三〇、東京本郷區千駄木町一三  
 新井耕雲

日本美術協會委員

石川素行 玉章、三九、東京市外中谷町九九  
 兒玉素行 翠雲、四〇、東京市外中谷町三三六  
 大塚見陵 風景、四〇、東京市外中谷町三〇七  
 奧村藻山 四八、東京本郷區込邊町六  
 石原春水 四一、横濱市本牧原一七五  
 並木瑞穂 (院展入二) 戶塚、寸、一五〇  
 歸山秀子 (院展入二) 二七、東京市外中谷町一〇六  
 高木右泉 (院展入二) 二六、東京市外中谷町西原九四六  
 奧村土牛 (院展入一) 五三、東京市外中谷町二四八  
 石本光太郎 (院展入一) 四一、東京本郷區千駄木町七  
 余井新梅 (院展入一) 三二、東京市外中谷町長者九二六七吉田方

石橋謙吾 竹齋、三三、京都府持院北町功徳院  
 澤田實 京都府伏見区砂川三三井方  
 小野朱竹 京都府外中谷町持院山内小野方  
 猪原徑生 (一) 松、下、立、資、御、園  
 松雲嶺 寬秋、島根縣松江郡都賀村  
 内海吉堂 (院展入一) 文珠、八一、京都高倉二條北  
 松本道夫 京繪、三四、京都府宇治町塔ノ島  
 井村方外 (院展入二) 華譽、五〇、京都清水清水高松園  
 岩田秀耕 (院展入二) 華譽、三六、京都御所御幸二條南  
 青山孝好 (院展入二) 芳文、四〇、京都府西條町  
 櫻井文峰 (院展入一) 英秀、三九、京都北白川町  
 中津川涼風 (院展入一) 櫻風、三八、京都日暮通入分銅町  
 須佐天齋 (院展入一) 寫生、二九、大阪府日本橋筋四〇五五  
 水梅谷

四八

現代画家番付

(院展入) 馬場主観  
 (院展入) 橋本秀詞  
 (院展入) 西尾日和  
 (院展入) 鈴木兆皓  
 (院展入) 鈴木五朗  
 (院展入) 鈴木大蔵  
 (院展入) 柴田宗光  
 (院展入) 柴田春光  
 (院展入) 島田訥郎  
 (院展入) 小谷津任牛  
 (院展入) 青樹逸岳  
 (院展入) 平野千竹  
 (院展入) 石川秀徳

(院展入) 栗野観風  
 (院展入) 高橋菱雨  
 (院展入) 福田翠光  
 (院展入) 結谷光俊  
 (院展入) 清水古關  
 (院展入) 岡本大更  
 (院展入) 小林雨郊  
 (院展入) 水越松南  
 (院展入) 茨木杉風  
 (院展入) 菊地公明  
 (院展入) 小合友之助  
 (院展入) 内藤晴州  
 (院展入) 藤田仙

武内桂舟  
 杉浦非水  
 菅野梁川  
 菅野清忠  
 鳥居清三  
 吉井相洲  
 秀武三郎  
 竹久夢二  
 角田南山  
 平岡幽岳  
 翠雲四郎  
 内山静香  
 山田秋敏  
 浮世四郎  
 半谷街山  
 南宗四六  
 田能村小竹  
 南宗五一  
 田中鐵齋  
 南宗五八

新田自貞  
 玉越雲洞  
 大石龍二  
 岡田琴湖  
 岡田櫻厓  
 南宗六六  
 大浦秀岳  
 大久保月樵  
 大場澄翁  
 南北七〇  
 小瀬八一  
 高野隆雅  
 南北八二  
 瀧脇晴華  
 伊藤武陵  
 藤田真積  
 藤田三三

日本画家

五二

現代画家番付

津田月秋  
 土門桃陽  
 松田勝岳  
 狩野五三  
 松原海雲  
 桂月三三  
 市野梧堂  
 小西秀範  
 日向紫翠  
 新島四一  
 南宗三六  
 南宗三七  
 南宗三八  
 南宗三九  
 南宗四〇  
 南宗四一  
 南宗四二  
 南宗四三  
 南宗四四  
 南宗四五  
 南宗四六  
 南宗四七  
 南宗四八  
 南宗四九  
 南宗五〇

中島雅堂  
 鈴木巖谷  
 宮田陽堂  
 大品春観  
 好讀五〇  
 三瓶吳水  
 波邊雪蜂  
 小華六一  
 押見華境  
 小川鴻城  
 浅倉玉豊  
 名取春仙  
 宮部秋芳  
 宮部春樹  
 石田一郷  
 萱島秀峰  
 野間墨華  
 香取卿雲  
 岡田旭峰  
 新渡四三  
 琴石六六  
 南宗五九  
 南宗六〇  
 南宗六一  
 南宗六二  
 南宗六三  
 南宗六四  
 南宗六五  
 南宗六六  
 南宗六七  
 南宗六八  
 南宗六九  
 南宗七〇

坂口一草  
 佐藤耕四  
 坂田耕一  
 武山三六  
 齊藤龍江  
 内田青薫  
 岡田萬樹  
 二八  
 二九  
 三〇  
 三一  
 三二  
 三三  
 三四  
 三五  
 三六  
 三七  
 三八  
 三九  
 四〇  
 四一  
 四二  
 四三  
 四四  
 四五  
 四六  
 四七  
 四八  
 四九  
 五〇

多門  
 中島雅堂  
 鈴木巖谷  
 宮田陽堂  
 大品春観  
 好讀五〇  
 三瓶吳水  
 波邊雪蜂  
 小華六一  
 押見華境  
 小川鴻城  
 浅倉玉豊  
 名取春仙  
 宮部秋芳  
 宮部春樹  
 石田一郷  
 萱島秀峰  
 野間墨華  
 香取卿雲  
 岡田旭峰  
 新渡四三  
 琴石六六  
 南宗五九  
 南宗六〇  
 南宗六一  
 南宗六二  
 南宗六三  
 南宗六四  
 南宗六五  
 南宗六六  
 南宗六七  
 南宗六八  
 南宗六九  
 南宗七〇

日本画家

五三





洋畫家欄

(畫展四、數) (文展時代) (傍書ハ、出身年) (畫展四、數) (文展時代) (傍書ハ、出身年)

中村不折 (任十一) 岡田三郎助 (任十一) 藤島武二 (任三、參) 南薰造 (任六) 鹿子木孟郎 (任六) 山本鼎 (任六) 石橋和訓 (任六) 石井柏亭 (任六) 山下新太郎 (任三、參) 白瀧幾之助 (任三、參) 石川寅治 (任三、參) 片田德郎 (任三、參) 中澤弘光 (任三、參) 長原孝太郎 (任三、參) 吉田博 (任三、參) 小林萬吾 (任三、參) 有島生馬 (任三、參) 太田喜二郎 (任三、參) 金山平三 (任三、參) 津田青楓 (任三、參) 山本森之助 (任三、參) 久米桂一郎 (任三、參) 森田恒友 (任三、參) 安井曾太郎 (任三、參)

田邊至 (任三、參) 大久保作次郎 (任三、參) 永池秀太 (任三、參) 正宗得二郎 (任三、參) 湯淺一郎 (任三、參) 三宅克巳 (任三、參) 藤田嗣治 (任三、參) 高間惣七 (任三、參) 梅原龍三郎 (任三、參) 倉田白羊 (任三、參) 熊谷守一 (任三、參) 青山熊治 (任三、參) 新井完 (任三、參) 齋藤與里 (任三、參) 長谷川昇 (任三、參) 奧瀬英三 (任三、參) 相馬其一 (任三、參) 鍋井克之 (任三、參) 井垣嘉平 (任三、參) 黒田重太郎 (任三、參) 小出楢重 (任三、參)

熊谷美彦 (任三、參) 柚木久太 (任三、參) 清水良雄 (任三、參) 中川紀元 (任三、參) 鈴木千久馬 (任三、參) 齋藤豊作 (任三、參) 大野隆徳 (任三、參) 小柴錦侍 (任三、參) 金澤重治 (任三、參) 石井鶴三 (任三、參) 熊谷守一 (任三、參) 梅原龍三郎 (任三、參) 倉田白羊 (任三、參) 熊谷守一 (任三、參) 青山熊治 (任三、參) 新井完 (任三、參) 齋藤與里 (任三、參) 長谷川昇 (任三、參) 奧瀬英三 (任三、參) 相馬其一 (任三、參) 鍋井克之 (任三、參) 井垣嘉平 (任三、參) 黒田重太郎 (任三、參) 小出楢重 (任三、參)





現代画家番付

Table of modern painters with names and birth years. Includes names like 井上正勝, 山崎善三, 武内鶴之助, etc.

九〇

以下順序不同

Table of modern painters with names and birth years. Includes names like 帝四金井文彦, 長屋勇三, 石川誠三, etc.

九一

現代画家番付

Table of modern painters with names and birth years. Includes names like 大橋孝吉, 氏家次郎, 矢野龍溪, etc.

一〇〇

彫刻家欄

Table of sculptors with names and birth years. Includes names like 高村光雲, 山崎朝雲, 建島大夢, etc.

一〇一





帝一 佐藤金次郎(東京)	同 吉開伊喜藏(東京)	同 田中美美男(同)	平賀 豊(大阪)
同 長 愛之(同)	同 川島雄三(遠賀)	同 河原金吾(同)	島田 鑄太郎(同)
同 高野 治義(同)	同 岩田 祥光(東京)	同 奥田 勝(同)	篠田 喜太郎(同)
同 小林 章(同)	同 太田 重徳(同)	同 角岡 清一(同)	清水 彦太郎(東京)
同 木村 銀川(同)	同 宮地 辛彦(同)	同 早乙女 龜次(東京)	廣瀬 喜六(同)
同 菅原 安男(同)	同 村井 次郎(同)	同 吉野 七雄(同)	三木 弘(朝鮮)
同 大野 隆一(同)	同 白井 大雲(同)	同 行松 繁三郎(大阪)	小野 北水(東京)
同 宮島 光正(同)	同 竹林 勇(同)	同 西村 新一郎(同)	齋藤 種臣(同)
同 土井 要輔(同)	同 鍵山 幸夫(同)	同 佐藤 武造(東京)	薄 松太郎(同)
同 北原 正業(同)	同 長澤 幸夫(同)	同 關 雅雄(大阪)	元川 克己(神戶)
同 西川 爲善(同)	同 荒谷 芳雄(京都)	同 望月 正治(大阪)	森本 謙次(兵庫)
同 大野 明山(同)	同 岩井 尊人(東京)	同 森田 繁太郎(巴里)	森田 四郎兵衛(同)
同 入江 美法(同)	同 中野 光章(同)	同 福島 繁成(大阪)	樋口 治一郎(同)
同 佐藤 光重(同)	同 津上 昌平(同)	同 安藤 邦衛(東京)	
同 服部 不二(同)	同 小藤 敬三(同)	同 吉田 博一(同)	
同 高見 高重(同)	同 工藤 敬三(同)	同 山上 二郎(兵庫)	
同 高坂 柏雲(同)	同 下谷 真一(同)	同 福島 繁成(大阪)	
同 井口 喜夫(同)	同 山畑 阿利一(同)	同 黑田 繁成(大阪)	
同 小松 保光(東京)	同 尾崎 一草(同)	同 中宮 真郷(同)	

工 藝 家 欄

宮川香山 (帝室技藝員)	瀧川惣助 (七寶、京都市下京區)
清風成山 (帝國美術院展覽會委員)	清水六兵衛 (赤坂、京都市下京區)
板谷波山 (帝國美術院展覽會委員)	赤塚自得 (京都市芝區新橋町一六)
津田信夫 (帝國美術院展覽會委員)	香取秀眞 (京都市外灘野川町田端四三八)
清水龜藏 (特種)	高村豊周 (金工、京都市本郷區法林町一五)
森川紫山 (特種)	北原千祿 (東美、金工、京都市外灘野川町上駒三九〇)
山鹿精華 (出特)	佐々木象堂 (京都市外灘野川町一、二)

澤田宗山 (特入)	岩田藤七 (京都市牛込區辨天町八〇)
山形駒太郎 (特入)	海野清 (東京市本郷區駒込町三二七)
山崎覺太郎 (特入)	六角紫水 (東京市小石川區久堅町七四)
迎田秋悅 (特入)	杉田禾堂 (東京市外灘野川町上駒三九〇)
河面冬山 (特入)	高井白陽 (東京市外灘野川町上駒三九〇)
辻村松華 (特入)	鈴木古拙 (東京市外灘野川町上駒三九〇)
堆朱揚成 (特入)	河村靖山 (京都市深草町福福土九二)
廣川松五郎 (特入)	仰木政齋 (東京市外灘野川町上駒三九〇)

工 藝 家 欄

沼田一雅 (入)	植松包美 (東京市本郷區坂下町三六)
船越春珉 (入)	龍村平藏 (築橋、五、六、京都市)
西村敏彦 (入)	大島如雲 (東京市外灘野川町上駒三九〇)
吉田包春 (入)	石井吉次郎 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
河井寛次郎 (入)	戶島光阿彌 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
渡邊松華 (入)	石井吉次郎 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
和田香苗 (入)	著尾白風 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
鈴木啓一 (入)	河合卯之助 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
鈴木啓一 (入)	杉浦非水 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
井高歸山 (入)	藤井達吉 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
加藤居山 (入)	富本憲吉 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
都筑幸哉 (入)	富本憲吉 (京都市外灘野川町上駒三九〇)
北原三佳 (入)	田口啓次郎 (京都市外灘野川町上駒三九〇)

科学研究費成果報告書

基盤研究（B） 研究課題／領域番号二三K二五二八四

令和五～七年度

## 近代日本美術史における美術商に関する基礎的研究

〔編集・発行〕

角田拓朗

鈴木愛乃

神奈川県立歴史博物館

〒二三一―〇〇〇六

神奈川県横浜市中区南仲通五―六〇

〇四五―二〇一―〇九二六

〔発行年月日〕

令和八年（二〇二六）三月十七日

〔印刷〕

株式会社 TAKT-JAPAN

©2026 takuro tsunoda & yoshino suzuki